

## 6 解散式・解散交歓会

12月12日18時から、にっぽん丸船内ドルフィンホールにて解散式を行った。

始めに、和田昭夫内閣府青年国際交流担当室長から各国NLに参加証書を授与した。続いてPYの代表として各国のYLに参加証書を授与した。その後、和田室長から挨拶があり、続いてPY代表としてMr. Gregy Gustavo

Tuerah（インドネシアPY）が挨拶をした。

続いて、18時45分から、ダイニングルームで解散交歓会を開催した。小野田壮内閣府政策統括官から挨拶があり、続いてPY代表としてMr. Syed Siddek Bin Barakath（マレーシアYL）が挨拶をした。

## 7 下船・帰国

12月11日9時15分から、NL、YLに対して、下船手続きの説明を行った。次に、国別ミーティングの後、国ごとに設定した荷物置場に各自の荷物を移動した。

12月13日6時から、日本以外のPYは国別に順次ダイニングルームに集合し、それぞれバスで成田国際空港又は羽田空港に向かい、帰国した。

## 8 日本参加青年の帰国後研修

日本参加青年38名に対し、12月13日～14日の2日間、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて帰国後研修を行った。日本参加青年は事業

の振り返りを行うとともに、事業報告会の準備を進めた。また、船内で話し合い、帰国報告会で発表した事後活動プロジェクトについて、更に議論を深めた。

## 第5章

# ディスカッション活動・事後活動セッション



# 1 ディスカッション活動・事後活動セッションの概要

## (1) 目的

ディスカッション活動は、(1) 各国における様々な分野の実情について理解を深め、各分野の課題解決のための活動への意欲を高めると共に、(2) 率直かつ活発な意見交換を通じ、(2-a) 相互理解の促進、(2-b) 集団の中での意見のやり取りをする能力の向上、及び(2-c) 人前でのプレゼンテーション能力の向上を図ることを目的として実施するものである。

さらに、ディスカッション活動の成果を活かして、事後活動（事業後の社会活動）を行う際に必要な具体的な知識やスキルを身に付けさせると共に、参加青年（PY）に事後活動への具体的な活動案を考えさせ、積極的な参加を促すことを目的として実施するものである。

事後活動セッションは、各国事後活動組織及びその連携組織であるSSEAYPインターナショナルについての理解を深めさせること、また、自分たちが考えた活動案を事後活動で実現させるために、より具体的な企画・立案を行うことを目的として実施するものである。

## (2) テーマ

本年度のディスカッション活動・事後活動セッションにおける共通テーマは「青年の社会活動への参加」とし、その下に8つのグループ・テーマを設けた。PYは、グループ・テーマごとに各国ほぼ同数で構成されるディスカッション・グループ（DG）に分かれ、意見交換を行った。

### a. 共通テーマ「青年の社会活動への参加」

青年は、リーダーとして社会の活性化と発展に寄与する役割を担っている。各参加国での青年の社会活動への参加の実情を理解し、様々な分野において青年が貢献し得る活動について討議することによって、青年自らが社会参加の重要性を再認識し、PYの事後活動への意欲を高め、積極的な参加を促すことを目指す。

### b. グループ・テーマ

- ① グローバル化の功罪
- ② 情報とメディア
- ③ 国際関係（日・ASEAN協力）
- ④ 生活習慣病対策
- ⑤ 質の高い教育
- ⑥ 不平等の是正
- ⑦ レジリエントで持続可能な都市づくり
- ⑧ 青年の起業

## (3) 実施方法

### a. ディスカッション活動

乗船前に、PYの希望に基づき、所属するDGを決定した。所属DGの決定後には、DGごとに担当ファシリテーターから

事前課題が課せられた。PYは、ディスカッション活動への参加に当たり、各グループ・テーマに関する知識を深めるとともに、事前課題に取り組むなど必要な準備を行った。

日本国内活動では、ディスカッション活動への導入として、グループ・テーマに関連した課題別視察を実施した。

船内活動では、導入プログラムにおいて各国の具体的な社会活動事例の発表を行った後、DGごとに、ファシリテーターの指導を受けながらグループ・ディスカッションに参加した。各DGは、ファシリテーターがその運営を統括し、また、各DG及び各国で選出されたディスカッション活動運営委員がファシリテーターを補佐した。

カンボジア訪問国活動では、グループ・ディスカッションの議論をより充実させるため、グループ・テーマに関連した課題別視察が設定された。PYは、課題別視察先において、活動を具体的に体験し訪問先の人々と交流する場を持つことにより、その分野における「青年の社会活動への参加」についての認識を深めた。

DGごとに5回のセッションを行った後、PYが事業後に社会活動を行う際に必要な具体的な知識やスキルを学ぶことを目的とし、企画・実践に向けての取組方をファシリテーターから学ぶセッションを行った。その後、DG別にファシリテーターとディスカッション活動運営委員が進行役となり、ワークショップ形式により、具体的かつ実践的な企画・立案の演習を行った。

各DGは、成果発表会において討議内容の成果発表を行うとともに、ディスカッション・レポートを作成した。

### b. 事後活動セッション

事後活動セッションIでは、各国事後活動組織代表者が全体会を実施し、各国事後活動組織の連携組織であるSSEAYPインターナショナルについて紹介すると共に、その目的・活動状況についての理解を深め、PYのSSEAYPインターナショナルや各国事後活動組織の活動への積極的な参加を促した。併せて、過去のPYが事業中に発案したプロジェクトの、その後の実施状況・成果を紹介し、PYがより具体的に事後活動をイメージできるようにした。

事後活動セッションIIでは、国別に各国事後活動組織代表者が進行役となり、各国における事後活動組織や過去のPYによる活動状況や事例について理解を深めた。

事後活動セッションIIIでは、国別にPYが事後活動として各国で取り組んでみたいことやプロジェクトについて議論し、各国事後活動組織代表者のアドバイスを受けながらプロジェクト案の作成に取り掛かった。

事後活動セッションIVでは、国別に事後活動セッションIIIで出てきたプロジェクト案を更に具体化し、完成させ、また、帰国報告会に向けた発表の準備を行った。

## (4) ファシリテーター

ディスカッション・グループ	国名	性別
① グローバル化の功罪	日本	男
② 情報とメディア	シンガポール	女
③ 国際関係（日・ASEAN協力）	フィリピン	女
④ 生活習慣病対策	ネパール	女
⑤ 質の高い教育	タイ	男
⑥ 不平等の是正	ブルネイ	男
⑦ レジリエントで持続可能な都市づくり	インドネシア	男
⑧ 青年の起業	シンガポール	男

## (5) 各国事後活動組織代表者

国名	事業参加年	性別
日本	2001/2002	女
カンボジア	2014	男
タイ	2010	男
ラオス	2010	男
インドネシア	1997	女
マレーシア	2011	男
ブルネイ	2008	男
ミャンマー	2002	女
フィリピン	1997	女
シンガポール	2000	男
ベトナム	2011	女



各国事後活動組織代表者が和田昭夫内閣府青年国際交流担当室長を表彰訪問する（12月13日）

【プログラムの流れ】

乗船前		PYの希望に基づき、所属グループを決定 PYは各国にて事前課題等の準備
日本国内活動	10月29日 19:45～21:00 10月30日	グループ別ミーティング (ディスカッション活動運営委員の選出) グループ・テーマに関連した課題別視察を実施
船内 ディスカッション 活動	11月3日 11:30～12:45 14:15～17:00 11月4日 10:00～12:45	ディスカッション活動運営委員会 (ディスカッション活動の運営方法の協議、導入プログラムの準備)
	11月5日 14:15～17:00	導入プログラム (ディスカッション活動の主旨・実施方法等の説明、 共通テーマに基づいた各国の社会活動事例発表)
	11月6日 14:15～17:00 11月7日 10:00～12:45 11月8日 10:00～12:45 11月9日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションI グループ・ディスカッションII グループ・ディスカッションIII グループ・ディスカッションIV
	カンボジア 訪問国活動	11月11日
船内 ディスカッション 活動	11月14日 14:15～17:00	グループ・ディスカッションV
	11月15日 10:00～12:45 14:15～17:00	事後活動の企画・実践に向けての導入 事後活動の企画・実践に向けたワークショップ
	11月22日 10:00～12:45 14:15～17:00	まとめ ディスカッション活動運営委員会
	11月23日 10:00～12:45	成果発表会の準備・DG毎のレポート作成
	11月28日 10:00～17:00	成果発表会
	11月29日 10:00～12:45	自己評価
船内 事後活動 セッション	12月5日 10:00～12:45	I (全体会) (SSEAYP国際的及び各国事後活動組織の活動事例紹介)
	12月6日 10:00～12:45	II (国別) (事後活動組織と既参加青年による活動の紹介)
	12月7日 10:00～12:45	III (国別) (各国で取り組んでみたいことや プロジェクトについての議論及びプロジェクト案の作成)
	12月9日 10:00～12:45	IV (国別) (プロジェクト案の完成、帰国報告会での発表準備)
	12月12日 16:00～17:30	帰国報告会 (国別にプロジェクト案の発表)

## 2 ディスカッション活動・各グループのレポート

### (1) グローバル化の功罪グループ

ファシリテーター: 國井紅秋

PY: 44名

#### A. グループ・テーマ・インフォメーション

##### a. テーマの詳細

近年のヒトやモノ、資本が自由に越境するグローバル化の進展に起因する社会や経済の様々な変化について認識する。そして、理想の社会の将来像や、次世代の核としての青年がグローバル化にどう対峙するのかについて議論する。

##### b. 期待される成果

- (1) モノやサービスの移動、(2) 資本の移動、(3) ヒトの移動、(4) 技術と情報、の移動に見られるグローバル化の功罪両面につき幅広い知識と理解を得る。
- 自らの考えを伝え、他者の考えを理解・分析し、建設的な反応を組み立てる能力を身に付ける。

##### c. 身につく能力

###### 知識

- グローバル化の功罪両面についての知識、潜在的な解決策及び解決策主眼のプレゼンテーション

###### スキル

- 実践的プレゼンテーション・スキル: (1) マーケティング、(2) 営業、(3) 分析、(4) コンサルティング、のうちのひとつ

###### 行動

- 状況分析及び解決策策定過程への積極的かつ建設的な参加

#### B. 事前課題

##### 個人課題1

- (1) モノやサービスの移動、(2) 資本の移動、(3) ヒトの移動、(4) 技術と情報の移動に見られるグローバル化、につき、それぞれ50ワードで最も良い側面と最も悪い側面を述べること。
- 自分が伸ばしたい実践的なスキルを以下から一つ選ぶこと。
  - マーケティング
  - 営業
  - 分析
  - コンサルティング
- 自らの仕事や社会活動がいかんしてグローバル化の良い面を広げ、悪い面を食い止めることに繋がるか100ワードで述べること。

#### 国別課題1

- 国連の持続可能な開発目標 (SDGs) についてセッション毎の基礎的な知識及び理解
  - SDG Compassを読むこと: <https://sdgcompass.org/>
  - SDG Take Actionを読むこと: <http://www.un.org/sustainabledevelopment/takeaction/>

#### C. 活動内容

##### 日本での課題別視察

施設: 国際労働機関 (ILO) 駐日事務所

##### 活動

- PYはILOによる講義に臨み、その中心的な機能、また過去40年にわたる日本との連携や協力について学んだ。
- 講義では、仕事の創出、社会的保護の拡充、仕事における権利の保障、社会対話の推進というILOによる取り組みの4本柱についても言及された。
- プレゼンテーション後は、PYに質疑の機会が与えられた。

##### 視察から学んだこと

- PYはプレゼンテーションで国際労働基準について、並びにILOの仕事がより効果的なグローバル化及び社会における各方面での格差縮小に資するかについて学んだ。
- 特定の調査案件に関する統計データ、例えば、アプリカが最多で次いでアジア太平洋が多いという児童労働の件数や、日韓における男女格差などについて学んだ。

施設: 独立行政法人日本貿易振興機構 (JETRO)

##### 活動

- PYは日本と外国間の貿易や投資の促進に取り組む政府関係の組織である独立行政法人日本貿易振興機構 (JETRO) を訪れることができた。
- 日本と外国間の貿易振興にJETROが担う役割と使命についての講義が行われ、また、JETROの歴史と今日での主眼についても概説を受けた。
- 講義後、PYは8つのグループに分かれてディスカッションを行った。

##### 視察から学んだこと

- JETROでの講義を通じて、対日直接投資の促進と日

本の中小企業の輸出力を最大化するという当該機構の主眼についてより一層の理解を得た。

- b. ディスカッションでは、PY同士が交流する機会を得て、主題について理解を深め、また各国の通商政策に関する知識を共有することができた。相互の包括的協力がどのような利点があるかについても議論を行った。
- c. 約20分間のディスカッションの後に、PYは互いに意見交換することもできた。

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- a. グループ・テーマについて紹介する。
- b. モノやサービスの移動について議論し、基礎知識や理解を得る（貿易と経済発展の関係）。

##### 活動

- a. グループ・ディスカッションIは一連のディスカッション・セッション中の冒頭であったことから、PYが全員の名前を覚え、互いをよりよく知ることができるようにアイスブレイキングから始まった。
- b. マインドマップの概念が紹介され、グローバル化の影響は、正負の側面、主因、潜在的解決策という3つのレベルで分析することができるとPYに示された。
- c. 次にPYは、モノやサービスの移動に関するグローバル化の功罪両面につき記した個人課題中、使用頻度が高かった単語で構成されたワードクラウドを提示された。
- d. PYはその後、更に小さなグループに分かれてグローバル化の功罪につき議論を重ねた。PYはまた功罪の主要因を突き止め、グローバル化の負の側面を食い止める潜在的な解決案を挙げなければならなかった。そして各グループは議論の進行役となるファシリテーターも立てねばならなかった。
- e. マクロとミクロ両レベルの解決策が持ち上がったが、個人やPY自身で実行できるミクロレベルのものに重点が置かれた。
- f. 各グループの進行役はその後それぞれの結果を全体へ発表し、そこで得られた回答は各グループの成果をまとめる際に使用された。

##### 成果

- a. グローバル化がモノやサービスの移動にどう影響し、またその結果としてヒトに対してもどう影響するかにつき、PYはより深く理解することができた。
- b. 同時にPYは、モノやサービスの移動に関するグローバル化に隠された異なる主要因について気付かされることとなり、更にグローバル化の弊害に対して個人また組織レベルでどう対峙できるかについての様々な手立てを学んだ。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- a. 資本の移動について議論し、基礎知識や理解を得る（資本の流れと投資）。

##### 活動

- a. 本セッションは、グループ・ディスカッションIと同様にワードクラウドの提示から始まり、PYは資本の移動についてよく見る単語や原則について目の当たりにすることができた。
- b. 続いて、資本の移動の異なる形態が紹介された。資本の越境取引に見られる伝統的な三大類型、つまり海外直接投資、公式の資本市場からの資金調達、外国からの支援、である。越境取引の新類型である仮想通貨についても紹介され、資本の流れとしての正当性があるかについてが議題に上った。
- c. PYはその後、グループ・ディスカッションIを踏襲してグループごとに各国での資本の移動に関する知識や経験について共有する機会を得た。
- d. 資本の移動に関するグローバル化の功罪両面を踏まえた上で、グループごとでも議論が重ねられた。マインドマップに結論をまとめる前に、指摘された負の側面に対する潜在的な解決策についてもグループごとに話し合われた。
- e. 前述したように、PYからはマクロとミクロ両レベルの解決策が持ち上がったが、個人やPY自身で実行できるミクロレベルのものに重点が置かれた。

##### 成果

- a. PYは国際的な資本流通の様々な経路につきより深く理解することができた。
- b. PYはまた、更なるグローバル化によってより一層の発展を見せるだろう資本の国際移動という概念の台頭についても紹介された。
- c. 同時にPYは、資本の移動に関するグローバル化に隠された異なる主要因について気付かされることとなり、更にグローバル化の弊害に対して個人又は組織レベルでどう対峙できるかについての様々な手立てを学んだ。

#### グループ・ディスカッションIII

##### ねらい

- a. ヒトの移動について議論し、基礎知識や理解を得る（移住と労働移動）。

##### 活動

- a. くじ引きによりPYは4つの「国」に分かれ、各「国」は国名と国旗を考える時間を与えられた。各国は最終的にZeetopia、Laziland、Wifi Country、Wifi Kingdom、と名付けられた。
- b. PYは予め用意された各「国」の背景説明（経済状況や文化的背景など）を渡され、国ごとの様々な出来

事により人々がある国から他の国へと移動するさまを模す様に指示されたミニ・ロールプレイが行われた。

- c. 主な活動のまとめ及びヒトの移動の良い面と悪い面の総括で終了となった。また、各キャラクターの移動の主要因についても、個人的かマクロ的かそして内部か外部かを軸とした図中に示された。

##### 成果

- a. この活動によりPYは国を跨いだヒトの移動の主要因に対して理解を深め、分類することができるようになった。
- b. PYはまた、人々がある国から別の国に移る際の異なる動機の性質について認識するようになった。それらは、外部、内部、個人もしくはマクロな規模、といった事柄である。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

- a. 技術と情報の移動について議論し、基礎知識や理解を得る（知識の普及）。

##### 活動

- a. グループ・ディスカッションIIIの補足として、各「国」PYは更に自分が「居住」する地区に基づいて4人ずつのグループに分かれた。
- b. 各「国」北部のPYは国の使用言語、挨拶の仕方、国民は何を食べているか、家族や友人、社会全体との関わり方、について議論しアイディアを出すことになった。
- c. それに加えて、各「国」南部のPYは、日常的な服装、主な宗教そして仕事観や仕事の原則について議論した。
- d. その後、自「国」に戻って集まり、ディスカッション・グループ向けに自分たちの特徴について発表した。
- e. そして、各国のコミュニケーション方法について議論した後、更に自ら享受する相応の技術の進歩についても課せられた。
- f. それに続き、PYはたとえば一対一や囁き、付箋紙など異なるコミュニケーション方法を用いて他のPYへ伝言するという活動を行った。
- g. そして、技術と情報のグローバル化による負の面に対してどのような手立てがあるかを個別のグループごとに議論することで、今回の活動で何を学んだか振り返りを行った。

##### 成果

- a. 最初の活動でPYは、国同士での文化の尊重や倫理的な意識が非常に大事だと実感した。
- b. PYは技術がコミュニケーションに有する限界と利点につき認識するに至った。

- c. また、PYは情報がどう普及していくか、また風説の流布に対処できるかについても学んだ。メディア・リテラシーを始めとした様々な関連事項についても議論が行われた。

#### カンボジアでの課題別視察

##### 施設：カンボジア青年連盟

##### 活動

- a. PYはカンボジア青年連盟の担当者たちとのセッションの場を得た。2部構成となっており、カンボジア青年連盟の歴史とその活動についてのプレゼンテーションの後、グローバル化の持つ、とりわけカンボジアの人々や若者に対する影響について議論した。
- b. 議論中のPYは、テーマに関する意見交換を積極的に行った。

##### 視察から学んだこと

- a. カンボジア青年連盟の歴史や創設、また主たる使命や目指す姿、価値観について学んだ。カンボジア青年連盟が過去数年行っているボランティア活動の紹介、またカンボジア青年連盟によるカンボジアのコミュニティや人々への貢献活動についても紹介された。カンボジアの人々の未来についてカンボジア青年連盟が長期に目指す姿についても議論がなされた。
- b. その後、青年や関係する人々が、グローバル化による国同士の教育格差や経済格差を縮小させるにはどうすればよいのかについて経験や知識をPYとカンボジア青年連盟とで共有した。
- c. PYとカンボジア青年連盟の青年たちは単に知り合うだけではなく、自国の若者がどうコミュニティの力になれるかについて理解を深める実のある話し合いを持つことができた。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

- a. これまでのディスカッションの結果を総括する。

##### 活動

- a. これまで議論されたグローバル化の諸相についてPYは各国ごとに話し合うよう求められた。
- b. 次にPYは、グローバル化の功罪、その主要因や負の側面に対する潜在的な解決策など各項目について自分たちのマインドマップを作成することとなった。
- c. その後、各国のマインドマップは一枚のマインドマップに集約された。
- d. PYは各自2分間の短い提案を求められ、それら考え出された内容が全体に共有されたところで終了となった。

##### 成果

- a. セッションの最後にまとめられた一枚のマインドマップは、これまでのグループ・ディスカッション

の全てを要約するものとなり、PYはグローバル化の諸相がいかに相互に絡み合っているかを十分可視化することができた。

- b. また各自の短い提案の段で、効率的かつ簡潔な紹介方法により、PYは就職の際にどうアピールするかについてよりよく知ることができた。

#### 実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

ねらい

- a. 実践的スキルの育成

活動

- a. 各プレゼンテーション・スキル・グループ (1) マーケティング、(2) 営業、(3) 分析、(4) コンサルティング) は自ら選択したテーマで10分間のプレゼンテーションを課された。テーマは自分のDGのものでも、他のDGを巻き込んだものでも構わないとされた。
- b. 例えば、マーケティングのグループは、民間から一つの業界を選び、マーケティングの観点から問題を特定し、何が最善の解決策と考えるかについて発表しなければならなかった。
- c. 営業のグループは、特定の製品を選び、それについての自分たちの考えを他のPYに向けて売り込まねばならなかった。
- d. コンサルティングと分析のグループについてもまた、官民に限らず先述のような一つの問題を見つけきて、それに対する考えや解決策と提案を立てなければならなかった。

成果

- a. どのPYも、自分のDG又は他のDGのPYによる内容に開眼させられるところがあった。
- b. PYの一人ひとりにとっても、進学と就職を問わず将来役に立つだろう各種スキルについて知識を増やすことができた。

#### D. 決意・期待される今後の活動

このディスカッション・グループは、グローバル化の功罪が主たる論点であった。とりわけ、問題点やその利害関係者、その解決策について考えることが多かった。官民の協力次第では様々な方策が考えられる。

ソーシャルメディアによるキャンペーン、積極的に青年組織や地方政府や非政府の領域における類似団体に参加するなど、複数の手段によってこれらは可能である。更には、ディスカッションにて出された解決策が、他のDGの結論と併せて分析されたり合体されたりしてより具体的な行動へ繋がることもありうるだろう。

#### E. 評価・反省 (自己評価セッション)

このDGのPY達は、参加者主導のディスカッションと多くの双方向的かつ参加型のロールプレイを通じ、グ

ローバル化の4つの大きな側面を見ることができた。また、考えや学びを自らがデザインするマインドマップにまとめることもできた。

PY自身により盛り上げられ、進められた一連のディスカッションによって、このDGの論点が広がっただけでなく、PY同士で批判的思考や、思考の共有、そして文化交流の機微がもたらされた。

更に、グローバル化の日常生活への影響をPYによりよく理解し実感してもらう上でロールプレイは便利な視覚的補助として機能した。

#### F. ファシリテーター所感

まず第一に、PY、NL、管理部員、他のファシリテーター及び乗組員の皆さんによるお力添えに対し感謝申し上げます。第44回「東南アジア青年の船」事業のDG1ファシリテーターとして参加することは実に素晴らしい経験となり、特にDG1の全PYによる貢献と言葉と笑顔に対して謝辞を送りたい。

全てのPYが、背景や経験にかかわらず、素晴らしい姿勢を以て自らの考えを述べている姿を、私は非常に嬉しく思い、また正直なところ少々吃驚した。当然ながら、英語レベルや事前の知識量の違いが存在していたが、PYは概して議論に積極的に加わっており、それほど見受けられなかった者についても、議論の所々でうまく参加していた。

初回に、DGへ何を期待するかが示された。それは、自らの考えを表現し、他者の考えを理解及び分析し、建設的な回答を構成する能力であった。私は、PY達が色々な形で1. 題目に対する自らの見解や考えを述べ、2. 異なるものの見方に対しても理解し、主な相違を検討し、3. 解決策を中心に据えた発想を示したことを非常に誇りに思う。中には、こうした議論の3大構成要素を超えて、他者が見解を述べることを促し、自分たちで活発にやりとりすることができるPYまでいた。

またほとんどの者は、参加するだけでなく、議論を進行し、各グループともPYの一人ひとりが発言できるようにし、意見を統合し発表することができた。状況に応じてモデレーターにも、議論を支える一員にも、聞き手にも話し手にもなれるPYの柔軟性と適応能力は、彼らが互いに共感しあっている状態にあることの証左の一つである。月並みな表現ではあるが、この共感能力は、PY達が今後世界の変革者となる上で異なる考えの人々を惹きつけるための大きな特性の一つになるだろう。

このグループ・テーマは今回が初めてということで、また短い時間で扱わねばならない範囲が広いため、込み入った話をするのと、議論に繋がりを持たせながら全ての面に接するべく重要項目を見ていくこととのバランスがしばしばとても大変であった。私自身はグローバル化の功より罪を体現したような者ではあるが、PYが有益

なもの何かを学べたと思えるようなファシリテーションができたのであれば本望だ。

ここで、GEの元会長であるJack Welchの言葉を引用しよう。「グローバル化は我々を、世界を探索する会社に変えた。ただ単に売ったり買い付けたりするのではな



DG1「グローバル化の功罪」グループ (11月22日)

#### (2) 情報とメディアグループ

ファシリテーター: Ms. Lee Wai Leng

PY: 39名

##### A. グループ・テーマ・インフォメーション

###### a. テーマの詳細

今日における情報とメディアの社会的影響を理解する。続いて、情報の送り手としてメッセージを伝達する際いかに積極的かつ効果的にメディアを活用すべきか、また受け手としてもいかに注意深く情報を取捨選択すべきなのかについて議論する。

###### b. 期待される成果

- メディアの影響と効果について理解するための土台を得て、同時に責任ある情報の受け手や作り手となるようにする。
- 事業終了後に行う事後活動のために、選択したメディアを使って青年による活動を起こし参加する具体的な計画を立てる。
- 情報の取捨選択や分析にかかる基礎的なメディアリテラシーを得る。

###### c. 身につく能力

###### 知識

- メディアがいかに人の生活の一部となっているかにつき具体例を選び、共有することで、自分たちに対するメディアの影響を議論し、特定することができるようになる。
- 日本やASEANにおけるメディアの全体像や消費特性の類似点や相違点を理解することで、各国のメディアを正しく評価し、事後活動を行うに当たり、より適したメディアを見つける。
- 個人、通信社、政府の別を問わない情報の送り手としての責任と情報を流す手段を認識することで、責

任あるメディアの消費者となれるようにする。

スキル

- メディアリテラシーとメディアの社会的影響についての基本的な理解を持つことで、偏った情報を見分ける力を養成する。
- 活動を通して、自らの考えを構成し、公開の場で発表できるようになる。意見収集のための質問力を磨くと同時に、メディアの形式を用いて調査結果を報告し、自らの考えを述べる。



成果発表会 DG1「グローバル化の功罪」グループの発表 (11月28日)

###### 行動

- 情報の作り手として、情報の取り扱い方により責任感を持つ。
- メディアによる影響の受け手として、より優れた識別力を持つ。

#### B. 事前課題

##### 個人課題1

自分に影響を与えた印刷又はテレビニュース、若しくは広告を一枚持参し、それらに対する自分の反応について述べた。そのニュース又は広告を選んだ理由とそれらを読んだり視聴したりした後に自分はどうしたかについてディスカッション・セッション中に共有した。

##### 個人課題2

自国におけるメディアリテラシーの認識度合い及びメディアリテラシーとは何かについての理解を促す試みについて調査し、発表した。共有を通して、PYは偏った情報やフェイクニュースを見分ける方法とそれらが引き

起こす影響について学び、情報を扱う上での責任について理解した。

### 個人課題3

PYは、旧来のメディアとソーシャルメディアで報道されたローカルニュースを一編見つけてきて、メディアごとに異なるニュースの見方を比較した。

### 国別課題1

受け手の属性ごとに異なる有力なメディア消費特性を明らかにし、官や民などメディアのタイプが消費特性に影響するかを明らかにすることで、自国におけるメディアの全体像とメディア消費の特性について発表した。

### 国別課題2

PYは国ごとに、情報の送り手の責任と自国において情報の流通にメディアがどう使われているかについて発表した。医療、保険、教育など同じテーマについての政府のキャンペーンと企業のキャンペーンの比較例が紹介された。これらは、情報を流すのにメディアがどう使われるか、また各国のメディア統制の類型がどうかを知るのに使われた。

## C. 活動内容

### 日本での課題別視察

施設: YouTube Space Tokyo

#### 活動

創作物を集めてそれらを共有し、学び、組み合わせることを目的とし、東京の六本木ヒルズに入居するYouTube Space Tokyoを訪問した。YouTube Space Tokyoは、YouTubeにおいて1万人以上のチャンネル登録者を持つユーチューバーのコンテンツ制作を支援するため、音響ステージ、スタジオ、4K編集室とカメラ機材、そしていくつかの最新鋭の制作機材を擁している。

#### 視察から学んだこと

プロダクション・ストラテジストの梅若ソラヤ氏による説明と案内により、YouTubeがユーチューバーと一緒にあってどのようにコンテンツの収益化に取り組んでいるかを理解することができた。また、梅若氏から、世界で70億人がソーシャルメディアをコミュニケーションツールとして利用しているとの統計（Facebook: 20億人、WhatsApp: 12億人、YouTube: 10億人、Instagram: 6億人）が示され、ソーシャルメディアの射程についても理解することができた。このデータはPYに対し、ソーシャルメディアの利用と規模が世界的な現象であるとの印象を残した。YouTubeがどのようにコンテンツを整理・監督しているのかをPYは理解したがったが、それについての説明によれば、ユーザーは自分の番組を開始する前にYouTubeによる規約に同意しなければならな

いとのことだった。

施設: Yahoo! Japan x YouthCreate

#### 活動

Yahoo!ニュースの責任者である前田明彦氏からYahoo! Japanの報道スタイル及び、7つのポイント（適時性、真実性、新規性、公益性、（人物の）認知度、表現方法、形式）に沿って情報を選択していることが紹介された。また、日本を取り巻くメディア環境の概要及びキュレーションやフェイクニュースなど直近の課題や若者が情報にアクセスする割合についても説明いただいた。

政治家と政治に関心を持つ若者の架け橋を志向する特定非営利活動法人YouthCreateの原田謙介氏にも講義いただいた。

#### 視察から学んだこと

多様な情報源から受け取った1日約4,000本ものニュースから、Yahoo! Japanのサイト用に80から100のトピックが選ばれるが、Yahoo!のようなニュース・サイトがどのように情報を選別しているかにつき理解することができた。機械学習を用いて読者に関係する話題を予測するのが潮流だが、最終的な選別はYahoo! Japanではいまだ人の手によって行われている。人々が自分では入手できないニュースと情報を供給するメディアとしての役割、そしてそれに伴う適時報道の責任と情報の正確性を期すための確認作業についても前田氏からお話を伺った。ニュースの発信元が責任ある情報源として読者の信頼を勝ち得る必要があると強調された。そうでなければ、読者は離れてしまい、読みたいものだけを読むようになり、フェイクニュースの付け入る隙を永らえさせてしまう。そして前田氏は、ニュースの発信元が協働し、情報の信頼性の低下を食い止めることが肝要だと訴えた。日本を取り巻くメディア環境について話した際、名のあるPR会社による当該地域でのメディアの透明性に関する調査を共有いただいたが、統計もそのまま鵜呑みにしないよう忠告を受けた。

自身は対面コミュニケーションが好きだという原田氏は、たとえばお酒の席など若者と政治家が気軽に会って考えを分かち合うのに良い場をYouthCreateは提案していると教えてくださった。加えて、Yahoo! Japanとの協働で、Yahoo! Japanのウェブサイト寄せられた一般の方からの質問に政治家が答えるオンライン・プラットフォームが作られている。この現在進行中の共同企画は、コミュニケーションの一手段として政治家と若者を繋げるパイプとして役立っている。

PYは、両名に対して質問を用意し、このコミュニケーション手段を通じた若者の政治参加及びその政治への影響につき積極的に理解しようとした。PYはまた、日本ではフェイクニュースがどのように判別されているかについても知りたがっていたが、政府というよりは各

メディア企業の自前のチェック制度により担われているとのことだった。

### グループ・ディスカッションI

#### ねらい

- メディアの目的と役割、我々の日常生活への影響を理解する。
- 旧来のメディアとソーシャルメディア、また日本とASEANにおける現在のメディアの傾向に見られる利点と欠点について理解し、比較する。

#### 活動

- メディアによる一般的な影響を説明したビデオを視聴後、PYはグループに分かれ、メディアが日常生活にどう影響しているかを問うた個人課題1を用いて、自分が影響を受けた印刷若しくはテレビによるニュース記事や広告と、それに対して自分はどのような反応をしたか共有した。
- グループごとに、最も印象的なニュース記事若しくは広告を選び、全体に発表した。
- 各国の現状を大まかに把握してもらうため、PYに対し日本とASEANでのメディア消費特性に関する地域調査について説明がなされた。
- 新旧メディアを比較する別のビデオを視聴した後、2017年第1四半期の東南アジアにおけるデジタルメディアと旧来メディアの消費についての研究でその裏付けがなされた。

#### 成果

- 明確なメッセージを伴った広告は、ニュースよりも影響力があり、感動的な広告は口コミで急速に広まり継続的に残る効果を有し得る。共有されることで、メッセージはより伝わったとみなされる。
- 内容の良い動画は、印刷メディアより人気がある。
- メディアとは、考えを構成するような影響力がある道具であり、人々のものの見方や行動を変える力を持つ。
- ソーシャルメディアは人々を繋げるが、孤立させることもある。あるニュースや情報がどのような影響力を持つか、誰かと共有する前に留意することが肝要である。

### グループ・ディスカッションII

#### ねらい

- 日本とASEANにおけるメディアの全体像とメディアの消費特性について知る。
- 日本とASEANにおけるメディアの全体像に見られる類似点と相違点を理解し、事後活動に望ましいメディア形式を見つける。

#### 活動

- （過去2年間で）異なる種類のメディアを跨いで行

われた人気のメディア・キャンペーンとその影響を示すことで、自国におけるメディアの全体像と消費特性について各国PYは記者会見形式のパネリストとして発表を行った。聴く側のPYはレポーター役となり、質問を投げかけた。

- 事後活動を企画するため、各国で類似するメディア特性についてグループごとに議論した。各グループで望ましいメディアを選んで発表し、事後活動の企画を始めた。終了前には、グループごとで事後活動の原案を発表した。
- 最後に、ディスカッション・セッションにおけるグループとしての目標や期待など望ましい成果について、議論・提案・選択した。

#### 成果

- 日本とASEANではメディアの全体像については対照的だったが、消費特性については類似していた。ASEAN各国でテレビが主な情報源と言えるだろう一方で、デジタルのメディアが急速に台頭している。同時に、印刷メディアが深刻な落ち込みに直面していることが分かり、興味深いことにPYはこの状況を憂慮し、その存続のための手立てが必要だと心配している。
- 各国におけるメディアの所有については多様で、中には政治家や事業家が持ち主だったり官製のものだったりすることもあると学んだ。
- サイバー領域の規制についても幅があり、概は限定的なものとなっている。例として、フィリピン政府は情報について厳しい統制を行っておらず、日本では概して言論の自由が守られている。
- フェイクニュースの蔓延は、PY達が指摘する懸念点であった。
- ディスカッション・セッションでの望ましい成果として、グループで三大目標が立てられた。目標1：情報拡散の最も効果的な方法を見つける。目標2：責任ある情報の報告者となる。目標3：情報を活かし続ける。

### グループ・ディスカッションIII

#### ねらい

- 情報の送り手としての責任と、情報伝達のためにいかに積極的かつ効果的にメディアが利用されているかを理解する。
- 日本とASEANにおけるメディア及びデジタル・リテラシーに関する取り組みについて理解する。リテラシーの知識を活かして偏った情報や誤報を見分けられるようにする。
- 世界人権宣言第19条とその関連についての基本を理解する。

#### 活動

- PYはトークショー形式で、各国での情報の送り手としての責任と、情報拡散のためにメディアがどう使われるかを発表した。
- メディアリテラシーとは何かについてのビデオを視聴し、メディア及びデジタル・リテラシー、また両方に求められる能力につき講義が行われた。
- 個人課題2を用いて、日本とASEANにおけるメディア及びデジタル・リテラシーの認識を高める取り組みについて具体例を交えながら議論した。
- 「全て人は、意見及び表現の自由に対する権利を有する。この権利は、干渉を受けることなく自己の意見をもつ自由並びにあらゆる手段により、また、国境を越えると否とにかかわらず、情報及び思想を求め、受け、及び伝える自由を含む。」という世界人権宣言第19条について紹介した。
- どのDGのPYに対してでも構わないので、第19条への考えに関する（録画若しくは録音による）インタビューが課された。これはグループ・ディスカッションVにて完成・発表される。

#### 成果

- 異なる年齢層を対象とした冊子やビデオを用いながら、PYは自国のメディアリテラシーについて共有し、声のトーン、見た目や使用された形式について議論した。
- 情報にまつわる最大の問題の一つがメディアリテラシーであるとPYが認識するようになった。コミュニケーションのプラットフォームとしてソーシャルメディアを利用する場合、頭を使わなければならないということが、今回のポイントの一つであった。
- 全てのPYが第19条について知っていたわけではなく、そのことに一体全体どのような含意があるのか、実に興味深い。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

- メディアリテラシーの認識を向上させる上で、どう情報とメディアが教育と助け合えるのかについて、DG5と共同で議論する。
- 旧来のメディアとソーシャルメディアにおいて報道された1本のニュースに関しての異なる見方について分析する。その際、これまでのディスカッションで学んだ用語やメディアがどう機能するかにつき深めた理解を活用する。

##### 活動

- 今回、DG2のPYは、DG5「質の高い教育」グループに加わった。合流の後、PYは二手に分かれ、一方はポジティブな課題、もう一方はネガティブな課題を取り上げ、メディアリテラシーを伝えるため、いかに効果的に教育を使えるか議論した。

- 小さなグループに分かれて、旧来のメディア及びソーシャルメディアで報道される際、一本のニュースに対していかに異なる見方がなされるか共有した。

##### 成果

- 共同ディスカッションでは、ネット上のいじめ、ハッキング、ストーカー絡みの犯罪、性関係の詐欺、猥褻画像を始め、メディアのネガティブな影響に関する多くの問題が見つかった。
- 共同ディスカッションの成果として、質の高い教育が、ソーシャルメディアによって変わりつつある状況での喫緊の課題を軽減する上で大いに役立つとともに、ソーシャルメディアを賢く利用するように啓蒙する上で重要な役割を担うことが分かった。
- これまでのディスカッションで得た知識を応用する機会として、各グループのPYはジャーナリストに扮して旧来メディアとソーシャルメディアで報道された1本のニュースについての異なる見方を提示した。

#### カンボジアでの課題別視察

**施設:** 王立プノンペン大学メディア・コミュニケーション学科

##### 活動

カンボジアで最古かつ最大の大学である王立プノンペン大学のメディア・コミュニケーション学科を訪れ、学科長のUng Bun Y氏による歓待と副学長かつ本学科で講義を持つSom Ratana氏の紹介を受けた。PYは、職業インターンシップやドイツ及び東南アジアの他大学との提携に力を入れた、本学メディア・コミュニケーションコースの概要を知る機会を得た。Ratana氏による示唆に富んだ講義と本学科の学生による図書館やコンピューター施設へのツアーを受けた。

##### 視察から学んだこと

Ratana氏による講義では、メディアリテラシーを通して異なるメディアの内容を単に表面的ではなく深いレベルで理解することについて学んだ。第一に、ニュースの情報源にアクセスすること、第二に情報を識別・分析する能力を持つことである。我々の生活におけるインターネットの普及を強調され、PYはまた、事実を使って他者を説得・影響し望ましい行動をとらせるフレーミングについても学んだ。また講義では、メッセージの伝達過程に介入や邪魔をすることで受け手によるメッセージの解釈を混乱させ、コミュニケーションの破綻にも繋がりがねないノイズという理論も紹介された。ノイズは、生理的ノイズ、物理的ノイズ、精神的ノイズ、意味的ノイズの4類型に分けられる。ニュースの供給元や情報源を確認することが、フェイクニュースから真実を見分けられるコツであるとも教えられた。ここでは、青年育成にメディアが大きな影響力を持つため、メディアリテラシーが涵養すべき大事なスキルであることを認識した。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

- 世界人権宣言第19条について集まったPYの意見に関して共有・議論し、今日との関わりについて理解を試みる。
- メディアの特長と弱点を認識し、日・ASEAN間の継続的な交流に資する社会活動への青年参加を促す提案について議論する。
- 日本とASEANのための社会活動における青年参加支援の一助として、事後活動を通じたメディア関係のアイデアを洗い出す。

##### 活動

- 第19条に関するインタビューに見られる要点をグループ別で共有・総括した。
- 各グループで事後活動のアイデアを企画し、視覚（動画若しくは写真）的又は文章（ニュース記事又は雑誌コラム）的に発表した。
- PYによる事後活動のアイデア発表を以て終了となった。

##### 成果

- 言論の自由は、誰もが敬意を持って意見を発言できる善いものだと共通認識をPY達は得た。言論の自由は万人に自分の意見表明を許すが、全ての意見が受け入れられる訳ではないと覚えておく必要がある。PYは、表現の自由は必要だが、弊害を最小化するため規制も敷かれるべきだと意見に賛同した。
- PYはグループ別で自らの提案する事後活動のための広告について議論し、制作した。

グループ1：SSEAYP Lab - 「東南アジア青年の船」事業に関連するあらゆる事柄について情報提供する施設  
グループ2：SSEAYP Tour - 将来的にPYに応募する興味を持たせるために「東南アジア青年の船」事業を学校に紹介して回る。

グループ3：Educate on media literacy - 個人を対象にメディアリテラシーとは何かを説明するため言葉を尽くす。

グループ4：The Fact Squad - メディアリテラシーを啓蒙するためロールプレイを行う。

グループ5：#Comcon - 大学までを範囲に入れてメディアリテラシーの知識について共有する。

グループ6：SMART - Social Media, Aware, Responsible, Todayの頭文字から成るSMARTを用いてメディアリテラシーの教育を行う。

#### D. 決意・期待される今後の活動

ディスカッションの成果報告では、DG2はテーマに関するディスカッションの要点を発表したのみならず、全てのPYに有益な学びを共有した。国ごとでメディアの全体像（規制や情報の送り手の責任）やメディア消費

（属性ごとに人気の類型）について調べ、洞察する中で、PYは自国におけるメディアの影響について学びを得た。これにより、PYがメディアの利点や危険性、また責任ある情報の送り手かつメディアの消費者たる主体として必要な能力や態度について理解する基盤づくりがなされた。加えて、より見識あるメディアの作り手かつ受け手となれるような行動をとるという大目標を掲げて、公式にメディア関連の教育を受けた者もそうでないPYも、メディアリテラシーを有する大切さに首肯した。これは、メディアリテラシーの認知を広め、フェイクニュースを見破る術を広めることに的を絞ったインドネシアの事後活動にさらに体现されている。

#### 社会実験としてのフェイクニュース

DG2は、フェイクニュースが簡単に広まることを示す船内実験を行った。公式の告示方法に見えるやり方で、小箱に名刺を入れた者は無料のSIMカードがもらえるという知らせをPYにしたところ、ある訪問国でのホームステイの前後約4時間で70枚以上（全PYの2割以上）の名刺が集まった。ディスカッションの成果報告会でDG2はこれがフェイクニュースだったことを明らかにし、この告知がどのような偽情報だったのかを説明した。そしてこれを良い機会に、フェイクニュースを未然に見分けるコツ（見出し以外も読む、情報の正確性を確認する、信頼に足る情報源かを見る）を共有した。

もう1つの話題としては、「全て人は、意見及び表現の自由に対する権利を有する。この権利は、干渉を受けることなく自己の意見をもつ自由並びにあらゆる手段により、また、国境を越えると否とにかかわらず、情報及び思想を求め、受け、及び伝える自由を含む。」という世界人権宣言第19条をPYに紹介し、その意義を深く考えてもらい、意見を募った。この演習は、表現する自由には責任が伴うというDG2のディスカッションを通じて投げかけ続けたメッセージをPYに向けて強調するところに意味があった。

他DGとの共同ディスカッションは、ディスカッション・セッションの真新しい一面を呈した。DG2はDG5質の高い教育グループに合流することを提案したが、互いの事後活動の目的達成のため両者がいかに補完し助け合えるかを議論しようというものだった。事後活動企画・実行のワークショップでは仮定のプロジェクトを企画する演習を行ったが、DG2はDG1と協働した。最後に、自己評価セッションの後にDG6に声をかけて、互いのPY同士が顔を合わせる機会を作るため集まった。PYの評価は、共同ディスカッションを楽しむことができ、またより明確な議論目的とより実りある結論を出すための更なる時間があれば尚よかったというものだった。

#### E. 評価・反省（自己評価セッション）

PY達による話し合い、提案、絞り込みを経て、情報

拡散の最も効果的な方法を見つける、責任ある情報の報告者となる、情報を活かし続ける、というグループの三大目標を立てた。PYの筆記による自己評価では、95%近くが目的は十分に達成されたと述べている。

PYはメディアリテラシーを有することの重要性について学んだ。そしてフェイクニュースによる影響を警鐘と捉え、メディアを教育・コミュニケーション・政治意見形成の有用な道具と認識しつつもデジタル市民としての倫理観と責任感を自覚し広められるようになった。

PYはまた、ノイズ、フレーミング、カルティベータリング等、メディアの諸効果がいかに影響を与えるのに使われているかといった知識を身に付けた。第19条についてもまた、盛り上がりを見せた。PYは表現の自由は責任を伴い、意見を持つものは誰しもが声を上げる権利を有するということを学んだ。第19条に関して他DGのPYにインタビューする機会では、面白い視点を得ることができた。

PYは、どのように情報を提示し、プレゼンテーションのために創造的に構成するか学んだと評価している。考えに疑問を投げかけたり集めたりする方法の一つとしてディスカッションが活用され、批判的思考が涵養された。情報とメディアに関して近隣国が直面する問題について洞察したが、事後活動の企画の際にも同じ話題が持ち上がった。

改善の余地があると指摘された点は、時間配分と内容面でより厚く扱いたいというトピックがあったことだ。大多数のPYと違い、関連分野で働かないし学んでいる一部の者は今回のトピックだけでなくより多くを望んだ。他には、新しいものの見方を知り、同じDGのPYとよく知り合って更に十分な議論ができるよう、グループ別ディスカッションで毎回グループ替えを行うという改善案があった。

YouTube Space Tokyoを訪れた初めの日本での課題別視察は、スタジオとして実際に使用されているところを見学できればより実り多く、又はYouTube側若しくはユーザーによるワークショップに参加することでさらに双方向で満足な経験とすることができたのではないだろうか。

続いて、Yahoo! JapanとYouthCreateによる講義が行われた。PYは質問を用意し、積極的に参加していたが、このセッションが昼食後やYouTube Space Tokyoでの活発な時間の後でなく、午前中に行われていれば、さらに効果的であっただろう。

王立ブノンペン大学メディア・コミュニケーション学科を訪れたカンボジアでの課題別視察では、Ratana氏による素晴らしい講演を受けることができた。氏は興味深い講師であり、メディア効果の概要を分かり易く教えてくださった。このセッションは氏の「全ての嘘は真実を含んでいるのであり、全ての真実にはいくつかの嘘が隠

れている」という名文句によって締められた。これは、メディアで読み、聞き、見たものを真実として鵜呑みにするなという警告である。

## F. ファシリテーター所感

第44回「東南アジア青年の船」事業のPYによるディスカッションへの注力は私の期待以上であり、感銘を受けた。好奇心と勤勉性を携えてディスカッションの輪に加わり積極的に参加していたのである。

DG2のPYに関しては、情報とメディアが第一志望でなかった者の口から、新しいものを学んだというだけでなく、価値あるものを学び、その過程を楽しめたと聞くことができ非常に元気づけられた。

DG2のPYは今やメディアの影響に更なる関心と認識を抱き、どのように情報が流布していくのかについて理解を深めた。ディスカッション・セッションを修了した知識を手に、多くの者がより責任ある情報の消費者かつ送り手になると、各自の領域でメディアの状況に変化を起こすと誓った。

ディスカッション・テーマに向けた2つのスキルの一つに、情報とメディアに関する重要な点としてメディアリテラシーとその影響につき基本的な理解を得ることが挙げられる。2つ目は、情報を収集し考えを準備しメディアのフォーマットを用いて公に発表できるようになることだ。PYはこの機会に各人各様でこれを実践した。私は胸を張って、DG2のPYは3つの個人課題と2つの国別課題の完遂と議論による知識とスキルを手にすることができたと言える。

ファシリテーターとしての成功に至る道のりは、中村かおり内閣府青年国際交流担当参事官の御助言と御指導なしに語ることはできないだろう。彼女のファシリテーターに対するたゆまぬ励ましのおかげで、PYにとって挑戦的ではあるが実り多いディスカッション・セッションを設計することができた。ディスカッションの準備に際する観点を従来の焦点・目的・ゴールから、テーマの詳細、期待される成果、知識・スキル・行動面で身につく能力に変更する中村参事官の提案は、ディスカッション・セッションの企画設計においてより時宜を得た実践的な計画に注力する上で役立った。

2000年にPYの立場で、そして17年後にファシリテーターの立場で戻り、駒形健一氏を管理官として2度仰ぐことができ幸運だった。氏のご指導ご鞭撻によっても、私のディスカッション・セッションの計画は幅を増した。再度ご一緒し、にっぽん丸の経験を共にしたことで、PYとして得たものをその後「東南アジア青年の船」事業に還元したいという想いを強めることとなった。

管理部の吉田哲也副管理官と春名知佳主任は心強い存在であった。管理部長、特に白鳥正信氏にはこの素晴ら

しい旅に際して窓口となっていただいた。私への面接、ディスカッションの計画書の修正に関してやりとりいただくところから、2017年8月上旬の東京でのファシリテーター会議における御支援まで、多くの面でお世話になった。

経験豊かなファシリテーター担当でいらっしゃる岳中美江氏と貞包みどり氏には毎回のディスカッション・セッション後、我々のフィードバックに時間を割いていただき、ディスカッションを行うにあたって前田美智氏と小原徳之氏と共に励ましと御支援を頂いた。

DG2担当の管理部長、西田加代子氏と星まなみ氏には出欠確認や病気のPYがいればその容態報告などの手助け、そして文房具や備品返却の補助もいただいた。

二宮悟志船長の冷静な指揮下、にっぽん丸乗組員の皆さんには希望通りのレイアウトに一生懸命に機材を設置いただき、時間通りに視聴覚・照明機器を備えていただき、セッションが始まってからも待機いただくなど、これ以上なくお力添えいただいた。

現地で御担当いただいた方々、特に日本とカンボジアの皆さんには、PY達とDG2への御対応に御礼申し上げたい。

SSEAYPインターナショナル・シンガポールには私の応募書類につきご支援いただき、特にAnthony Low氏(2011年シンガポールPY、2015年ファシリテーター)には、ファシリテーター応募のプロセスにあたり快くお時間を割いてご助言をいただいた。非常に頼りになる存在であった。

DG2のPYの自発性は素晴らしく、皆さんは私の宝物である。日本・シンガポール・ベトナムのアシスタント・ユースリーダー(AYL)及びベトナムのユースリーダー(YL)の支えを得られて感謝している。DGの代表者、ディスカッション活動運営委員、そして6つのグループのリーダーには多くの面でお手伝いいただいた。力を合わせ、時間通りにプレゼンテーションを行うべくチームを盛り上げようと皆さんがリーダーシップを発揮

する姿を私は大変誇りに思う。プレゼンテーションを制限時間内に終えることはできなかったが、成果報告会においてDGの実力を見せたチームワークと創造力についても同様である。

親愛なるPY達、特にDG5、1、6の皆さんには共同ディスカッションや企画でDG2のテーマに色彩や深みを増していただき感謝している。

我々のセッションを辛抱強く注意深く見守ってくださったナショナル・リーダー(NL)の皆さん、中でもブルネイNL、ベトナムNL、フィリピンNLには、ファシリテーター及びディスカッション活動運営委員会に対して御支援と温かいお言葉をいただくことができた。PY達の語るNLの皆さんの話には胸が熱くなり、成果発表会でいただいた「頭・心・手を動かしてゴールを達成しよう」という勇気づけられるような閉会の辞は今でも私の心に響いている。

ディスカッション活動運営委員会は素晴らしく、導入プログラムや成果発表会の潤滑な運営において大きな役割を果たしてくれた。導入プログラムの時と同じくらいリハーサルの時間が成果発表会でもあれば良かったが、そのような状況においても、全員が見事な働きぶりだった。私に言わせれば、これが本当のリーダーを生み出す場であった。

最後に、第44回「東南アジア青年の船」事業のファシリテーター、Koshu, Kat, Richa, Cho, Paez, Evan, Andyへ。あなた達無しには目標を達成することはできなかったし、このような形にすることはできなかった。あなた方は私の心の支えであり、同僚としてそして船上の仲間として共に過ごした時間を私は楽しんだ。我々の友情が第44回「東南アジア青年の船」事業が終わっても末永く続きますように。我々がよく言うように、ファシリテーターに一度なれば、いつまでもファシリテーターなのである。

ここに、2017年DG2のディスカッション活動の成功を宣言する。全ての方々へ深謝申し上げる。



DG2「情報とメディア」グループ(11月8日)



DG2「情報とメディア」グループ(11月22日)

### (3) 国際関係（日・ASEAN協力）グループ

ファシリテーター: Ms. Sevilleja, Katrina Mae Ann

PY：35名

#### A. グループ・テーマ・インフォメーション

##### a. テーマの詳細

日本とASEANの現在の協力関係について理解する。その上で、将来の両者による協力関係を強めるため青年がどのように貢献できるか議論する。

##### b. 期待される成果

- 日・ASEAN協力の性質、射程及び重要性についてより深く理解する。
- 日本とASEANの協調及び理解を促進するための特定かつ意義ある方策を考案する（短期と長期の両方）。
- 地域及び世界政治の文脈上増している日本とASEANの力について認識する。
- 各PYが自国の国内、地域、外交問題に関わっていくやる気を引き起こす。

##### c. 身につく能力

##### 知識

- 各種傾向や政治的な地域の矛盾を抱えながらも、日本及びASEANにおける各国で両者の協力関係の維持・強化のためどのような取組がされているか理解する。

##### スキル

- 国内的にも国際的にも協調と外交の強化に積極的な市民となるための戦略を考える中で、批判的で政策立案に役立つスキルを培う。

##### 行動

- 日・ASEAN協力におけるグローバル化の意味について理解を深める。

#### B. 事前課題

##### 個人課題1

ASEANを地域として、また地政学勢力として説明しなさい。（200ワード）

##### 個人課題2

日本のASEANに対する役割、また日本が地政学的に世界でどう動いているかを説明しなさい。（200ワード）

##### 個人課題3

現在の日本とASEAN間での連携について説明しなさい。（200ワード）

##### 個人課題4

あなたの国が地政学上、また日・ASEAN協力において、どう位置付けられているか。（300ワード）

#### 国別課題1

以下を議論したインフォグラフィックを考案しなさい。

- 自国で青年に対し影響を与える政治的、社会的、文化的、経済的傾向は何か。（例として、グローバル化、テクノロジー、サイバーセキュリティ、移民、環境破壊、気候変動、貿易、労働市場、軍拡競争など。ただし、この限りではない。）注：特定の傾向を取り上げて構わないが、必要とあらば重要な傾向を加えてもよい。
- 自国におけるこれらの傾向から読み取れることは何だと考えるか。
- 自国はこれらの傾向に対して積極的に取り組んでいるか。もしそうである場合は、どのような取組か。
- 自国に対するこれら傾向に関しての課題や機会は何だと考えるか。

#### 国別課題2

日・ASEAN協力の下で行われた自国におけるプロジェクトの一覧。

#### 国別課題3

以下の各事項に関する自国の立場について、概要説明をそれぞれ250ワードで述べなさい。また、自国にとって譲ることのできない優先事項とあなたの考える望ましい結果について明記すること。（注：自国の立場が公表されていない場合は、自らの意見に基づくもので構わない。）

- 北朝鮮による核の保有
- アジア太平洋における米中のリバランス
- 東ティモールによるASEANへの加盟
- その他任意の事項

#### C. 活動内容

##### 日本での課題別視察

**施設:** 国際機関日本アセアンセンター、特定非営利活動法人開発教育協会(DEAR)

##### 活動

国際機関日本ASEANセンター藤田正孝事務総長による「ASEAN設立50周年：新時代における日・ASEAN関係」と題した講義が行われた。その後、PYは貿易、投資、観光、交流の4グループに分けられ、各トピックにおいて日・ASEAN関係を進展させるための施策について議論した。

午後は、特定非営利活動法人開発教育協会（DEAR）による新・貿易ゲームと呼ばれるシミュレーションを体

験した。このワークショップでは、PYは7グループに分かれ、各グループは総理大臣、外務大臣、通産大臣、情報大臣、市民役の5名で構成された。各グループは異なる量の材料（ハサミ、紙、色紙、鉛筆、分度器、定規、ステッカー）が入った封筒を渡された。このゲームの指示は、自分の製品を市場に売ること各グループができる限り稼ぐことであった。製品とは、決まった寸法の三角や円、台形といった異なる形の切り抜きのことだ。つまり、PYは手持ちを最大限活用したゲーム運びのために戦略を立てなければならなかった。ゲームの中盤には、製品の寸法と価格が変更された。

##### 視察から学んだこと

講義からはASEANの歴史と日・ASEAN関係を学んだ。また、日・ASEAN間の貿易や投資について深く知ることとなった。議論では、日・ASEAN間の貿易、投資、観光や交流における問題に対しての施策をPYは大量に考え出すことができた。

**貿易** - 日・ASEAN間の取引関係と経済協力をより一層深める

**投資** - 大学のプログラムを通じて投資を促進し、また直接投資（FDI）の門戸を開くことでASEAN投資についての対話を喚起する。

**観光** - 地域主体の開発と日・ASEAN間の協定を通じ観光を促進する。PYはまた、各国間の直行便と各国において外国語ガイドが受けられる場所を増やすことを提案した。ASEANと日本でただ英語ガイドのみに依拠しないベトナム語、ラオス語、インドネシア語のツアーガイドが例として挙げられる。他にも、ASEANと日本の観光業をより振興するため、相互に競合するのではなく業界が一丸となるべく各国が戦略建てをするべきとの良い指摘があった。

**交流** - 文化交流や展示などの人的交流プログラムをより多く催す。PYは日・ASEAN協力を促進するASEANの目標に青年が積極的に関わることを提起した。

##### 新・貿易ゲーム

PYは各自の役割を演じ、最も自分たちの利益にかなうよう他「国」に赴き、異なる道具類を交換・売買・やりとりする交渉を行わねばならなかった。しかしながら、あるグループは他のグループを信頼せず、またあるグループは資源に乏しい他のグループを全く手助けする気がなかった。ある程度までこのシミュレーションは、他国が苦しみ援助を必要としていても助けの手を差し伸べない国々が存在する国際社会を反映している。資源が限られた者には、製品の寸法変更後さらなる災難がふりかかったことから世の中が不平等だと学んだ。PYはこのワークショップを以下のような言葉を用いて総括した。それらはすなわち、資本主義、正義、不平等、国際機関法、同盟、協力、敵対、戦略、ソフトな外交であった。

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- 国際関係と外交が、日・ASEAN関係の文脈でどう描写されるか理解を深める。
- DG3における基本ルールを策定する。
- 日本アセアンセンターでの課題別視察について評価する。
- 国際関係の基本について説明する。

##### 活動

- 東京での課題別視察の評価
- 国際関係の基本及び日本とASEANを巻き込んだ地政学的問題についての概略説明
- DG3の船内活動についての議論

##### 成果

- 東京での課題別視察の評価

日本とASEANの協力関係について、特に経済成長、人口、貿易、観光、協調、コミュニティ形成及び利益についてより知ることができた。午前中の講義が長く、より議論に時間を割くべきだとPYは考えた。また、日本アセアンセンターでのツアーやもっとスピーカーとの対話があればさらに有益だと提案した。

いつか外交官や大臣になることを目指すPYを触発するために外務省を訪れることが提案された。

- 主権、自治、国の存続、安全保障、現実主義、同盟、経済関係、不均衡、そしてASEANウェイについての議論。他のASEANについての問題としては、ASEANにおける日本の役割、メコン川における利益衝突、尖閣諸島の問題も話し合われた。
- PYは「東南アジア青年の船」事業の航行中、自分が割り振られた他国のPYに対し、気付かれぬようにだが親切にするという「シークレット・フレンド」と呼ばれる船内活動を考案し、2017年11月7日に開始された。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- 政治、経済、安全保障、社会・文化的側面における、日・ASEAN協力の幅広さと深さを理解する。
- アジア太平洋地域において台頭する政治シナリオが日・ASEAN協力に対して意味するところを理解する。
- 個人、国家、地域、世界といった単位でグローバル化が及ぼす影響を議論する。
- 最後の30分間は、DG1との共有セッションで、課題別視察で得た知識を教え合う。

##### 活動

- グループ・ディスカッションIの総括及び評価
- 日・ASEAN協力関係の構築に影響している政治、経済、社会政治的な様々な傾向についてグループでの議論
- DG1との共有セッション

## 成果

- 第1回目のセッションで得たものを要約し、また日本とASEANを繋げている外的な力についてさらに話し合った。当該地域に影響している要素として話し合われたのは、軍事同盟、日本のASEANにおける利益、米中韓EUのこの地域における利益、移民、労働力、国際NGOについてである。
- 議論が上がった傾向については、以下のとおりである。  
グループ1：グローバル化の影響、交通、社会的相互作用、技術、電子商取引、労働力や労働者の移動、情報とメディア  
グループ2：ソーシャルメディア、消費者動向、良質なコミュニケーション、情報への容易い接続  
グループ3：ソーシャルメディア、個人のコミュニケーション、食の安全保障  
グループ4：インターネット、気候変動、グローバル化による伝統文化の衰退、教育、観光業  
グループ5：シンガポールにおける労働市場と高額な教育、カンボジアにおける食の安全保障、そして教育や男女不平等。日本における家庭内暴力、ブルネイにおける石油事情、フィリピンにおける反政府活動、マレーシアにおける英語教育。  
グローバル化による全影響がまとめられ、PYはまたASEAN経済共同体、ASEAN政治・安全保障共同体、ASEAN社会文化共同体という、ASEANにおける3本柱について学んだ。  
DG1と共同の時間においては、PYは日本アセアンセンター、国際労働機関（ILO）駐日事務所、独立行政法人日本貿易振興機構などへの課題別視察で得た経験について共有した。

## グループ・ディスカッションIII

### ねらい

- 日・ASEAN協力に対する、より広くアジア太平洋地域から見た際の機会と課題を見つける。
- PY個人及びグループの目標設定（自己評価セッションで評価することになる。）
- 各国の青年に影響している社会、政治、経済的傾向を理解する。
- 地域的課題を和らげるための日本やASEAN各加盟国における良い実践例や教訓を取り上げる。
- 他国に適用可能な活動例を見つける。

### 活動

- 個人及びグループの目標を書く。
- PYは国ごとに分けられ、国別課題2の発表を行った。
- 当該地域においてサイバーセキュリティ上の脅威により台頭する緊張状態につき、模擬閣僚級会議を行った。

## 成果

- PYは自国における現在の社会、経済、政治的な傾向について発表するよう求められ、それらが青年にどう影響するか話し合った。
- 日本**（日本の人口は高齢化しており、国をより活動的で若々しくするため出生率向上という課題がある。低出生率と他のアジア各国に比べ厳しい仕事文化）
- ラオス**（留学希望者の増加により、奨学金獲得の可能性を高めるためのボランティアやセミナーへ参加する学生が多い）
- ミャンマー**（食の安全保障：中国から輸入した製品は食べても安全な保証がない。教育：多くの学生が教師を目指すようになり、中退率が下がっている。メディアの対応が不十分：実力不足のため、国際的メディアと呼応できない。）
- ブルネイ**（若者の失業問題、石油やガス産業及び政府への過度な依拠。再生可能エネルギーの利用を拡大する必要性、中小企業の台頭。オンラインショッピングサービスを持たず、Fashion ValetやZaloraといったマレーシアのウェブサイトにも過度に依拠している。）
- シンガポール**（競争力の高い労働市場、国際的教育への注力、上等な医療制度、レベルの高い統治）
- ベトナム**（直接投資の促進、学生の留学熱、農産業の急成長、国内での技術の進展）
- ラオス**（ソーシャルメディア：社会的なつながりの多用、フェイクニュースの拡散、サイバー・パトロール戦略）
- カンボジア**（国家による青年への科学・技術・工学・数学教育の促進。外国の方が稼ぎが良いためより多くの若者が働きに国を出ることで流出が増えている。他の東南アジア諸国は移民への仕事を供給できる。）
- フィリピン**（HIVとエイズの症例が8割増加し、その大半は若者である。HIVの脅威が広がっており、職場での差別がしばしば行われる。教育の欠如）
- マレーシア**（国内では多数の卒業生に対し働き口が不足している。これがしばしば晩婚化に結び付き、国内出生率に影響する。国外への頭脳流出）
- タイ**（電子商取引：高い需要と買い手にとっての利便性があるが、ウェブサイトのセキュリティ次第では個人情報流出の危険性もある。また、製品の品質が表示とは異なることがある。）
- シミュレーション**
- PYは域内で台頭する問題を扱った模擬会合を行った。当該地域においてサイバーセキュリティ上の脅威により台頭する緊張状態につき、模擬閣僚級会議を行った。PYは各国の閣僚として問題対処のための全体交渉を行った。（事例:シンガポールの官民におけるファイルが「IGO」というコンピューターウイルスに感染し、通産業界で警戒されている。この

ウイルスの影響は大規模で、シンガポールの国としての優先課題となっている。このウイルスはシンガポールの輸出入品に遅配の脅威をもたらしている。シンガポール当局はこのウイルスがフィリピンのマニラにある技術集積地由来であることを突き止め、フィリピン政府にこの問題に対処を要請し、外交問題への発展まで示唆した。アメリカの協力を得たフィリピンは、本件はマレーシアのテロリストが問題をそらすための裏工作だと主張した。マレーシアはそれについて否定している。）

## グループ・ディスカッションIV

### ねらい

- 特定の現在の課題について、異なる国の意見や立場を理解する。
- 域内に影響を及ぼす可能性のある現在の問題に注目する。
- 地域・国際レベルで議論がどのように行われるか理解する。

### 活動：

- PYは自国とは異なる、日本もしくはASEANの国に振り分けられた。知識の差が出ないようにファシリテーターが振り分けを行った。
- PYは自分が割り当てられた国の特定の問題に対する立場についての情報を与えられた。
- JASEAN（日・ASEAN）模擬サミット  
地域に影響を与えかねない3点についての議論。それらはアジア太平洋における米中のリバランス、北朝鮮の核保有、ISISの脅威である。

### 成果

各国及び割り当てられたPY達はディスカッションにおいて意見を述べた。

PYは域内に隠れた問題を見つけることができ、また各問題に対して望ましい立場をとることができた。各自割り当てられた国のアジェンダや優先事項、譲ることのできない事項、望ましい結果が何か、を述べることができた。

## カンボジアでの課題別視察

**施設：**王立プノンペン大学国際学科

### 活動

講義及びローカルユースとの交流

### 視察からの学び

PYは大学がどのようにして建学され、そしてポルポト政権下どのようにして閉鎖を余儀なくされたかという歴史を紹介された。日本とASEANについての講義も行われた。

PYはまたローカルユースと膝を突き合わせる機会を得て船内での学びやグループ・ディスカッションで得た

ものについて共有した。

## グループ・ディスカッションV

### ねらい

- 日本とASEANの強固で戦略的な安全保障、経済、政治上の協力関係を展望する。
- 日・ASEAN関係進展における青年の役割につき議論する。
- シミュレーションについて総括及び評価する。

### 活動

- シミュレーションについての評価
- アジェンダ・プロジェクト・ボードの作成（PYは日・ASEAN協力における青年の役割を活用した自らのプロジェクトを考案するよう求められた。）
- プノンペンにおける課題別視察の評価

### 成果

「IGO」ウイルス

PYは、国家的脅威及び通商の安全保障というIGOウイルスによる二大問題を見つけることができた。さらにIGOウイルスが地域全体へどう影響するかについても言及していた。日本とASEANの枠組みによる地域協力でこの課題に対処するアイディアが出た。

概して、情報が乏しい中、自発的なシミュレーションによって実に良い出来となった。

### 米中のリバランス

ASEANは米中のリバランスに対して中立的立場を堅持するべきかという議論がなされ、全員が中立に賛成だった。各国は国益のため自らの外交方針に沿って決定を行う権利があり、その意思決定に干渉されるべきではない。

### 北朝鮮の核保有

北朝鮮による核実験は誰も支持しないところである。そこでグループとしては、北朝鮮に対しその行為が朝鮮半島のみならず地域また世界の平和と安全保障への脅威だとして共同の非難を提起した。

### 東ティモールのASEAN加盟

東ティモールはオブザーバーとしてのASEAN参加国であった。ASEAN加盟の決議は経済格差が大きすぎるとの理由で他国から阻まれていた。

### ISIS

グループではこの決定的な問題に対する重大な懸念とイスラム過激派の残忍で非人道的な行いに対する非難が共有されている。日本は安全保障のための技術的な支援が可能として、グループは日本にASEANのパートナーとして大きな役割を期待した。

### 要点

PYは、他国の立場に立つことで、他国のものの見方や優先事項を理解する機会を得た。

PYは地域に影響する傾向や矛盾について基礎的知識

を身に着け、それらを交渉や更なる議論に活かすことができた。

#### D. 決意・期待される今後の活動

##### 活動

PYはディスカッション活動で何を学んだかにつき議論し、意見を共有した。

PYはグループに分かれ参加国における諸問題への重要政策について話し合った。問題例の一部としては、移民、経済、貿易、教育、環境、暴動への対処法などが挙げられる。

PYは国ごとに分かれ、事後活動についてのアイデアを話し合った。

##### 成果

事後活動のアイデアは次のとおり紹介された。（発表順）

ブルネイ - 青年への啓発トークイベント、日・ASEAN協力についての啓蒙イベント

日本 - 日本とASEANを含んだ安全保障問題についての国際会議

タイ - 文化祭、経済的困窮者への奨学金

カンボジア - 経済的困窮者への奨学金（2018年に1～2名を目標とする。）

シンガポール - 日・ASEAN協力について地元青年を対象としたトークイベント

インドネシア - 小学校における日本とASEANについての国際展示会

ミャンマー - 政府運営の学校への講演活動

ラオス - ビエンチャンでのASEAN模擬サミット

フィリピン - 田舎の学校を運営する（3年制）

マレーシア - グリーン・フィットネス（環境面での日・ASEAN協力についての啓蒙キャンペーン）

ベトナム - 日・ASEAN協力についてのセミナー

#### E. 評価・反省（自己評価セッション）

ASEAN地域の政治構造、この台頭する地域の力に影響する諸問題、地域全体が教訓を持ち注意する過去・現在における国同士の地政学的緊張関係、国民国家の利益、今後数十年、地域に影響を及ぼすだろう戦略的ショックについての議論でDG3は始まった。ASEANにおける日本の役割、地域におけるその力量、またアジア太平洋の事柄における利益についての説明からこの議論に入っていた。

これらは、地域政治や国際関係は本に載っているただの概念ではないことをPYに分かってもらうために必要な作業だった。定型の既成概念から離れることはPYにとって意義深く、回を追うごとに、DGは概念や理論についての教科書的な議論が中心となるべきではないという風になっていった。PYにとって、国際関係の知

識を応用して地域やその様相、活動を理解し、日本とASEANが相互協力を強めるためにどう手を結ぶことができるかを考えることがDGの目標の一つであると理解することが重要であった。

このテーマのねらいは日・ASEAN協力の現状を理解することにあったが、ファシリテーターとしては、それは異なる国々の政府書類や公式声明を読みさえすれば容易に達成できると感じた。こうした類の議論から離れて、PYが楽しめ心待ちにするような経験的学習の活動を用いることがDGの目標であった。毎回、退屈な議論が起きることへの不安に立ち向かわなければならず、よって、船酔いやインフルエンザの船内流行の中でPY達のやる気を引き起こすことは大変だった。

序盤では、国家の自己利益や、自治の概念、覇権、今後地域が影響されることになるかもしれない複雑に絡み合う政治、繰り返される諸問題、大も小も含んだ地域の利害関係者、経済格差、文化の多様性、国同士の協力と外交の美しさ、など国際関係の考え方をみていった。日・ASEAN協力の原則を理解するための土作りとして、グループでこれらの概念に対して時間を割かねばならなかった。

このような考えを深掘りするため、より対話型で応用的な活動に時間を費やした。それらは、他国で導入された種々の政策について小さなグループに分かれての議論だったり、事例分析、模擬地域フォーラム、模擬閣僚級会合、アジェンダづくり、立論や政策や声明立案、そして何よりビジョン・メーカーなどであったりした。

##### 課題

PY間の知識量の違いは常に懸念点であり続けた。グループには国際関係学を大学院で修了した者から、国際関係についてほとんど聞いたことがないPYまでいた。その中間は、国際関係や政治について少々知識があったり、又は興味や意欲はあるが浅い知識に留まる者であったりした。

船酔いとインフルエンザの船内流行もまた障害となった。PY達はマスク着用で頭がふらふらしており、ファシリテーターとしてはディスカッションに気を引くための応用的な活動をその場で考え出さねばならなかった。

また、南シナ海、ロヒンギャ、メコン川など敏感な話題をグループで議論するのも気を遣った。言葉の使い方には特段気を付け、他のPYに対して十分に慎重でいなければならなかった。PYの中にはこれらの話題についてより深掘りすべきと考える者もいたが、グループの中で敵対意識が醸成されないようにするため、憚られた。PYの大部分が国際関係の議論に慣れていないことを考えると、グループとしてはこうした話題に対する政治的立場に関してより注意深く、思慮深くあらねばならなかった。

概して、PYは目標は満足に達成されたと考え、グ

ループは非常によくまとまることができた。しかし中には、ディスカッション・グループではさらに種々の政策議論をし尽くし、現実的な問題について言及していくことができたとする声もあった。とはいえ、国際関係への興味は効果的に喚起された。

#### F. ファシリテーター所感

DG3は存分に潜在能力を発揮した。私はPYの努力量、情熱、世界のニュースと政治への想い、知性、国内問題についての知識、祖国への愛、互いの相違に対する尊敬、そして何より我々の間に湧き出てきた愛を、非常に心強く思った。

我々の行った議論にも増して、私はPYとの間に結ぶことができた絆をありがたく思っている。PY達は私に昨日よりもさらに良く、そして私の知っている全てを伝えたいと思わせてくれる存在だった。多くのPYが私を朝食、昼食、夕食に誘ってくれ、とても積極的に私のことを知ろうとしてくれ、政治や国際関係について質問してきた度に、嬉しく思った。私は自分が国際関係の権威だとは思わないが、PYが私を頼れる存在に、助言者に、そして何より姉に見てくれて幸せだった。ファシリテーターないしディスカッション・グループの管理者としては、ある意味でPY達が輝けるように触発し、「何者」かになることを目指し自分の好きなことに一生懸命になりたいと思わせることができれば、DGの目的は達成されたと言えよう。与えられた知識にも増して、一人ひとりのPYの心の奥底から湧き出る志と情熱が、私を



DG3「国際関係（日・ASEAN協力）」グループ（11月9日）

突き動かしたのであった。

5セッション分のディスカッションのファシリテーションを通じて、私の計画書が包括的で充実した経験に落とし込まれたといえるかどうか、本当のところは定かではない。より示唆に富み、実践的なディスカッションを作り出すべく、さらに長い時間が割り当てられていればと思う。毎回のディスカッションの後に深くフィードバックを受け、振り返る時間が、そしてグループの需要と興味に合わせられるようテーマ計画を改善する十分な時間がほしかった。船内活動予定中、ディスカッションの時間がもう少し分散していれば、よりバランス良く微修正を行うことができたであろう。このようにたればの仮定話が多いが、それでも、私は自分の知り得るものを逐次共有することができPYを触発するのに全力を尽くしたことに満足し、大変嬉しく思っている。管理部からの連絡や指示がより明瞭であればとも思ったが、私がファシリテーターとして精進することとなった。仕事を共にすることができ、内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センター、管理官、管理部員、NL、乗組員、そして同僚のファシリテーターに心から感謝している。このとてつもない経験の後、私は大いなる活力、平穩、愛、情熱、そして知性を携えて元の場所へ帰ることができた。さらに特筆すべきは、2度目となる「東南アジア青年の船」事業の後、面白いことに私は人物的に磨かれ、より強烈なことに、真新しい自分になることができた。この先起こりえないだろう程の出来事である。



DG3「国際関係（日・ASEAN協力）」グループ（11月14日）

## (4) 生活習慣病対策グループ

ファシリテーター: Ms. Shah Richa

PY: 37名

### A. グループ・テーマ・インフォメーション

#### a. テーマの詳細

日本とASEAN各国における生活習慣病の現状と課題について理解する。その上で、健康的な生活を守り、全ての人の福祉を向上するために青年はどうか貢献できるか議論する。

#### b. 期待される成果

- 日本とASEAN域内を中心に、生活習慣病の世界的な動向と予防法に対する理解を深める。
- 日本とASEAN域内における生活習慣病の教育、予防、治療に関して、様々な組織（地域、政府、非営利・非政府組織、国際機関）が現在主導しているプログラムについて学ぶ。
- 事後活動のため、持続可能なプロジェクトを企画するべく青年活動の主導や参加についてやる気と能力を身につける。

#### c. 身につく能力

##### 知識

- 生活習慣病が有する多様な面と、国連持続可能な開発目標（SDGs）との関わりについて知識を得る。
- 生活習慣病と「東南アジア青年の船」事業での他のディスカッション・テーマとの関わりについて理解する。

##### スキル

- 生活習慣病を予防するために青年ができることを認識する。
- 青年が関わることによって生活習慣病での死亡率、罹患率、障害を減らす行動計画を立てる。

##### 行動

- 議論やグループ活動を通じ、チームでコミュニケーションをとり協働できるようになる。
- 共同作業やコミュニケーション、チームワークを通じて、対人や対異文化の能力と寛容さを育む。

### B. 事前課題

#### 個人課題1

自国での生活習慣病に関する状況と防止策についてレポートを書くこと（600～800ワード）。写真や図表があっても構わない。生活習慣病の発生が過去10年間でどう変化し、もしあればその理由についても述べること。政府、非政府・非営利組織、国連や世界保健機関などの国際機関といった様々な組織が予防においてどのような役割を担っており、SDGsとどう関係しているかについても含めること。この課題は、国別課題1に使われる。

#### 個人課題2

以下のリンクにある文献を読むこと。

- <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC2862441/>（職業による生活習慣病：新たな問題）  
グループ・ディスカッションI、II、IIIのため、職業による生活習慣病について理解する。
- <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/books/NBK2290/>の第18章（サハラ以南のアフリカにおける疾患と死亡）  
これはグループ・ディスカッションIIに向けたものである。
- <http://www.prb.org/Publications/Articles/2011/youth-and-chronic-diseases.aspx>（慢性の疾患は青年に影響を及ぼす）  
これはグループ・ディスカッションII、III、IVに向けたものである。

#### 個人課題3

青年の立場から生活習慣病に立ち向かう革新的なアイデアを最低2つ出し、それぞれにつき100ワード以内で説明すること。これはグループ・ディスカッションVに向けたものである。

#### 個人課題4

多様なレベル（個人、地域、国家、国際）における生活習慣病の予防に青年がどうか貢献できるか考察し、200～400ワードのレポートを作成すること。更に、もし存在する場合は、生活習慣病について改善する取組を行う自国の青年や青年組織について調査すること。以下は質問例である。

- 生活習慣病に立ち向かう際、青年組織や若者が担うべき役割とは何か。
  - こうした役割へどのように若者を動員することができるか。生活習慣病との闘いに関し、何ができるだろうか。
  - この問題を扱うにあたり、医療系の学生や若い職業人には特段の役割があるだろうか。
  - これらの問題を扱うにあたり、世界保健機関やその他組織はどのように若者を支援できるだろうか。
- この課題は、グループ・ディスカッションIVに向けたものである。

#### 国別課題1

自国での主な生活習慣病、有病率、もしあれば特徴、過去10年の変化パターン、日本と他のASEAN各国との

類似点と相違点についてのパワーポイントでのプレゼンテーション（5分間）を10～15スライド用意すること。プレゼンテーションは、グループ・ディスカッションIにおいて行われる。

#### 国別課題2

自国における生活習慣病のリスク要因を示す写真を各人最低2枚撮影すること。これらの写真を使用して各国ごとにパワーポイントでのプレゼンテーション（最大10スライド）若しくはポスター発表を、生活習慣病のリスク要因とそれらが引き起こす疾患につきそれぞれ5分間ずつ行うこと。このプレゼンテーションはグループ・ディスカッションIIにおいて行われる。

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

施設：株式会社タニタ総合研究所

##### 活動

- タニタの歴史と生活習慣病予防への取組、そして健康寿命を延ばすことについての講義
- タニタの歴史を紹介するコーナーへの訪問
- PYの食需要に基づいて、タニタ食堂にてカロリー摂取量の制限された（500キロカロリー）ヘルシーな昼食
- PY全員に対する身体組成（筋肉量、骨量、体脂肪率、代謝率など）の測定
- 社員の生活習慣を向上させるタニタの取組についての紹介
- 質疑応答
- タニタ社内にある足つぼ刺激の道を散歩

##### 視察から学んだこと

- 健康のための6原則：禁煙、程よい飲酒量、程よい食事量、睡眠、運動、水分補給。
- 健康食であっても美味しく、食べ応えあるようにするのは可能。
- 自らの健康と生活習慣に気を付け責任を持つことの重要性。
- 座りっぱなしの生活も全社的な取組によって改善は可能。

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- PYの目標を理解し、SSEAYP Tank用に7つのグループをつくる。
- PYの国における生活習慣病の現状について知る。
- 生活習慣病の変化パターンを査定する。
- 生活習慣を改善し、生活習慣病を減らすための各国の考えや知識、スキルを共有する。

##### 活動

- ファシリテーターによるDG4テーマへの導入に始ま

り、ディスカッションの目的について説明がなされた。

- 国別課題1で指示されたとおり、国ごとにプレゼンテーションと質疑応答を行った。
  - PYは互いをよりよく知るため7つのグループに分かれ、グループの名前、目標を設定し、個人課題2（生活習慣病に立ち向かうための革新的なアイデアを創り出す）について議論を進める。
  - 各グループで名前をつけ、自分たちの目標と紹介をつくる。
  - タニタ総合研究所への課題別視察の振り返り。
  - Shark Tankのビデオの例を視聴してSSEAYP Tankについて概説する。
  - それぞれの新しいグループでミニ・アイスブレイキングを行い、SSEAYP Tankの素案について議論する。
- #### 成果
- PYは互いに知り合い、達成したい目標について議論した。
  - プレゼンテーションにより、日本とASEANにおける健康実態と現状について認識がなされた。
  - 異なる国で直面する健康実態の類似点と相違点について理解することができた。
  - SSEAYP Tankの趣旨と実施について理解した。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- 生活習慣病の原因とリスク要因を認識する。
- 生活習慣病関連の用語につき理解する。
- 生活習慣病の予防・治療法を見出す。

##### 活動

- 国別課題2で指示されたとおり、多様なリスク要因と生活習慣病の関連について国ごとにプレゼンテーションと質疑応答を行った。
- 慢性疾患の流行についてのビデオを視聴し、エビジェネティクスについて理解した。
- 健康的な生活習慣を広めるためのスローガンをグループ別で用意した。
- 肥満、バランスのよい食事、運動不足、その他用語の意味について話し合った。
- 睡眠衛生を保つための行動原理がファシリテーターにより紹介された。
- SSEAYP Tankについて話し合われた。
- グループ・ディスカッションIIの総括を行った。

##### 成果

- 多様なリスク要因及び、その生活習慣病との関連について学んだ。
- ASEAN各国で似たリスク要因があり、地域の取組で対峙することが可能であると学んだ。

- c. 互いに健康的な生活習慣を促進し生活習慣病に対峙する動機付けとなるようなスローガンを、各グループで作成した。忘れがちだが健康的な生活習慣についてPYに基本事項を思い起こさせる際、キャッチーで有用なスローガンであった。
- d. 健康的な生活を送ることは可能で現実的なことであり、運動の習慣、ジャンクフード・喫煙・暴飲を避けるなど食や栄養以外の行動があることを学んだ。
- e. 慢性疾患やエビジェネティクスについて新たな見解を得た。
- f. PYはこの機会に、認知向上のための複数の方策、健康的な生活習慣の重要性について話し合い、そして自らのアイデアをSSEAYP Tankに組み込んだ。

### グループ・ディスカッション III

#### ねらい

- a. 見過ごされている生活習慣病（口腔衛生、精神衛生、労働衛生など）について知る。
- b. 若者における生活習慣病のリスクについて理解する。
- c. 健康的な食事とはどのようなものか理解する。

#### 活動

- a. 日々の行いに起因する見過ごされた生活習慣病についてグループで議論・ブレインストーミング・発表を行った。
- b. 身体に密着した服装やハイヒール、不眠、脱水、悪い姿勢、悪い口腔衛生や携帯電話の過度な使用が健康にどう影響するか話し合った。
- c. 精神衛生（うつ病）についてのビデオを視聴した。
- d. 仕事による生活習慣病について話し合った。
- e. 若者がいかに生活習慣病に影響されているかをグループごとに議論、発表した。
- f. また、肥満度指数（BMI）と体脂肪率との関係についても積極的な議論を行った。
- g. グループでSSEAYP Tankに向けて議論を行った。

#### 成果

- a. 単純な日々の習慣や癖でさえ我々の健康状態に影響を及ぼし得ることをPYは理解した。そこで、日々の習慣や仕事からのリスク要因を避けるために我々は用心して予防措置を講じねばならない。
- b. 多くの病気が互いに関係しており、慢性疾患が精神病につながる可能性のあることを理解した。
- c. 異なる生活習慣病について学び、労働衛生について議論した。
- d. うつ病やその他の精神疾患について理解を深めた。
- e. SSEAYP Tankのアイデアを増やすことができた。

### グループ・ディスカッション IV

#### ねらい

- a. 生活習慣病の直面する課題について知る。

- b. SSEAYPの様々なディスカッション・テーマが生活習慣病を改善させることに繋がり得ることを知る。
- c. 生活習慣病に立ち向かうにあたり青年の担う役割を理解する。

#### 活動

- a. 7つの小グループに、DG4以外の7つのグループ・テーマが割り当てられた。各グループとも与えられたグループ・テーマについて、個人・地域・国家・国際のレベルで議論し、発表を行った。
- b. PYはビデオ視聴後、生活習慣病の直面する課題について議論した。
- c. こうした生活習慣病に対峙する様々な方法についてファシリテーターが説明した。
- d. 7グループともSSEAYP Tankに向けて話し合いを行った。
- e. 今回の総括を行った。

#### 成果

- a. PYは生活習慣病の直面する課題について知ることができた。
- b. 我々の現在の健康状態が次の2世代の健康状態に影響するという「100年効果」について学んだ。
- c. エビジェネティクスと慢性疾患の関係について理解することができた。
- d. 8つのディスカッション・グループ・テーマが生活習慣病の改善に繋がり得ることが分かった。例えば、情報とメディアでは、それを活用して人々に適正体重で運動をしたいと触発するよう行動に働きかけることができる。
- e. 喫煙をやめ、アルコール摂取量を減らし、推奨された程度まで運動を行い、バランスのとれた食事をし、小さな生活習慣の改善によって生活習慣病から回復できる。

### カンボジアでの課題別視察

#### 施設：KHANA

カンボジアでのHIV/AIDSに立ち向かう非政府組織である。

#### 活動

- a. ASEAN各国におけるHIV/AIDS感染者の現状と、特にカンボジア特有の状態への原因についてプレゼンテーションがあった。
- b. HIV/AIDS感染者の数を抑えるカンボジア政府の行った施策についても説明があった。
- c. PYは3つのグループに分かれ、プレゼンテーションを行うことを念頭に、生活習慣病に立ち向かうために執り得る施策について議論することとなった。
- d. 議論とプレゼンテーションのためPYには15分間与えられた。
- e. グループごとに2分間のプレゼンテーションと1分間

の質疑応答を行った。

#### 視察から学んだこと

- a. カンボジアでのHIV感染者数の統計について学んだ。
- b. また、HIVの原因や、HIV/AIDSに立ち向かうためカンボジア政府が行う取組についても学んだ。
- c. PYは議論を通して理解を深めることができた。
- d. 生活習慣病対策は一過性のものではなく継続的に行うべきものと学んだ。

### グループ・ディスカッション V

#### ねらい

- a. Shark Tankについて観る。
- b. 施策立案を行う。

#### 活動

- a. PYはSSEAYP Tankに向けた準備を行った。
- b. カンボジアでの課題別視察の振り返りを行った。
- c. 7つ全てのグループがSSEAYP Tankに向けたアイデアについて3人の審査員を前に発表し、審査員からは改善点のフィードバックがあった。
- d. 最も良いアイデアを出したグループへの表彰を行った。

#### 成果

- a. 健康関連アプリや衛生教育のゲーム、健康啓発イベントなど、各グループとも異なる、革新的なアイデアを出してくれた。
- b. SSEAYP Tankに向けて準備することで、PYは異なる国と様々な背景から成る人々でチームとして協働できるようになった。
- c. PYは審査員による批評とコメントを受けることができた。

### D. 決意・期待される今後の活動

一連の議論・ブレインストーミングや双方向型の講義により、PYは船上で問題点や解決策を見出すことができた。

- a. 揚げ物
- b. モーニング・エクササイズは参加が義務付けられていない。
- c. PYの水分摂取量は不足していた。
- d. 座っている時間が長かった。
- e. モーニング・エクササイズは屋内のため、PYは新鮮な空気に触れることができなかった。
- f. PYはカップ麺やスナックを毎晩食べる傾向にあった。このような問題を解決するため、PYは以下の施策を考えた。
  - a. 食事にはより油の少なく揚げ物でないものを出す。
  - b. エクササイズの参加を義務付ける。
  - c. エクササイズはスポーツデッキで行われるべきである。

- d. PYの水分摂取が更に励行されるべきである。PYの自主活動には以下のようなものがあった。

- a. ズンバと脂肪燃焼のセッション
- b. バランスの良い食事についての知識を広めるためDG掲示板を活用した。

2017年11月14日、DG4のメンバーは生活習慣病の罹患率を減らすための施策を多く考え出し、SSEAYP Tankに組み込んだ。

1. **Healthy League App:** Healthy Leagueとは、ゲームを行い、勝つためにプレイヤーが歩かなければならないというアプリである。身体運動を励行することで生活習慣を向上させるだけでなく、このアプリはプレイヤーに対し楽しく双方向型で有用な情報を提供するものである。ほかにも、生活習慣に関して近隣で行われるイベントについての情報も提供する。
2. **Tinder-Run App:** Tinder Run は、プレイヤーが同じゲームをプレイする者とランニングに出かけることのできるアプリである。健康的な生活習慣を実践するのに加え、人と互いにより知り合い、健康的な生活習慣について同じ興味関心を分かち合う。
3. **Sunday Fun-day Event:**これは、毎月第一日曜日に開催される若い家族向けのイベントである。フィット・ファン・フードの3要素で構成されており、フィット部分についてはズンバやヨガなどの時間が組み込まれている。ファン部分については参加者が遊びながら健康についての楽しい事実を学ぶことができる非常に大型のボードゲームが含まれる。フードについては、用意された原材料から完成するまでの料理体験が盛り込まれている。
4. **Red Flag:** DG4のあるグループでは、定期的に飲酒する人向けに注意喚起アプリをつくり、脱水症状を減らすことを考えついた。なぜならば、脱水症状は多くの生活習慣病の主要因となるからである。このアプリがあれば、間違いなく一日中水分の足りた生活を送れるであろう。
5. **So-Walk:**また別の携帯電話用アプリとして、ナイキとアディダスと提携して歩数を計算してくれるものである。主な利点としては、一定の歩数までナイキかアディダスで商品購入時に7%から13%までの割引を受けることができるため人々がより多くウォーキングやジョギングを行うことである。
6. **Health Meter:**また他の革新的アイデアとしての、スマートプレートとアプリである。プレートはWLANを通してアプリと繋がり、ユーザーが食べ物のレシピを入力するとカロリー計算を行ってくれるというものである。
7. **NutriMax:**モバイル・アプリであり、ユーザーがカメラで食べ物をスキャンすると栄養分の計算ができる。他の特徴として、(1) 健康的な料理のレシピの表

示、(2) ランニングやウォーキングの補助機能がある。

### E. 評価・反省（自己評価セッション）

PYは振り返りを行い、設定した個人目標に沿って、達成度の自己評価をすることを課された。

#### 達成された目標

- 日本とASEANにおける生活習慣病についてより深く学ぶことができた。
- 見過ごされがちな職業に因るような生活習慣病について知った。
- これらの慢性疾患の問題を解決するために日本とASEANで採用されている異なる手立てについて共有し、学んだ。

#### 収穫

- 11の参加国における生活習慣病の直面する現状と課題、リスク要因について、保険制度も交えて理解を深めた。
- SSEAYP Tankにより、各グループで議題について効果のありそうなアイデアをブレインストーミングすることができた。
- 日常で多くの人が見過ごす生活習慣病について知った。
- 異なる背景と文化を持つ友人をたくさん作ることができた。
- 詳細で正確な自らの身体組成分析につき知ることができた。また、自分の肥満度指数についても計算できるようになった。
- 今や日々の健康的な食べ物や運動についてより意識的になった。
- DG4のPYは他のPYに対して、ダンスを用いたDG4のフィットネス・セッションに参加を呼び掛けることで健康的な生活習慣を持つよう勧められるようになった。
- 異なる活動を通じて、コミュニケーションとプレゼンテーションのスキルを向上することができた。

#### 事後活動

ディスカッションによって、PYたちがDG4に関連した洞察や提案をより上手に行えることに繋がった。PYは生活習慣病を医療問題というより公衆衛生や自己認識の問題ととらえることができるようになった。多様な背景からなるPY同士の交流は、より効果的で現実的で実現・持続可能な事後活動を企画することに繋がった。

### F. ファシリテーター所感

第44回「東南アジア青年の船」事業における生活習慣病対策グループのファシリテーターに選ばれて大変に光栄である。この素晴らしい機会を頂戴し、日本政府内閣府に対してはどこまでも感謝の念に堪えない。医師であり世界の公衆衛生を学ぶ者として、この機会に日本とASEAN各国の青年へ生活習慣病対策の啓蒙と啓発を行

うことができた。

#### 事前課題

ディスカッションのための事前課題や資料を用意するにあたり、内閣府からいただいた情報は正確で有用であった。更に、DGのメーリングリストを設けてくださったことは、PYのことを知るのみならず課題やその後のDGの活動に関する懸念や質問についてやり取りするうえで助けとなった。PYの教育・職業背景は多様であり、医学や医療領域、公衆衛生、薬学、工学、法学、国際関係やビジネスなどのように異なる分野から集まっていた。多くのPYが医療関係者でなかったため、事前課題は異なる専門用語や基本知識、テーマや日本と東南アジアでの生活習慣病の現況についての理解を持ってもらう上で役に立った。

#### 課題別視察

東京にあるタニタの研究施設を訪れることで、PYは自らの身体組成測定を行う精密機械を使用する直接的な経験を持つことができた。体脂肪率、筋肉量、肥満度指数、骨量、基礎代謝率やその他健康面で重要な多くの要素について測定することができた。バランス良いカロリーの健康的な昼食をごちそうになり、敷地内の足つぽを刺激する歩道を歩くこともできた。加えて、タニタでは社員に健康的な生活習慣を持ってもらうよう働きかけており、職場では座りっぱなしである必要はないということを学んだ。

カンボジアでは、この国のHIV/AIDSに立ち向かう非政府組織KHANAを訪れ、日本とASEANにおけるHIV/AIDSの変わりゆく傾向について詳しい講義をいただいた。そして、生活習慣病に立ち向かう上で青年に何ができるかという双方向的な議論へと続いた。

#### 船内ディスカッション活動

PYには、生活習慣病とその予防について学ぼうという明らかな熱心さと意欲が認められ、全てのグループ・ディスカッションと活動に積極的に参加していた。中には自らの英語による理解度とコミュニケーション能力を心配する者もいたが、言語や難しい専門用語の障壁を乗り越えようと全員が他のPYに対して励ましの手を差し伸べることに意欲的だった。

最初のディスカッションに入る前の導入セッションは、PYが互いを知り、各自のプログラムに対する目標を話し合う上で有用だった。導入セッションはまた、PYが安心して心地よくその後の交流や議論を行える環境を醸成してくれた。今回の主眼は、生活習慣病を医療従事者の医療問題とするのではなく万人にとっての健康問題として捉えることであった。

船内のディスカッション活動は、PYを7つのグループに分けることから始まり、各グループは異なる国のPYで構成された。各グループともディスカッションに対して明確な目標と期待を持ち、円滑で効果的なセッション

のためにグループのルールと目的を設定した。もっとも重要なルールは、互いの文化や意見を尊重しようというものだった。それぞれのグループ名も、FitSpire、Health Patrol、Pushers、Fit Fighters、Healthy League、The Salad、Kissable、と興味深かった。

各グループのスローガンは次のとおりである。

- FitSpire: 今日のFitSpireが、気持ち良い明日に繋がる
- Health Patrol: 生活習慣を一からやり直そう
- Pushers: 健康のための身体作り
- Fit Fighters: 体を鍛え、健康になり、健康でいよう
- Healthy League: 正しい食事をすれば、ズボンはきつくない!
- The salad: 良い生活を送って、健康に
- Kissable: 健康は、みんなが幸せな豊かさだ

PYはSSEAYP Tankに向けた企画を課された。SSEAYP Tankは、野心に燃える起業家の出場者が事業計画をプレゼンし、“Shark”な投資家からなる審査員たちがそれに投資するか否かを決める米国のバラエティー番組Shark Tankを応用したものである。

7つのグループは、上述D.の項目で話し合われた生活習慣病に立ち向かうための革新的なアイデアを考え出した。今日が技術とスマートフォンの時代であることから、ほとんどのグループがスマートフォンのアプリを思いついた。

PYは健康的な生活習慣を送ることに極めて意欲的で、2名のPYがプログラム中に禁煙し、煙草不要の生活を続けるための計画を立てた。運動と食事管理により適正体重になろうと多くの者がやる気になり、適正体重にある者は更に健康的な食事をすると公言した。我々はま



DG4「生活習慣病対策」グループ (11月7日)

た、不健康な生活習慣についての経験やどうそれを克服したかについて話す時間も設けた。

主導のミニ・ダンス・セッションを設けることで、ディスカッションは楽しく熱気あふれるものとなり、我々は他のDGにこのダンス・セッションに参加するよう呼びかけもした。PYはまた、航海中に自分たちや他の者が適正体重でい続けられるようズンパや脂肪燃焼、サーキットトレーニングなどのモーニング・エクササイズを行った。

全てのPYの、プログラムを通した懸命な働きと熱心さに感謝と祝福の言葉を述べたい。PYの明るい未来とこの先の冒険に幸あらんことを。私にとっても素晴らしい経験であり、リスク要因への新たな見方や、様々な生活習慣病の予防法について知ることとなった。また、全ての管理部門、NL、ディスカッション活動運営委員、にっぽん丸乗組員に対し、円滑なディスカッション運営のための御支援いただき御礼申し上げる。最後に、いつまでも私を支えてくれた同僚ファシリテーターのKoshu、Wai、Kat、Cho、Paez、Evan、Andyに特別な謝辞を送りたい。このメンバーなしには、「事後活動の企画・実践に向けての導入」資料と事後活動に関するプレゼンテーションの準備はできなかった。いつも大事に想える生涯の友を得ることができたし、私と全てのPYの励みとなってくれた。セッションが成功裏に終わったのも、こうした存在のおかげである。「東南アジア青年の船」事業の一員となることができ、私は幸運だ。

「東南アジア青年の船」事業の私の家族たち、どうもありがとう。



DG4「生活習慣病対策」グループ (11月14日)

## (5) 質の高い教育グループ

ファシリテーター: Mr. Somkiat Kamolpun

PY: 44名

### A. グループ・テーマ・インフォメーション

#### a. テーマの詳細

PYは、ASEAN各国と日本の教育の現状を理解する。それに基づき、全ての人に統合的かつ質の高い教育を確実に提供し、そして生涯学習を促進するために、青年がどのように貢献できるかについて議論する。

#### b. 期待される成果

- PYは、質の高い教育の推進に貢献することができる。
- PYは、政治的、経済的、社会的問題や課題を和らげるために教育を活用することができる。
- PYは、教育を事後活動に組み込むことができる。

#### c. 身につく能力

##### 知識

- PYは質の高い教育とは何かという基本知識を持ち、例えば伝染病と非感染症疾患、都市化と都市開発、貧困削減などといった、国連の持続可能な開発目標（SDGs）との関係性や、今年ディスカッション・テーマとの関連性を知る

##### スキル

- PYはディスカッションとグループワークを通して、協調性、説得力のある論理的思考能力、批判的思考能力を発達させる。
- PYはプレゼンテーション力、コミュニケーション力を高める。
- PYは他のPYのプレゼンテーションに対して建設的なコメントを提供することができる。

##### 行動

- PYはより責任感のある成長した人間になる（時間を守る、課題をきちんと行う、他人を尊重する）。
- PYは、違う国からのPYとのライフスタイル、働き方の習慣、ある問題に対する視点などの違いに対して容認することができる。
- PYは他者が必要とする時に助けを差し伸べることができる。

### B. 事前課題

#### 個人課題1

PYは、ディスカッション活動を通しての目標と期待を明確にすること。

#### 個人課題2

教育における利害関係者とその役割をまとめること。

#### 個人課題3

国連の17の持続可能な開発目標（SDGs）について簡単な説明を準備すること。

#### 個人課題4

持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development; ESD）についてと、それをサポートするための若者の役割について簡単な説明を準備すること。

#### 個人課題5

質の高い教育を推奨していくために若者が担う役割について、3ページにまとめること。

#### 国別課題1

各国の教育事情や現在の傾向について1ページにまとめること。

#### 国別課題2

各国の教育の課題について5分のプレゼンテーションを準備すること。

#### 国別課題3

各国の教育方針について5分のプレゼンテーションを準備すること。

#### 国別課題4

ASEANとASEAN+3の目標をサポートするための教育の役割について、3ページにまとめること。

#### 国別課題5

国連の持続可能な開発目標（SDGs）をサポートするための教育の役割について、3ページにまとめること。

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

施設：一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）、東洋大学

##### 活動

1. GiFTと東洋大学の紹介、2. 東洋大学の学生との交流、3. 自己実現・人生の物語・質の高い教育の意義と重要性についてのディスカッションとワークショップ、の主に3つの活動が行われた。

##### 視察から学んだこと

GiFTと東洋大学は、平和的な共存、人生の目的の実現、そして個人的な自己啓発における質の高い教育の

影響に重点を置いている。これらの目的に基づいて、GiFTは若者と大学生に対し、海外交流プログラムへ参加する機会を提供している。GiFTへの参加者は、プログラムが彼らの世界観を広げ、成長と自立を促し、人生の目標とキャリアへの道を確認させてくれたと満足感を表していた。また、この訪問においてPYは、質の高い教育の重要性についての自身の印象を共有することができた。この訪問は、DG5ディスカッションへの素晴らしい導入と基盤となった。

PYはGiFTと東洋大学を訪れることができたことに感謝している。地元青年や学生との交流は訪問のハイライトであった。同様に、PYたちはワークショップ、特に自己実現と人生の物語のワークショップへは積極的に参加し、満足していた。それに加えて、PYは質の高い教育の概念についてのワークショップにも参加した。これらの活動は、他のPYや文化、ライフスタイルに対する知識を高めただけでなく、PYが自分自身についてより深く知る助けにもなった。企画されていた活動以外にも、PYは大学の食堂で昼食を取り、日本の大学の雰囲気や学生生活を体験することができた。

振り返りに基づいて、PYからは、今後の課題別視察は講義よりもワークショップや地元青年との交流に重点を置くべきだという提案があった。また、地元青年はPYと交流できる適切な言語力があることも重要である。最後に、訪問と活動はDGのテーマに関連、集結したものであるべきだとの声もあがった。

#### グループ・ディスカッション I

##### ねらい

- 質の高い教育と持続可能な開発目標（SDGs）の概念を理解する。
- フォーマル教育、ノン・フォーマル教育、インフォーマル教育の概念を理解する。
- 教育事情と傾向を明らかにする。
- 各国そして東南アジアにおける教育の課題を明らかにする。

##### 活動

- ディスカッション活動を通しての目標と期待の再確認
- 日本での課題別視察の振り返り
- 以下の概念についてのディスカッション
  - 質の高い教育
  - 国連の持続可能な開発目標（SDGs）
  - 生涯学習を含む、フォーマル教育、ノン・フォーマル教育、インフォーマル教育
- 教育事情と傾向についてのブレインストーミング
- 東南アジアの教育の課題についての体験共有

##### 成果

- PYは個人目標と期待を考え出した。続いてグループでそれらを再考察しまとめた。最終的にグループ

は、以下の目標と期待について合意した。

- 質の高い教育、ASEANの教育、傾向と教育手法についての概念を理解する（国レベル・地域レベル・世界的なレベル）
  - 教育部門の課題と優先問題を理解する。
  - 教育政策の立案と実行プロセスにおける若者の役割を特定することができる。
  - 効果的なコミュニケーション力とパブリック・スピーキング力を身につける。
  - ディスカッション・セッションの成果をそれぞれの国で広めることができる。
  - 今後の協力とネットワークングのために、国際的な青年たちとつながりを持つ。
- b. PYは、教育の課題と政府がそれらにどう取り組んでいるかについて、情報とアイデアを共有した。

##### 1. 課題

ASEAN各国と日本は、特に教育のアクセシビリティと質という、共通した課題を抱えている。

- アクセシビリティとは、教育の不平等、特に社会的に取り残された集団や社会経済的に低い家庭の学生、地方の学生や女子生徒らに対する不平等を含む。教育のアクセスを阻むものとして、貧困、自然災害、武力紛争、学生の地理的問題などが含まれる。
- 質の高い教育についてのディスカッションは、教師の数と質、教育手法、カリキュラムの構成、カリキュラム外の活動、基盤となる設備、教材の不足などに着目する。グループは、教育の質に対する教師の持つ影響について広く議論し、非常に有能な人々が教師という職に魅力を感じるように、政府は教師の給与を上げる必要があると提言する。

共通する課題の他に、ある国では、例えば以下に挙げられるような特有の課題があった。

- 校内暴力（ブルネイ）、自然災害（インドネシア、ミャンマー）、武力紛争（ミャンマー）
  - 卒業生の能力と採用側が求めるものの不一致（シンガポール、タイ）
  - 基礎教育制度の違い（フィリピン、ミャンマー）
  - 国際共通試験（国際学習到達度調査／PISA、国際数学・理科教育調査／TIMMS）及び大学ランキングにおける競争（マレーシア、日本）
  - 人口統計の変化と高齢化社会（インドネシア、日本、フィリピン、タイ）
  - 地理的課題（インドネシア、ラオス）
2. 政府がどのようにこれらの課題に対応しているか
- アクセシビリティを高めるために、日本とASEAN各国には全ての子供に無償の義務教育を提供するという政策がある。学生たちが確かに教

育を受けられるよう、教育セクターに追加予算が割り当てられている。しかしながら義務教育や無償教育の期間は国によって異なる。

- ASEANの中のある国には、自然災害地域や武力紛争地域の生徒や児童養護施設に対し、特別な政策と予算がある。
- ASEANの中のある国には、保護者に対する「賞罰」制度がある。この政策は、保護者に子供を学校に行かせる動機を与える。この国では、子供への教育の機会を支援したり与えなかったりした場合、保護者は政府から罰が与えられる。
- 教育の質に関する課題に対応するために日本とASEAN各国の政府は、教師、カリキュラム、教材、設備の質を上げようと努力している。主な目的は、卒業生の雇用適性を促進させることと、国内外の共通試験の点数を上げることである。
- 多くの国は卒業生の雇用適性を高めるために、職業教育と技術教育、海外留学やインターンシッププログラムを優先させている。加えてこれらの国は全てのレベルの学生たちにキャリアガイダンスを提供することに重点的に取り組んでいる。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- a. 教育開発の中で政府と利害関係者の役割を理解する。
- b. 教育の持つ政治的、経済的、社会的発展への影響を理解する。

##### 活動

- a. 政治的、経済的、社会的発展を支援するための教育の役割についてのディスカッション
- b. 教育の利害関係者の特定
- c. 教育開発における利害関係者の役割についてのブレインストーミング
- d. 仮想国の教育課題に取り組むための利害関係者の役割についてシミュレーションとロールプレイを行う。
  1. グループメンバーの中で、互いに6つの利害関係者を選ぶ。
  2. 各グループは一つの利害関係者を担当する。
  3. 各グループは教育課題に対処するための自身の役割と、他の利害関係者にどのようなことをしてほしいかを明らかにする。

##### 成果

##### 教育における利害関係者の役割

- a. グループは、教育の利害関係者は教育に影響を与える、又は教育から影響を受ける人や組織であるということに合意した。
- b. グループは教育における主な利害関係者は以下の人や組織であると特定した。

1. 政府は教育における一番大きな利害関係者である。国連は、教育は公共のサービスであると言っている。政府は教育セクターに財政支援を提供する必要がある、年齢や性別、精神的また身体的困難、社会経済的地位や場所に関わらず、誰もが教育にアクセスできるということを確認しなければならない。
2. 保護者は子供に経済的、道徳的、そして精神的サポートを提供する。子供の学びに与える保護者の影響については、何十年も研究され文書化されてきた。加えて、ホームスクールの出現が教育における親の役割を強調している。
3. 教師は教育制度の中ではマルチプレイヤー（増加させる人）と考えられている。質の高い教師がいれば、生徒はより良く学ぶことができる。しかしながら、ほとんどのASEANの国々は教師の数と質という課題に直面している。教育の専門家とキャリアは、その低い給与から能力の高い人には魅力的には映らない。
4. 生徒／学習者は教育制度とサービスの主な顧客である。生徒／学習者とは、学齢児童と、従来とは違う年齢の学習者、両方を含む。テクノロジーの進化によって、労働者は自身の能力を最新のものにするよう強いられている。新しい労働背景、商品、そして顧客需要と足並みを揃えるためだ。結果、国連の持続可能な開発目標の重要な課題として生涯学習がうまれた。
5. 非政府組織（NGO）と民間企業は教育開発と教育の提供において大きな役割を持っている。卒業生の雇用適性に関する課題に取り組むために、民間企業はカリキュラムの作成、インターンシップの機会の提供、奨学金の供給などの役割を担う。
6. 学校／教育管理者は、教育政策や教育計画を実行に移す重要な役割を持っている。
- c. 前述の利害関係者以外にも、地方自治体、地域社会、宗教団体、国際機関などが教育開発の役割を担っている。日本と多くのASEANの国々では、地方自治体と地域社会は教育の提供者である。たくさんの国が、例えばユネスコやアジア開発銀行、世界銀行といった国際機関から援助と支援を受けている。
- d. 質の高い教育を推進するためには利害関係者間の強力な連携が不可欠である。利害関係者からの支持がなければ、質の高い教育目標を達成することは非常に困難だろう。
- e. 政府については、教育を担当する教育省だけでなく、例えば情報技術機関（オンライン教育）、専門家協会（認可とプログラム認定）、労働省（就労許可）や入国管理局（ビザの発給）など、たくさんの政府機関が教育開発においての役割を担っている。

##### 政治的、経済的、社会的発展における教育の役割

- a. 教育は、国家レベルと地域レベル、どちらの政治的、経済的、社会的発展を支える重要な役割を果たす。
- b. 政治的発展に関して、教育は、人々が持つ国のアイデンティティと地域意識を形成する助けになる。加えて、教育は社会的責任と市民的義務に対する認識を養成する。多くの学術論文は、教育達成度が高いほど犯罪率が低くなり、刑事司法制度における政府の財政負担を軽減することを示唆している。
- c. 教育は国や地域の経済発展に大きな影響を持つ。教育達成度と個人所得との関係については、これまで研究され、公表されてきた。それは政府の税収増や国の競争力の向上にも影響を及ぼす。地域レベルでは、ASEANは教育を経済発展、特に地域内の人や労働者の移動を支える重要なツールとみなしている。
- d. 教育は人々が貧困から抜け出す助けになる。同様に、それは社会の格差を減らす。また教育は、学習者の文化的寛容、環境意識、健康的なライフスタイルを育成する役割も担っている。
- e. このグループは、グループ・ディスカッションIVで、政治的、経済的、社会的発展に及ぼす教育の役割と影響について議論する。

#### グループ・ディスカッションIII

##### ねらい

- a. 日本とASEAN各国の教育制度と現在の教育政策を理解する。
- b. 各国の政策立案と実施プロセスを理解する。

##### 活動

- a. 各国の現在の教育政策に関する情報についてディスカッションと共有
- b. 特に教育の観点からの、平等と公平の概念についてのディスカッション
- c. 質の高い教育と、教育の質の概念についてのディスカッション

##### 成果

- a. 日本とASEAN各国の教育制度と教育政策
  1. 日本とASEAN各国は、幼児教育、12年間の基礎教育、高等教育からなる類似した教育制度を導入している。
  2. ミャンマーは他とは異なり、11年の基本教育制度を持っている。フィリピンは基礎教育制度を10年制度から12年制度に変更した。
  3. 日本とASEAN各国は、様々な学問や職業に関心のある学生のためのオプションとして、技術教育・職業訓練を提供し、推奨している。しかしながら技術教育・職業訓練はほとんどの国の学生や保護者に比較的あまり人気がない。
  4. 日本とASEAN各国は、アクセシビリティの促進

と教育の質の向上を含む、同様の政策優先課題を持っている。

5. アクセシビリティに関しては、無償の基礎教育と生涯学習が共通の政策課題である。執行は国によって異なる。例えば、ミャンマーは国境警察機関や宗教団体からの学校教育の提供を許可することで、遠隔地域の学生のアクセシビリティを促進している。シンガポールには高齢者向けの学校がある。
6. 教育の質を高める政策は、卒業生の雇用適性を促進することに重点を置いている。仕事を探し、そのキャリアにおいて手腕を発揮する必要な能力を学習者が身につけるための多くの取組が実施されている。専門的な知識とスキルに加えて、多くの国では、異文化理解、言語力とコミュニケーション力、チームワーク力などのソフトスキルの重要性が強調されている。
7. 日本とASEAN各国の難点の一つは、政策立案と実施プロセスにおける利害関係者の役割である。若者、学生、及び保護者が政策プロセスにはっきりとした関わりがないことについて、グループは互いに合意した。

##### b. 平等と公平

質の高い教育の主な目的は教育のアクセシビリティを平等に促進することであるが、教育を受ける余裕がある人が、教育に対してお金を払い貢献すべきだという異なる意見もある。それ故に平等と公平の概念、相違点、理論的根拠が議論されることとなる。議論の目的は、教育政策と政策立案者がどのようにして計画と行動を正当化するのかということによりよく理解することである。

##### c. 教育の質

教育の質は、持続可能な開発目標SDGs4の一つの要素である。それは、教育がどのように変容し、学習者に必要な能力を身に付けさせるかに焦点を当てている。教育の質は、学生の学習成果を評価することによって決定される。それらは知識、スキル、行動で構成されている。知識は認知能力を指し、スキルは知識を行動に応用する能力であり、行動は感情的及び精神的な発達に注意を促す。政策立案者や学者は、時にはそれを頭、手、心の発達と呼ぶこともある。更に専門的なスキルとソフトスキルの両方を重視している。

課題の一つは、教育の質の評価と学生の成績である。最も一般的な方法としては、国内外の共通試験を通じて学生の成績を測定することが挙げられる。しかし、これらの試験で学生の成績、特にソフトスキルを真に評価することは不可能である。

#### グループ・ディスカッション IV

##### ねらい

- a. 質の高い教育と、今年の他のグループ・テーマを関連付けさせられるようになること。テーマには以下の内容を含む。
1. メディアと情報技術の進歩
  2. 日・ASEAN協力とアジア・太平洋電気通信共同体 (APT)
  3. 不平等と包括性
  4. 健康問題と災害リスクの包含
  5. 教育と能力開発の関連性

#### 活動

- a. メディアと情報技術の進歩が、経済的、社会的、教育的発展に及ぼす影響についてと、人々がそれらの影響に備えるために教育がどのように役に立つかについて、DG2との共同ディスカッション。
- b. 教育とその他の持続可能な開発目標との関連について学ぶため、他のDGのファシリテーターやPYにインタビューを行う。

#### 成果

- a. メディアは教育の提供と発展に重要な役割を担っている。情報とコンテンツを普及させ、人と人をつなげるためのプラットフォームになる。政府と教育機関は、メディアプラットフォームを利用してアクセシビリティを高め、様々な学習スタイルを創り出し、教育の質を高めることができる。
- b. 教育はまた、例えばデジタルリテラシーの育成、ネットいじめやオンライン詐欺、サイバーストーキングに対する意識の高まりといった、メディアと情報技術の進歩による悪影響に備えるのにも役に立つだろう。
- c. PYは、教育は横断的な問題であると理解している。それは格差を減らし、健康的なライフスタイルを促進し、学習者の必要な能力を発達させる重要な役割を担っている。
- d. 教育は、ASEANの政治・安全、経済、社会文化的側面の目標の推進に貢献している。

#### カンボジアでの課題別視察

施設：Krousar Thmey (新しい家族)

#### 活動

2つの活動を行った。1. 学校見学、2. 手話の学習・点字の読み書き、また視覚障害を持つ学生がどのようにコンピュータを使用するか学んだり、伝統的な音楽と踊りを体験したりといった生徒との交流。

#### 視察から学んだこと

訪問は刺激的で有益であり、総合的にPYは満足していた。訪問の焦点は、障害のある生徒にどのようにしてアクセシビリティを促進し、質の高い教育を提供するかを学ぶことだったが、PYは個人、非政府組織、その他教育関係者の役割についても学ぶ機会を得た。更にPY

は、学校運営、特に資金調達、職員管理、政府との連携についても知識を得ることができた。

アクセシビリティという点では、障害を持つ学習者も学ぶことができ、教育の機会を得る必要がある。この目標を達成するために、政策立案者や学校管理者は、食事、宿泊施設、学習教材などの学習者ニーズと全体像を理解する必要がある。

課題別視察を良くするために、学生とより多くの交流を持つことができるよう、訪問時間を長くするべきであるというPYからの提案があった。加えて、訪問施設についてのオリエンテーションと簡単な紹介は、PYが訪問の目的とDGトピックとの関連を理解するのに役立つだろう。訪問の成果を踏まえPYは、「東南アジア青年の船」事業は障害を持つ若者にも参加する機会を与えるべきだと提案した。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

- a. 持続可能な開発目標SDGs4、質の高い教育と持続可能な開発のための教育を推進する上での青年の役割を特定する。

#### 活動

- a. 持続可能な開発目標SDGs4の7つねらいと質の高い教育についてのディスカッション
1. 各ねらいの優先課題を特定する。
  2. 優先課題に取り組む可能性のあるプロジェクトについてのブレインストーミング

#### 成果

- a. PYは持続可能な開発目標SDGs4とその7つのねらいについてより良く理解した。
- b. PYはプロジェクトデザインの手段や手法を応用し、持続可能な開発目標SDGs4の目標とねらいを支援する仮想プロジェクトを作り上げることができた。
- c. PYはまだ対処されていない多くの社会的課題を特定した。更に、PYは前述の課題を解決するために青年に何ができるかを考慮しながら、事後活動について考える練習を行った。

#### D. 決意・期待される今後の活動

決意と期待される今後の活動は、個人レベルとグループレベルから構成される。個人レベルでは、PYはディスカッションの成果を仲間や地域社会と共有し、社会的に取り残された集団の生活の質を向上させるボランティアとして働く予定だ。また、一部のPYはASEANと日本の協力目標を促進するための活動を計画している。グループのほとんどのPYは、「東南アジア青年の船」事業に参加する前から社会活動のボランティアをしており、彼らはその活動を継続していく意欲を表明した。社会活動に参加したことのないPYは、慈善団体や地元のコミュニ

ティでボランティアとして働き始めることを決意した。

グループとしては、ASEANの学生や若者を手紙やソーシャルメディアでつなぐというアイデアがある。更に、ASEAN各国と日本のPYと既参加青年の協力を促し、教育のアクセシビリティを推進するためのSSEAYP図書館と学校についての話し合いも持たれた。

またPYは、焦点とテーマにかかわらず、それぞれの国の事後活動に教育的側面を盛り込む意図があることを表明した。

#### E. 評価・反省 (自己評価セッション)

概して、メンバーは個別の目標に到達し、能力を育み、ディスカッション・セッションに貢献することができたことを共有した。そうは言いつつも、PYはトピックについてのより深い議論や、例えばシミュレーション、パネルディスカッション、他のDGとの交流など、様々なスタイルのディスカッションの経験を望んでいた。

PYは、後半のセッションのほうがより居心地よく他者と考えを共有したり議論したりできたと言った。なぜならお互いをよく知り、信頼し、グループとしてメンバー全員が理解できるよう助けあったからである。加えてPYは、仕事や勉強に対して更に努力すること、社会活動へより深く関わること、そして他の国についてもっと学ぶことなど、いかにディスカッション活動が彼らにやる気を与えたかについて共有した。

#### F. ファシリテーター所感

まず始めに、ディスカッション・グループ・テーマの一つとして質の高い教育を選択した内閣府に称賛を送りたい。これは時宜にかなった、重要で横断的な議題である。全てのDGメンバーの貢献と努力を讃えたいと思う。

この部分では、全体的なプログラムとディスカッション活動へのPY参加という2つの話題に焦点を当てたい。プログラム全体としては、とても良く計画され、組織されていた。DGのテーマは興味深く、お互いに関連していた。しかしながら、プログラムとしては異なるDG間のつながりは重視されていなかった。

事業の最初の部分でディスカッション・セッションを行うことは非常に良い考えである。ディスカッションの効率を高めるためには、ディスカッション・セッション

は常に、PYのエネルギーレベルが高い午前中に行われるべきである。各DGのPY割り振りは、PYの意図に対応して見直されるべきである。DG5への興味を示しながらも、各DGに割り当てられている人数制限のためにDG5に入れなかったPYが多くいた。この課題に対処するために、内閣府は各DGに入るPYの人数の上限を増やしたり、ファシリテーターに共同のディスカッションを企画するよう促したりしても良いだろう。

日本とカンボジアの課題別視察は興味深く、ディスカッションの目的に役に立つものだった。しかし、タイでの課題別視察はどのディスカッション・グループ・テーマにも直接関係のないものであったし、同様に、マレーシアの課題別視察は訪問というよりも観光に近かった。課題別視察をより意味のあるものにするため、内閣府と訪問国の受入実行委員会は、訪問の目的とディスカッション・テーマとの関連性を考慮すると良いだろう。加えて、地元青年との交流によって、PYはその国の文化、生活様式、及び人々についてより多くのことを体験し、学ぶことができる。

通常、PYは学歴や専門的経験、言語能力にかかわらず、ディスカッション・セッションや課題別視察に積極的に参加する。私は、アイデアや経験を共有したり、建設的なコメントを提供したり、グループメンバーとファシリテーターをサポートしようとするPYの意欲に感銘を受けた。DGのプレゼンテーションは2つの点で壮観であった。まず、メンバーは明確かつ直接的にメッセージを送り、ディスカッションの成果を他のPYやNL、管理部に発信した。2つ目に、全てのメンバーがプレゼンテーションに参加したということだ。彼らは、プレゼンテーションを作成し、進展させ、お互いの努力をつぎ込んだ。私は、それ以上はないほどに彼らを誇りに思った。

頭・手・心のモデルを利用して私のコメントを終わらせたいと思う。私は、全てのPYが社会活動、特に教育分野における青年の役割を知っている(頭)と確信している。彼らはまた、社会的発展のためにどのように行動を起こすか、どのように他者と協力するか(手)も知っている。更に、彼らは喜んで社会に貢献し他人の助けになるだろう(心)。そのことを念頭に置いて、私はDG5のディスカッションは成功したと断言する。



DG5「質の高い教育」グループ(11月6日)



DG5「質の高い教育」グループ(11月9日)

## (6) 不平等の是正グループ

ファシリテーター: Mr. Haji Mohamad Paizzal Bin Haji Piluk

PY: 35名

### A. グループ・テーマ・インフォメーション

#### a. テーマの詳細

PYは、日本やASEAN各国で国内及び国家間に存在する収入や性別等に基づく不平等について理解する。その上で、国内及び国家間の不平等を是正することに青年がどのように貢献できるかについて議論する。

#### b. 期待される成果

- PYは、不平等の是正に関する視点や知識を拡大すること、また可能な方法でコミュニティに還元するという自身の役割について理解を深めることが期待される。
- PYは、恵まれない人々、特に不平等の犠牲になっている人々に対してより敏感になることが期待される。

#### c. 身につく能力

##### 知識

- PYは、不平等に関連して起きている現状を理解し、不平等がなぜ、どのようにして起きたのかについて理解を深める。
- PYは、不平等に関連した問題の解決策を見出し提案することができるようになる。

##### スキル

- PYは、全ての議論と活動に積極的に参加する。
- PYは、自信を持って意見を発表し、考えを表現する。
- PYは、個々に若しくはグループで実施できる活動やプロジェクトを立案する。

##### 行動

- PYは、ボランティア精神を備え、ボランティア活動に積極的に参加する。

### B. 事前課題

#### 個人課題1

障害とともに生きる人たち（PWD）を支援している、若しくは関連するプロジェクトを実施しているNGOやボランティアグループを一つ選びリサーチする。

#### 個人課題2

収入、性別、身体能力の観点から自身のコミュニティにおける不平等についての知識をグーグルフォームに記載する。

#### 個別課題3

障害とともに生きる人たち（PWD）、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー

（LGBT）、女性、高齢者、子供に対する不平等を是正するために青年がどのように貢献できるかについて案を紹介する。

#### 国別課題1

不平等の是正に関する課題について、国内の状況に関するプレゼンテーションを準備する。

#### 国別課題2

社会的に脆弱性の高いPWD、LGBT、女性、高齢者、子供のいずれかに属する人の人生を紹介する5～6分のドキュメンタリー映像を制作する。

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

##### 施設：

#### 特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

- 豊島子どもWAKUWAKUネットワークは、地域の子供を地域で見守り育てることを目標として2012年に設立された。WAKUWAKUネットワークは、子供たちが安心して居ることができる多様な場所で、頼ることのできる大人や青年と出会うことで、人生が変わる可能性があると感じている。

#### 特定非営利活動法人キッズドア

- 日本における子供を取り巻く環境は急激に悪化している。幼い頃からの生活環境が理由で夢や希望を持つことがかなわない子供が存在する社会は成熟しているとはいえない。キッズドアは日本の子供を支援しながら、全ての子供が将来への夢や希望を持てる社会の実現を目指している。

##### 活動

#### 特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

組織に関すること及び非営利団体としてのゴールや目標を達成するためのプログラムや活動に関して、設立者である栗林知絵子代表の講義を聞いた。

講義後、PYは7グループに分かれ、WAKUWAKUネットワークのメンバーやスタッフと直接交流した。

最後に、栗林氏の案内で、子供たちのための社会活動の場であるコミュニティパークの見学をした。

#### 特定非営利活動法人キッズドア

日本における子供の貧困に関する現状について、キッズドア渡辺由美子理事長の講義を聞いた。子供たちが貧困の悪循環から抜け出すための支援として、子供たちに

勉強する機会を提供する手法について強調された。

#### 視察から学んだこと

- PYは以下の知識を得た。
  - a. 子供の発達への地域の関わり的重要性。
  - b. 貧困状態にある子供を支援する必要性について意識向上を推進することの妥当性。
  - c. ボランティアの本質と社会問題の解決に向けて行動を起こす際の協働。

#### グループ・ディスカッション I

##### ねらい

- a. ディスカッション活動の目標、期待、ルールを定め、共有する。
- b. 不平等の是正に関する基本的概念を理解する。
- c. 健康、収入、性別の不平等の関係を理解する。
- d. 各国の現状を理解する。
- e. 日本とASEANコミュニティにおける不平等の是正の重要性を理解する。

##### 活動

- a. PYは、ディスカッション活動での個人的な目標と期待を設定し、小グループで共有した。
- b. 各小グループの代表者は、小グループでの議論に基づき、PYがDGにおいて守らねばならないグランドルールを共有した。
- c. ファシリテーターは、不平等に関する基礎的な講義をした。本DGの主要テーマに基づくサブテーマ、すなわち収入、健康、性別に関する不平等を強調した。
- d. 各国は国別課題1を発表した。
- e. 国別課題1で発表された不平等の共通課題についてグループで議論した。

##### 成果

- a. PYは、有意義なディスカッション活動にするためのガイドとなる個人の目標と期待を設定することができた。
- b. PYは、文化、宗教、背景の違いにかかわらず、このDGのPY全員が解決しなければならない不平等に関する共通課題を持っていること、また各国の不平等是正のために貢献する気持ちを持っていることを認識した。
- c. PYは、ASEANと日本で共通して起きている3つの不平等は、性別、収入、障害に関する問題であると結論づけた。
- d. PY全員が、不平等はすぐに対応せねばならない緊急課題であり、社会全体への弊害が最低限に留まるようにせねばならないことを合意した。

#### グループ・ディスカッション II

##### ねらい

- a. 日本での課題別視察についてPYの経験を振り返り理

解する。

- b. 様々な視点で脆弱性の高い人々について理解を深める。
- c. 各国の政府や非政府団体による様々な活動を共有して学ぶ。
- d. 利害関係者や改善方法を特定する。

##### 活動

- a. PYそれぞれが紙に質問を書き、他のPYらが回答をした。
- b. PYは、PWD、LGBT、女性、高齢者、子供のいずれかに属する人の人生を紹介する国別課題2を発表した。
- c. PYは目隠しをし、視覚障害のある人が経験する困難さを体験するゲームを行った。

##### 成果

- a. PYは、障害（異なった能力）とともに生きる人々の状況についてより深く理解することができた。
- b. PYは、障害（異なった能力）とともに生きる人々の権利を推進し支援するために貢献できる様々な方法を学んだ。

#### グループ・ディスカッション III

##### ねらい

- a. コミュニティにおける異なるジェンダー（性自認）やセクシュアル・オリエンテーション（性的指向）の役割を認識する。
- b. 子供の不平等の影響を理解、分析する。
- c. PY同士の社会的交流を促進する。

##### 活動

- a. グループ・ディスカッションIIの活動を振り返るため、PYはアルファベットの一文字を与えられ、グループ・ディスカッションIIを包括的に表現する、その一文字から始まる単語を考えるよう問われた。
- b. PYは、性自認と性的指向、そして教育と貧困に関する不平等についてのビデオを鑑賞した。ビデオについての反応を小グループで共有し、性自認、性的指向、貧困に基づく不平等のためにできることについて議論した。

##### 成果

- a. PYは、社会における脆弱性の高いグループ、すなわち高齢者、貧困にある子供、LGBTを支援する必要性を認識した。ASEAN各国や日本では、社会でこれらの人々に提供されている支援や保護はまだ不十分であることを確認した。
- b. PYは、誰も身体的な見た目で人を判断してはならないことを認識した。人を見た目で判断することは、社会に憎悪の文化と個人間の不平等を強化するだけである。
- c. PYは、LGBTの人たちにおける不平等を是正する

ためには、コミュニティの、特に本人の家族や友人の、許容と受容が必要であることに賛同した。

- d. PYは、貧困が単に貧困線以下で生活している個人に影響するのみならず、経済の波及効果に起因して社会全体に影響することを認識した。関連し、PYは、教育は全ての人の権利であるにもかかわらず、貧困が原因で全ての人が上質な教育を得られているわけではないことを学んだ。

#### グループ・ディスカッション IV

##### ねらい

- a. 異なるDGのPYから聞き取り、分析や振り返りをする。  
b. 障害とともに生きる人々についての基本事項について理解し、日常生活を知る。  
c. ボランティア活動により積極的になるようPYを動機付け、コミュニティプロジェクトを開始するための案を得る。  
d. 収入の均等の重要性和国の経済への影響を理解する。

##### 活動

- a. PYは、他のDGのPYに、不平等の是正への青年の参加、LGBTに対するコミュニティの意見、コミュニティにPWDがどのように受け入れられているかについてインタビューをするという課題の結果を共有した。  
b. ファシリテーターが、障害（異なった能力）の種類について講義し、PWDに関するビデオを鑑賞した。  
c. PYは、PWD支援のアドボカシーをするNGOの参考事例について個人課題1を共有した。  
d. PYは、PWDの就労に関する困難さを議論した。

##### 成果

- a. PYは、PWDを表す新しい単語として、特別支援が必要な人々（People with special needs）、ハンディキャップ、更なる支援が必要な人々（People with additional needs）、天賦の才能のある人々（Gifted people）、などを学んだ。これらのうち、最も好ましいのは、異なった能力とともに生きる人々（People with different abilities）である。  
b. PYは、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由、知的障害・学習障害、自閉症、ダウン症、重複障害など、障害の種類を学んだ。  
c. PYは、PWD支援に関して各国で活動するNGOの成功事例を学び、自国の例についても発表した。  
d. PYは、PWDにとって就労に関する主要な課題は差別であること、また労働虐待や低賃金の問題もあることを学んだ。PYは、これらの問題を解決するために、アドボカシー、ボランティア活動、支援の提供、国の経済への影響を認識するなど、青年に実践できる行動を提案した。

#### カンボジアでの課題別視察

##### 施設：国連開発計画

国連開発計画は国際機関で、カンボジアでは1958年から貧困の根絶と不平等や排除の軽減を目指して運営されている。国連開発計画は、国家政策と計画が、2016～2018年国家計画文書に特定された4つの優先課題を通して実現されるため支援している。

##### 活動

国連開発計画ディレクター、Mr. Nick Beresfordから、貧困、不平等、性別の問題についての現状及び貧困、格差、性別の問題根絶に対する国連機関の働きに関する講義を受けた。講義後は、PYと国連開発計画職員が3テーマに沿ってグループに分かれ、ASEAN各国での不平等の軽減における青年の貢献について、特に基本的ニーズ、性別に関する不平等、PWDについて議論した。PYはグループ毎に結果を発表し、質疑応答を行った。最後に、Mr. Beresfordが視察終了に当たり締めくくりの言葉を述べた。

##### 視察から学んだこと

- a. PYは、ASEAN各国の不平等の課題に関して、またこれらの課題を軽減するための自身の役割について、より視野を広げた。  
b. PYは、行動と政策の両方から課題へ取り組む方法を学んだ。  
c. PYは、意識向上やコミュニケーション推進のためにソーシャルメディアが重要な役割を果たすことを認識した。  
d. PYは、脆弱性の高い人々にスキルトレーニングや就労の機会を提供することは、不平等の是正につながるアプローチであることを理解した。

#### グループ・ディスカッション V

##### ねらい

- a. コミュニティにおける青年の役割を理解する。  
b. 不平等に関する意識向上のための案と行動計画を作成し、ディスカッションのテーマに沿った持続可能な事後活動を企画する。

##### 活動

PYは、国ごとに実施することができる事後活動を検討した。全体で共有し、ファシリテーターや他のPYから疑問点、コメントや提案を受けた。

##### 成果

PYは、事業終了後にDG6としての事後活動になり得る様々な構想を出し合った。これら11のプロジェクトは、PWD、LGBTQI、貧困の子供、女性、高齢者など社会的に脆弱性が高い人々を対象としている。

#### D. 決意・期待される評価

これまでの議論やワークショップの結果、以下の事後

活動が将来の行動計画として提案された。

##### a. カンボジア- Cool Kids Read

教育的な読み物を提供すること、単語のスプリングや読み方を教えること、読み聞かせを実施することにより、子供たちがもっと読みたいと思えるようにする企画。

##### b. マレーシア- Muhibbah Food Project

温かい食事を食べられない大学生のために、学生間で寄付を募るキャンペーンの企画。

##### c. インドネシア- I am able Project

前年のインドネシアPYとの協働で、より多くの人々が聴覚障害のある人とコミュニケーションを取り交流できるようにするために手話を推進するキャンペーンの拡大を継続。

##### d. タイ- Chance Maker

非政府機関や政府機関、既参加青年と協働し、児童養護施設など貧困にある子供たちを支援する既存のプログラムを支えるボランティア活動を実施。

##### e. ベトナム- English Summer Camp

海外からのボランティアの協力を得て、国際的な世代を育成するために英語サマーキャンプを実施。参加青年の対人スキル、リーダーシップスキル、口語コミュニケーションスキルなどの向上も図る。

##### f. 日本 - Knowing Reality Through SMS

日本PYの公式ソーシャルメディアアカウントを利用するとともに、ディスカッションを企画することにより、日本における子供の貧困状況についての意識向上を図るイニシアチブ。

##### g. ラオス

子供たち、特に地方の子供たちが、正規の教育を受ける権利を促進するプロジェクト。NGOや教育省と協働することで、受益者がよりよい教育を受けられるようにする。

##### h. ミャンマー - Pyaung Lal Chin (Change in Myanmar)

ミャンマーの大学における不平等の是正についての意識向上を図るプログラム。NGO、青年クラブ、団体と協働し、国内の格差の問題を啓発するためのワークショップやセミナーを開催する。

##### i. シンガポール - PWD Toolkit

PWDの権利や障害の種類に即した適切な対応について情報提供するためのPWD啓発ツールキットを開発。この情報資材は、PWDを差別したり、いじめたりするのではなく、どう尊重して対応するかを親から子へ教えやすくするためのものである。

##### j. ブルネイ - Different Ability Day

コミュニティの脚光を浴びる日を作り、障害とともに生きる人々を力づけることを目指すプロジェクト。この日、PWDのためのスキルトレーニング、PWDへの適切な対応、障害（異なった能力）を持つ人々の権利と特権についての情報の普及など、様々な活動が実施される。

##### k. フィリピン - Project Liberty

コミュニティのLGBTの人々に関する理解を深めるため、またLGBTの人々がコミュニティに積極的に関与できるように力づけるために、特別な日を企画。医療、歯科、法的サービスなどの基本的サービスが提供されるとともに、スポーツイベントなどの交流活動も開催される。

#### E. 評価・反省（自己評価セッション）

PYは、初回のセッションでディスカッション活動を通して達成したいことを書いた紙を受け取り、得たこと及び達成できなかったことを振り返った。全員で共有し、目標や期待していたことを達成できたことを確認した。また、個々のボランティア活動や事後活動など、このプログラム終了後に達成すべき新たな目標ができたことも語られた。

PYは、小グループで達成したことを話し合い、評価をした。また、個々や国ごとの事後活動として行うことを共有した。

- PYは、貧困は開発途上国だけの問題ではなく先進国でも起きていること、自国の課題であることを受け止めるのは困難であることを認識した。
- PYは、ディスカッション・セッションを経て、コミュニティの一部としてLGBTQIを受入れることについて偏見がなくなり、彼らに市民として平等な機会と権利を与えなければならないと語った。
- PYは、PWDの課題は、常に彼らが取り残され他のコミュニティと同様の扱いを受けていないため、取組が必要な主要課題であると認識した。
- PYは、地方の子供たち、特に貧困状況にあるために勉強する機会のない子供たちに知識の共有をするために、より積極的にボランティア活動をしたいと語った。
- PYは、不平等の是正に向けて意識を高め、行動を起こすことができるように、本国若しくは海外で行政機関、NGO、NPO、他の利害関係者とコーディネート、ネットワーク、コネクションを構築し、コミュニティに還元することを決意した。

#### F. ファシリテーター所感

まず初めに、日本政府内閣府、BERSATU (SSEAYP インターナショナル・ブルネイ) に対し、第44回「東南アジア青年の船」事業DG6ファシリテーターとして参加する機会をいただいたことに感謝の念を表したい。長い間、ブルネイからのファシリテーターが選出されていなかったこともあり、これは非常に光栄なことであり、ブルネイのSSEAYP事後活動組織メンバー全員と共有する達成と考える。また、ブルネイ文化青年スポーツ省に本事業への参加を認めていただいたことに感謝したい。

全てのディスカッション・セッションは、極めて安全で、楽しく、充実した環境において実施され、中にはセ

ンシティブで大きなトピックが含まれたにもかかわらず、最後まで達成できたといえる。言語の壁、取り扱いの難しさ、宗教にかかわらず、私の期待以上にPY全員が共有し合い、案を出し、全ての議論に参加することができた。

全ての国別課題の発表は、よく準備されており、ディスカッションの目標と目的に沿っていた。発表内容に基づき活発なディスカッションも行われた。「不平等」は非常に切実な問題であり、政府機関はもとよりNGO、NPOや個人を含む全ての人たちで取り組む必要があることを、PYのみならず私にも気づかせてくれる内容であった。

ほとんどのPYは不平等について議論した経験がないにもかかわらず、全てのディスカッション・セッションに対するエネルギー、情熱、興味に感銘を受けた。全員がディスカッションに積極的に参加し、興味を示した。

DG6のメンバーの企画による船内での自主活動を実施し、「異なった能力とともに生きる人々」に関して意識を高めるミニ展示を行い、各国における成功事例やプロジェクトを共有した。イベントは成功し、管理部員、NL、ファシリテーター、PYが多く訪れてくれた。PYから、PWDに関する意識向上に限らず、他のグループ(LGBTQIや子供など)に関する展示も実施することができたら良いと意見があがった。

リーダーシップを発揮でき、グループに責任を持って関与し、極めてクリエイティブで意欲のある素晴らしいPYや運営委員に恵まれた。ディスカッション活動運営委員会もまた、よく組織され効率的であった。運営委員

には、明確な目標と目的、資料を私から提供するのみで、セッションを達成へと導いてくれた。

PYに多くの可能性を見出すことができた。将来のファシリテーターとしてのみならず、それぞれの国において社会を変える人として。PYは、学んだ結果をそれぞれのコミュニティに共有し、特にボランティア活動という行動を通して各自のコミュニティに還元できるだろう。

管理部員の皆さん、特にディスカッション活動のスムーズな運営に貢献してくれた皆さん、NL、にっぽん丸乗組員、そしてファシリテーター仲間であるKoshu、P'Wai、Kat、Richa、P'Cho、Kak Evan、Abang Andyに、プログラムを通して築いた友情とチームワークに感謝したい。また、懸命な働きにより、導入プログラム及び成果発表会のセッションを献身的にオーガナイズし成功に導いてくれたディスカッション活動運営委員会のメンバー全員にも感謝したい。

最後に、DG6メンバー全員に、いつも私を支え、愛情深く、かわいらしくいてくれたこと、私達のDGをこれまでで最高のDGにしてくれたこと、そしてディスカッション活動中に誰も居眠りせず私に誇りを持たせてくれたことに対して、愛情と感謝の気持ちを表したい。

「青年は未来のリーダーへの投資であり、それを現実にする責任は私たちにかかっている。人生を良きものにするためにもっと貢献し、共に世界をより良くしよう。」—Peaz Piluk

事後活動を応援するとともに、これからみんなが試みること全てへの成功を祈る。みんながSSEAYP2017を思い出深いものにしてくれた。みんなが大好きだ。



DG6「不平等の是正」グループ (11月14日)



DG6「不平等の是正」グループ (11月15日)

## (7) レジリエントで持続可能な都市づくりグループ

ファシリテーター: Mr. Evan Ferdian

PY: 36名

### A. グループ・テーマ・インフォメーション

#### a. テーマの詳細

ASEAN各国と日本における交通インフラ、公共空間を含んだ住環境、災害に見られる現状と課題を理解する。その上で、レジリエントで持続可能な都市づくりに青年がどう貢献できるか議論する。

#### b. 期待される評価

- レジリエントで持続可能な都市づくりと、またそのためのASEANと日本の取組に関する現状と課題について、知識を得て意識を高める。
- 事後活動の一環として各自のコミュニティにおいてレジリエントで持続可能な都市づくりに貢献できるほど触発を受ける。

#### c. 身につく能力

##### 知識

- 以下について理解を深める。
- レジリエントで持続可能な都市づくりに関する語彙や概念
- レジリエントで持続可能な都市づくりのためのASEANと日本での取り組み

##### スキル

- レジリエントで持続可能な都市づくりについての実現可能なプロジェクトを組み立てられる

##### 行動

- レジリエントで持続可能な都市づくりの重要性をより一層認識する

### B. 事前課題

#### 個人課題1

自分の背景と、レジリエントで持続可能な都市づくりについての理解度に関する質問票に回答する。

#### 個人課題2

レジリエントで持続可能な都市づくりに関する概念や語彙についての表を埋める。この課題はグループ・ディスカッションIIにて使用される。

#### 国別課題1

「ASEANと日本の都市部について」という主題で以下の概要に沿ったパワーポイントによるプレゼンテーションを用意すること。

- 国名及びPYの氏名
- 地図と人口を含んだ国の概要
- 災害や危険性
- 交通インフラや公共空間を含めた住環境など、社

会、経済、環境面での現状と課題

- 直近の災害について。場所、原因、交通インフラや住環境を含めた社会、経済、環境面への影響、そして被害者や米ドルでの損害額についての情報を盛り込むこと。
- 当該災害に対してどのような対応がなされたか

#### 国別課題2

各国は以下の概念に関する質問に回答し、レジリエントで持続可能な都市づくりについての自国の政策を調べること。

- 都市の脆弱性
- 不確実性を重視した都市計画
- 都市管理
- 防災

#### 国別課題3

自国でのレジリエントで持続可能な都市づくりに関する最善慣行のレポートを探し、以下を盛り込んだプレゼンテーションを行うこと。

- 実施概要
- なぜ最善慣行と呼べるか

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

施設: 三井不動産株式会社

#### 活動

始めに、PYは三井不動産株式会社を訪問し、北原義一副社長による歓迎や日本橋再生計画についての講義を受け、日本橋を散策した。

次に、わたくし日本橋という、三井不動産によるプロジェクトを訪れた。ここでは東日本大震災復興支援の説明や、このレストランがいかに被災地や被災者を支援しているかについての講義を受けた。

最後に、東京都から千葉県へ移動し、柏の葉スマートシティを訪れ、ここの運営及び持続可能な居住及び商業地域を創り上げるために採用されたエネルギー管理システムについて講義を受けた。また、健康長寿都市や柏の葉オープンイノベーションラボ、エネルギー棟など包括的な街づくりや取組を視察するために建物周辺を散策した。

#### 視察から学んだこと

- 視察からは以下のように様々な貴重な知識と考察を得た。
- 三井不動産がいかに大型建築と災害管理方法を結び付け、また住みよい環境づくりの新旧の融合を図っ

- たか。
- 企業の社会的責任活動をいかに実施するか、また、社会的企業として意義あるプロジェクトにより社会への影響をどう創出するか。
- スマートシティでは居住や商用その他のためにどのように新しい技術が使われているか。

グループ・ディスカッションI

ねらい

- ディスカッション・グループとしての目標、期待することや規則を作る
- 課題別視察の振り返り
- レジリエントで持続可能な都市づくりについての語彙や概念について理解する。

活動

- ファシリテーターによる自己紹介と既参加青年としての経験の紹介
- ディスカッションにおける基本ルール作り
- FangとYuriという2名のPYが日本での課題別視察を総括し、その後3つのグループに分かれて日本橋エリアでの視察で得たことにつき話し合った。各グループは他のグループに対してその共有を行わなければならなかった。
- 同じグループ分けのまま、レジリエントで持続可能な都市づくりについての基本的語彙の定義のために話し合った。それらには以下の語彙を含む。

減災	再利用	災害
社会的持続可能性	参加の階段	危険性
経済的持続可能性	コミュニティ形成	持続可能な開発目標
環境的持続可能性	気候変動	都市の脆弱性
都市開発	市民意識	持続可能性
エコロジカルフットプリント	インフォーマリティ	レジリエント
代替エネルギー	防災	アダプテーション

そして各グループの代表者が他のグループに向けて議論の結果を発表した。

成果

- DG7の全員が以下のルールに同意した。

推奨事項	禁止事項
客観的かつ建設的である	居眠り
集中する	私語
積極的に議論に加わる	遅刻
55分ごとに5分休憩	質問を遠慮する

推奨事項	禁止事項
参考資料の共有	感情的になる
偏見なく受容的であること	
菓子の共有	
笑顔でいること	

- PYは概して日本での課題別視察は実りあると感じ、レジリエントで持続可能な都市づくりのために払われていた努力に感銘を受けた。
- PYはレジリエントで持続可能な都市づくりについての語彙や概念に対して理解を深めた。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- ASEAN及び日本の都市部における災害と危険性につき認識する。
- 持続可能性の要点を理解する。

活動

自国における災害や危険性、災害の範囲や深刻度合、また交通やインフラ及び公共空間を含めた住環境に関する現状と課題について、各国とも国別課題1の発表を行った。また、国同士の類似点と相違点についても議論し、国の計画と発展の特性について理解を深めた。以下は各国ごとの要点である。

1. ブルネイ

国内にはびこるような重大災害は存在しない。効率の良い公共交通システムはあるが、旅行者を念頭に改良を加えているところだ。現在の課題は、水や電気、インターネット接続といった基本サービスを遠隔地にもたらずことである。

2. カンボジア

直近の災害は水源不足をもたらした干ばつである。干ばつによる問題への効果的な対応のために政府や海外から支援が行われた。

3. インドネシア

約70の活火山を擁する環太平洋火山帯に位置している。バンドンにある一連の断層はマグニチュード7.2の地震をもたらすと目されており、現在その被害を抑えるための減災・防災の手立てが行われている。

4. 日本

頻繁に台風や津波、大地震に見舞われるが、インフラや都市づくりには先進的な防災や減災の措置が講じられている。喫緊の課題は、一極集中化及び都市への人口流出である。

5. ラオス

内陸国であり、直近の災害は2016年に2,500万米ドルの被害をもたらした。

6. マレーシア

喫緊の課題には渋滞のほかに公共交通機関のムラのある効率性が挙げられ、目下政府が取り組んでおり、大量輸送機関について提案されている。

7. ミャンマー

今日的課題は、大規模な都市化による環境への影響である。直近の災害は、160万人が避難を余儀なくされた季節性の洪水である。

8. フィリピン

台風が発生する場所であり環太平洋火山帯に位置し22の活火山を擁する。直近の災害は計250億円にのぼる損害を一地方にもたらした。

9. シンガポール

国の課題は陸地がきわめて限定的であることだが、それがより効率的で便利な都市計画に繋がった。また、都市計画と土地利用に関するより包括的な政策が施行されている。最新の研究によれば、世界第二位の持続可能な都市である。

10. タイ

陸地の内、農地が少なくとも41.2%を占めている。郊外に居住する540万人が貧困層という経済格差が課題である。

11. ベトナム

台風の被害を受けやすい国である。直近2017年9月2日の災害は2億5千万米ドルの被害をもたらした。

成果

活動を通じて、PYはASEAN各国と日本のそれぞれの特性を認識することができた。災害と危険性を念頭に置いた都市づくりには各国に特有の事情が存在するというようにPYの認識が新たになった。都市計画や都市づくりというものは単に美的感覚の問題ではなく、いかに人々の生活をより便利、効率的、そして何より災害から安全にするかに力点が置かれる。

各国の発表によりPYは直近の災害や減災のための努力について学ぶことができた。ここで得られた知識により、更にレジリエントな社会をつくるための官民協力がいかになされるか、理解を深めることとなった。災害耐性を考えるにあたり、参加と連携が大切であることが浮き彫りとなり、結果的には一人ひとりにとって自分事であることがあらわになった。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- ASEAN及び日本の都市部における災害と危険性について認識する。
- レジリエントな都市への投資の重要性を理解する。

活動

- 災害、交通インフラ、公共空間を含めた住環境、レジリエンシー、持続可能性の間の繋がりにつき議論

し、その後類似点や相違点の各国比較を行った。

- 若い世代の郊外から都市への移住現象について、利益や不利益を含めて議論した。
- 都市部においてレジリエンシー及び持続可能性をもたらせるためにはどのような手法が必要かPYが意見を述べた。
- 「今、レジリエントな都市に投資すべきである」と「今動くことで未来を守る」という2つのビデオを視聴し、以下について議論した。

- なぜ都市は気候変動と自然災害に対して脆弱なのか。
- 都市にとっての不確実要素はどのような影響をおよぼすか。
- 減災のためにどのような方法があるか。
- なぜレジリエントな都市に投資することが重要か。

- 現在の若い世代の郊外から都市への移住現象について。

成果

- 以下が各国ごとの災害を類型化した表である。

	マレーシア	タイ	カンボジア	ミャンマー	ブルネイ	シンガポール	日本	ベトナム	ラオス	インドネシア	フィリピン
自然災害											
洪水	✓	✓	✓	✓			✓	✓	✓		
地滑り	✓			✓	✓		✓	✓	✓		✓
鉄砲水	✓				✓	✓			✓		
地震	✓	✓		✓						✓	✓
干ばつ	✓	✓	✓					✓	✓	✓	✓
津波							✓			✓	✓
火山の噴火							✓			✓	✓
台風				✓				✓		✓	✓
人為的災害		✓			✓	✓	✓	✓			

- 概して、ASEANと日本の直面する危険性は以下のとおりである。

- 日常生活への支障、不十分な電気、水、食料の供給に繋がる、土地や建物、インフラや農業への損害。
- 個人資産の損失
- 気候変動
- 自然災害による連鎖反応（火山噴火>地震>津波や地滑り）

- 以下にまとめられたとおり、いくつかの国々におけるインフラと住環境の状況について議論された。

国名	インフラと住環境 (公共空間)
マレーシア	交通: 河川における交通網、地下鉄 住居: アパート、マンション、長屋 道路: 渋滞 公共空間: 公園 就労機会: 増加基調 都市部や首都における生活費用は高い
タイ	インフラ: 郊外では不十分 都市部や首都における生活費用は高い
ブルネイ	公共空間: 豊富なカフェや公園 道路: 渋滞はない 交通: 主に自動車
シンガポール	交通: 自動車、地下鉄、バス 住居: アパート、マンション、長屋 道路: ピーク時のみ渋滞 公共空間: 公園、カフェ、コミュニティセンター 生活費用は高い

- d. PYはレジリエンシー及び持続可能性をもたらせるための手法を次のとおり議論し、まとめた。
- 渋滞を緩和するためにより効率的な公共交通網を提供する、又は、シェア自転車と自転車用のスペースを増やすことで二酸化炭素の排出を抑える。
  - 料金を減らすことで公共交通機関の利用を促す。
  - レジリエントで持続可能な都市づくりの利点を啓蒙する。
  - 自然保護
  - 災害が予想された時点で警報するための先進技術の活用
  - 代替可能エネルギーの採用
  - 都市の分極化
  - 貯水池の建造
  - 都市開発による森林伐採を受けた植林
  - 下水道システムと水処理プラントの改善
  - 運営管理体制の改善 (トップダウン及びボトムアップの両面)
- e. 郊外から都市への若い世代の移住に関する利益と不利益についても議論し、次のとおりまとめた。

利益	不利益
都市部における労働力の増加	郊外における労働力の低下 (農業への影響)
経済の可能性が増大	開発による不平等の発生
個人的な利益として、若者個人がより幅広い職業選択を行うことができ、またより上等の施設を使用することで上質な生活様式が可能となる。	一極集中化 人口過密

利益	不利益
	首都での生活費用の増加
	精神衛生の問題 (ストレスやホームシック)

- f. ビデオについての議論結果
- 天然資源の搾取や粗末なインフラづくり、準備不足により都市は脆弱性を帯びる。
  - 被災都市は金と人命を失う。
  - 自然災害により最も被害を受けるのは貧困層、家畜、子供やお年寄りである。
  - こうした被害を減らすには早期の警報や地滑り防止の壁、堤防、耐震建築物など予防や警戒措置に投資することである。
  - 人命や金の損失を減らすため、また土地や空間を守るためにレジリエントな都市に投資する必要がある。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

- レジリエントで持続可能な都市づくりにはどのような利害関係者が含まれるか理解する。
- ASEAN及び日本におけるレジリエントで持続可能な都市づくりの重要性を理解する。
- レジリエンシーや持続可能性のための国際的な枠組みを理解する。
- 職務上の経験を共有
  - 修復よりも予防の方が善い。つまり、事後の対応よりも事前の措置に投資するべきである。
  - 様々な支援を尚も必要とするかの、被災後ニーズ検証

##### 活動

- 持続可能な都市及び持続可能な開発目標 (SDGs) について2つのビデオを視聴した。その後、PYは6グループに分かれファシリテーターからの質問に対する回答を議論した。2つのグループが自発的にその回答を発表した。
- 次に、兵庫行動枠組及び仙台防災枠組の説明ビデオを視聴し、それらの類似点と相違点につきグループ・ディスカッションを行った。2つのグループが自発的に自分たちの議論について発表した。
- フィリピンPYのRachelle Mirandaが自国での災害管理に関する知識を共有した。
- 最後に、デッキで集合写真を撮影した。

##### 成果

- 持続可能な都市開発に関する冒頭の2本のビデオでは、主に都市づくりの関係者である官民セクター及び地元コミュニティについて学んだ。

- 2本目のビデオからは、災害からの復興のために持続可能性が重要であること、また、持続可能な開発目標達成のためには国際的な協調と取り組みが重要であることを学んだ。
- 兵庫行動枠組及び仙台防災枠組のビデオでは、両者の主な違いは兵庫行動枠組が災害規模の減少に主眼があるのに比べ、仙台防災枠組は損失を抑える対応や回復 (防災措置) に焦点が置かれていることを学んだ。
- Rachelle Mirandaによる共有では、フィリピンでの災害管理とその歴史について学んだ。主な教訓は、「修復よりも予防の方が善い」である。つまり、災害が起きてはじめて行動することに比べて防災の措置に投資することがよほど国益にかなうということだ。

#### カンボジアでの課題別視察

##### 視察: 環境省

##### 活動

カンボジア・プノンペンでは、課題別視察先として環境省を訪れた。ここではH.E Eang Sophalleth環境省次官によるスピーチの後、質疑応答が行われた。そして最後の集合写真撮影までの間、PYは庁舎内を巡る短いツアーの機会をいただいた。

##### 視察から学んだこと

- 環境省次官からは環境面での持続可能性を促進する上で、個人、国家、国際総体的な3つのレベルの責任が存在することを共有いただいた。
- 二酸化炭素排出権取引に関して環境省とディズニールランドと三井が協力する基金は地域の環境保護活動支援に用いられるとのことだった。
- 省の優先事項として、生物多様性回廊、持続可能な開発のための協議会や環境基準の創設など環境にやさしい取り組みが挙げられた。
- 「環境保護をファッションにも」というビジョンの下、靴やTシャツなど環境にやさしい製造を地元企業と協力して行っているとのことだった。
- 環境を保つために、森林の保全がエコツーリズムを通じて巨額のお金を生み出すと、省が地域住民に啓蒙していることを学んだ。
- 省が人々に環境的持続可能性を呼び掛けていることを学んだ。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

- カンボジアでの課題別視察を振り返る
- これまでのセッションで何を学んだかを振り返る
- ASEANと日本におけるレジリエントで持続可能な都市づくりについて実現可能かつ効果的な施策を見つける

##### 活動

- レジリエンスと持続可能性に関する語彙と定義の組み合わせにつき、〇×クイズを行った。
- カンボジアの課題別視察で何を学んだか3つのグループに分かれて議論した。
- 持続可能性というテーマにつき各国から最善慣行が発表された。
  - カンボジア「埋立ではなく再利用を」
  - ミャンマー「交通インフラYBS」
  - シンガポール「ネット・ゼロ・エネルギー・ビルディング」
  - ベトナム「耐嵐建築」
  - 日本「北九州地域」
  - ブルネイ「雨水栽培」
  - ラオス「Savvam Say Marketのゴミ管理と排水システム」
  - マレーシア「イスクンダル計画低排出開発地区」
  - フィリピン「Ding Butandu」
  - タイ「コーンケン・シンクタンク・グループ (KKT)」
  - インドネシア「地元根差したゴミ管理 - スラバヤでのケーススタディ」

##### 成果

- PYによる正答率は9割以上であった。
- 課題別視察での学びについて実りある議論がなされた。
- 有用かつ具体的で興味深い各国から発表された最善慣行は、他国においても適用し得るものであった。

#### D. 決意・期待される今後の活動

DG7のPYに、レジリエントで持続可能な都市づくりに直接関与する者はほとんどいなかったため、船内における持続可能性の啓発活動に焦点を絞り、帰国後各国における波及効果が期待された。

フィリピンPY Janine Vicente主導の一連のブレインストーミングの後、DG7として4つの船内活動を作り、にっぽん丸での人々の行動が変化し、持続可能性への認識を増すことを狙った。4つの活動とは、#44SSEAYPReduconow、#44SSEAYPReusenow、#44SSEAYPRefillnow、#44SSEAYPRecylenowであり、総体で#changestartswith44SSEAYPという一つのプロジェクトをなすものである。

#44SSEAYPReduconowキャンペーンは、食べ残しの減少に焦点を当てることから始まった。全員に自らが取る食べ物の量に注意し、残さないよう促す「食べ残しにノーを」というフラッシュモブが11月22日と23日にダイニングルームの内外で行われた。

キャンペーンの第2弾は、水及びエネルギー消費を対象としたものだった。個々人に対する推進のために「キャビンを出る際には消灯するように」や「節水」など環境保護を促す注意書きがにっぽん丸内で掲げられ

た。



#44SSEAYP Reducenowのポスター

#44SSEAYP Reusenowイニシアチブについては、紙の使用減を呼び掛け、両面コピーを推奨し、片面用紙が印刷室やSG掲示板に置かれた。印刷室では、両面コピーの設定方法の英語ガイドラインも掲示された。

更に、片面用紙を回収するトレイが設置され、片面用紙を使用する説明書きが掲示された。



印刷室での片面用紙の回収

#44SSEAYP Refillnow写真コンテストの狙いはPYに使い捨てのペットボトルでなく自前の水筒を使うことを促すことだった。PYはソーシャルメディア上にハッシュタグ#44SSEAYP Refillnowをつけて自前の水筒を持つ自分の写真を投稿するだけで良い。この写真コンテストでは個人用とSG用の賞が各3つ与えられた。



#44SSEAYP Refillnowのポスター

#44SSEAYP RecyclenowというSG対抗の船内ミニコンテストは、再利用を促すことを企図していた。DG7では20分間のセッション2回のみでPYから200の再利用可能品を集めることができた。

#### E. 評価・反省（自己評価セッション）

DG7のメンバーは概して、持続可能性のための船内キャンペーンを張り、善い考えを広めるべくチーム一丸となることを楽しんでいった。計画や実行を経て友情は固く結ばれ、またPYはより持続可能な都市づくりのためには人々の考え方を変える必要があることを十分理解した。

更には、多くのPYが帰国後に学習内容をより多くの人々に共有することや、携帯アプリ開発やインテリアデザインなど自分の仕事にレジリエンスや持続可能性の概念を取り入れることで還元するつもりになっている。

しかしながら、ディスカッション中では詳説できなかった、都市計画における実際的な概念や技術的な都市づくりについてより詳しく知りたいという声もあった。

#### F. ファシリテーター所感

1974年の開始以来、「東南アジア青年の船」事業は幾度も大きな変化を経てきた。本事業の発展を目の当たりにすることができるのは栄誉なことである。私は今回が4回目の乗船であり、このきわめて実り多い事業の一員となることができ、光栄である。私は本事業がいかに益々真剣なディスカッション活動となっていく、より今日的な事柄を議論するようになり、そして今や、ASEANと日本の青年人材育成においてその存在感が際立つ様を目にしてきた。

「レジリエントで持続可能な都市づくり」がテーマになったのは今年が初めてである。これまでとは一線を画し、環境や防災など従前の関連テーマの発展型とはいえ、このテーマは本事業に横車をさしてより今日的な関心事にぴったりなものとして考えられ、ASEANと日本における種々の問題に関わっている。

この船内でのディスカッション・プログラムは、仲間意識を強め、分野問わずいかにJASEANの協力の輪に加わることができるかをPYの一人ひとりに考えさせるものである。PYが意見を述べ、それが他のPYと食い違うこともあり得るが、これこそまさに互いの考えを尊重する場なのである。この知識と経験と発想の交換はまた、それぞれの国で未来のリーダーとなる者達の糧となるのだ。

これまで同様、PYは非常に多様なバックグラウンドから集まった。文化的にも地理的にも、PYは異なる育ち方をしてきた。それ以外に、PYの議題に対する姿勢も幅広いものとなった。私のDGには大学新卒者から持続可能性に関する仕事のプロフェッショナルまでがい



DG7「レジリエントで持続可能な都市づくり」グループ（11月7日）

た。この差を埋めるのは私のファシリテーターとしての挑戦であった。全てのPYの期待に沿えるようディスカッションを効果的に運営する術を考えなければならなかった。厄介なことに、これは簡単ではない。PYが意見を述べ経験を共有するのに積極的であって嬉しい限りだ。また、船内でのより持続可能な環境を作出するために有意義なプロジェクトを企画進行することもできた。

最後に、本事業の成功に尽力された内閣府への最大限の謝意を込めて結びの言葉としたい。本事業がPY個人また各国にとってより多くの利益をもたらすと確信する次第である。



DG7「レジリエントで持続可能な都市づくり」グループ（11月8日）

### (8) 青年の起業グループ

ファシリテーター: Mr. Andy Iskandar Ajes

PY: 44名

#### A. グループ・テーマ・インフォメーション

##### a. テーマの詳細

日本とASEAN各国における社会とビジネスの関係や現状を理解し、その上で、社会及び経済を活性化する点から、社会としてどのような取組が必要か、また、青年自身もどのように取り組むことができるかについて議論する。

##### b. 期待される成果

- 将来的に青年の起業を促進する上で何をすることも役に立つ2点の財産を築く。
  - i. 青年の起業を促進するにあたり基となる実践的な知識の土台
  - ii. 今後どのような取組をするにしても活用できる、志を同じくしたPY達のネットワーク
- 国ごとに各自の地域や国における青年の起業を促進・推進するに資する事後活動について、よく練られた計画を持つ。

##### c. 身につく能力

##### 知識

- 形態や規模にかかわらず起業家精神と、異なる業界

収益構造の利害関係者がいかに経済を上向かせ、社会の生活水準を押し上げるのかについて、身になる理解と応用可能な知識を持ち合わせる。

##### スキル

- 様々な能力と知識レベルと個性を持つPY同士で協働することにより、チームワークと管理能力を身に付ける。
- 様々な課題について熟考し、異なる考えや解決策を分析することで、批判的思考及び論理的思考を身に付ける。
- 順々にコミュニケーションとプレゼンテーションを行うことで、それらの能力を身に付ける。

##### 行動

- 「東南アジア青年の船」事業全般ないしディスカッション・プログラムにおいて求められる多くの課題をやり繰り返すことで、人としてより責任感を持ち、成熟する。
- 他者との協働・交流や様々な違いを体感することで、自己や社会についての認識を、違いに対して更に尊重・評価できるよう育む。

- 一例として、再生可能エネルギーを活用する企業が挙げられた。環境保護に資するため、良い影響をもたらす。

以下は、議論中に言及された負の影響である。

- 経済への影響
  - バブルの崩壊という概念
  - AI (人工知能) 活用により人々が職を失いかねない
  - タバコやゲームなど、社会問題の原因となる
  - 債券類の乱用
  - 悪い競争
  - 知的財産権の乱用
  - 縁故主義
- 社会への影響：より大きな格差に繋がりがねない社会経済的な不均衡の原因
- 環境への影響：企業・産業廃棄物による汚染
 

上述の負の影響に対する潜在的な解決策についても議論した。

  - 青年の起業や関連活動促進に向けた政策立案という地元行政からの支援
  - 文化の後退を防ぐための学校や教育機関を通じた文化振興
  - 知的財産の問題に対峙するため地元行政による関連法の施行
  - 青年の起業を促進するための教育活動

**グループ・ディスカッション III：青年起業家の課題と利点**  
**ねらい**

以下のことにつき議論し、認識する。

- 青年起業家が事業を開始し築き上げる際に直面する様々な課題とそれらの原因・予防法
- 青年起業家が有する様々な利点
 

青年の起業を促進するにあたりどのような試みや企画であっても、こうした要素が考慮に入れられるべきである。

**活動**

- グループ別ディスカッション：6～7人のグループごとに以下について議論した。
  - 起業家が直面する多様な課題。ここには、青年起業家特有のものも含む。
  - 各課題の原因と潜在的予防策
  - 青年起業家だからこそ有する多様な利点
- 全体共有及びディスカッション：学びを最大化すべく、各グループはその他のグループに向けて議論の結果を共有した。

**成果**

- 青年起業家が直面する多様な課題とそれらの原因について議論し、共通見解を持つに至った。
- 経験及び評判：青年起業家は概して実績が無いため、信頼を得るのが難しい。経験の不足は評判に影響

- 財務的な持続可能性：しっかりと経営がなされ、損失を出さずに当初の目的を達成する。
- 資源を最大限活用する。
  - (金銭に限らず) 適正価格による交換や取引の活用について理解する：ストックオプションや物々交換など。
  - 人材：適材適所
  - 企業が活かせるネットワーク：例えばある問題を解決するための追加的資源の当てを社員の人脈に期待できる
- 以下を伴う明確さ
  - SWOT (強み、弱み、機会、脅威) 分析、リスク分析、損益分析、収益源、などの詳細を組み込んだ事業計画
  - 社員が企業の方向と目的に完全に共感し明確な、企業ビジョン・ミッション・バリューを体現した企業文化
- 潜在需要など、隙間に気付くことができる。

**グループ・ディスカッション II：起業家精神が社会に与える影響**  
**ねらい**

経済と社会に対し起業家精神が及ぼす様々な影響について議論し、見出すことで、起業家精神と社会との関係を理解し評価できるようになる。

**活動**

- 6～7人のグループ別による議論
  - 個人、家族、地域、国家、国際のレベルで、経済と社会に対し起業家精神が及ぼし得る正負の多様な影響の仕方
  - 負の影響を予防又は最小化する方法
- 全体共有及びディスカッション：学びを最大化すべく、各グループはその他のグループに向けて議論の結果を共有した。

**成果**

自分たちの議論を通して、異なる規模、異なる種類の起業家精神があり、経済と社会に対するそれぞれの役割があることを理解した。

以下は議論中に言及された正の影響であり、3領域に分類される。

- 経済
  - 雇用機会の提供
  - 生活の質の向上
  - 新規市場の創出
- 社会
  - 文化振興
  - 社会的事業による社会問題の解決
  - 起業家を目指すよう若者への触発
- 環境

はグループ) について調べる。

**C. 活動内容**

**日本での課題別視察**

施設：株式会社ボーダレス・ジャパン

**活動**

- 共同創業者の鈴木雅剛氏による講演。内容は以下のとおり。
    - ソーシャル・ビジネスとは
    - ソーシャル・ビジネスがなぜ必要で、重要なのか
    - ソーシャル・ビジネスを経営する上での重要な点
    - ボーダレス・ジャパンの裏話
    - ボーダレス・ジャパン傘下のソーシャル・ビジネスの事例紹介
  - 社内見学
  - 鈴木氏との質疑応答
- 視察から学んだこと**
- いかにソーシャル・ビジネスが社会問題へ効果的かつ持続可能な方法で対峙できるか。
  - ソーシャル・ビジネスが成功(利益を生み、持続する)ためには何が必要か。
  - 成功するソーシャル・ビジネスを打ち立て、経営するために起業家が必要な心構えと能力。

**グループ・ディスカッションI：起業家精神とは**

**ねらい**

PYが共通に持つ起業家精神の定義について議論・合意し、ディスカッション・プログラムの目的にかなうよう、起業家精神が何を指すかについて共通見解を持つ。

**活動**

- グループ別ディスカッション：PYは6から7人のグループに分かれ、健全な企業が持つべき質や特性を踏まえて起業家精神とは何か議論する。
- 全体共有及びディスカッション：各グループは他のグループに対して議論の結果を共有し、セッションの目的についての共通認識を持つに至った。

**成果**

起業家精神の器と定義される企業体は以下が要件となるとの合意がなされた。

- 需要を満たす
  - 製品やサービス
  - 市場とターゲット層に対する明瞭な認識
- 以下のような革新性を有する。
  - 市場での位置取り：企業の目的を見直す、市場で特定の層に集中する、など。
  - 自社製品及びサービス：市場でどう差別化されるか。
  - 業務執行又は手続きにおける迅速さ、品質、姿勢など。

- 青年起業家が直面する課題や問題について共感できるようにする。

**B. 事前課題**

**個人課題1**

次の資料を読むこと。

- 起業家精神 - 学術的視点から
- 起業家精神 - 起業家的視点から
- 小規模企業
- 社会起業

**個人課題2**

- 社会と経済の両方に対し正の影響を与えている地元の企業や事業の例を調べる。影響というのは、個人、家族、地域又は国のレベルでも構わない。
- これとは別に、社会と経済の両方に対し負の影響を与えている地元の企業や事業の例を調べる。影響というのは、個人、家族、地域又は国のレベルでも構わない。

**個人課題3**

次の資料を読むこと。

- 創業
- 青年の起業
- 青年起業家のインタビュー

**個人課題4**

次の資料を読むこと。

- 起業家による「失敗から成功」についてのインタビュー
- 資金調達の手立て

**個人課題5**

- 自国政府による青年起業支援の取組や努力の例について調べる。
- 政府によらない自国における青年起業支援の取組や努力の例について調べる。
- 実際には青年起業を妨げてしまう自国での取組や努力の例について調べる。

**個人課題6**

「青年起業支援」のテーマに関する資料を読む。

**国別課題1**

自国での成功した青年起業家を見つけ、インタビューを行う。

**国別課題2**

自国で青年起業の旗振り役となっている個人(若しく

- 響し、潜在的な利害関係者が協働から離れる原因となる。
  - 資金・財務：青年起業家は通常、強固な財務状態にない。この資金不足が事業の発展と拡大に対し影響する。
  - 競合：市場シェアを既存の競合から奪うのは至難の業である。青年起業家は、市場での足掛かりを持つために特に革新的である必要がある。
  - 人脈及び資源：青年起業家はまた、相対的に狭い人脈しか通常は持ち合わせていない。そのため、難局に必要な支援や資源をおさえるのは青年起業家には更に難しくなる。
  - 知識：青年起業家は概して経験の不足により関連する専門知識やスキルに欠けている。
  - プレ及び集中の欠如：青年起業家は、大抵、相対的に新しいアイデアを試すのに意欲的であるため、事業上のプレを引き起こしかねず障害や弊害の可能性も孕んでいる。
  - 時間管理：青年起業家、特に在学中に起業する者はいろいろなことを同時並行で処理しなければならないが、一般的に時間管理の経験不足である。
  - 人材：資金・資源不足により、青年起業家はまた多くの場合、事業を推し進める人的資源と専門性が足りない。
  - ストレス管理：往々にして青年起業家はあまりストレス管理と自己管理の経験を有さない。なぜならば、燃え尽きるまで自分を追い込んでしまう傾向にあるからだ。
- その後、上述の課題を予防ないし最小化する様々な方法について議論した。
- 実行：計画を実行に移すことが、現実を知り学びを得る最良の方策である。
  - 調査：課題をよりうまく切り抜けるため、より調査を行い、より経験豊かな起業家に助けを求め。
  - ネットワーキング：関連分野でより多くの人々と知り合うことが青年起業家にとってはより有益な知識、人脈、場合によっては資源を得ることになる。
  - 研修及び助言：あるかもしれない落とし穴を避けて通る術を知る近道の一つは、かつて同じ道を通り、同じことを経験した者から学ぶことである。
  - 革新的たること：より革新的となることで、青年起業家は新しい方法で問題を解決し、市場シェアを獲得する。
  - 仲間やパートナーを得る：代替案や更に優れた案を議論し得るための相談役となる。
  - 独自の位置取り：市場における独自の位置取りをすることで、青年起業家は自社製品やサービスのニッチな市場を開拓することができる。
  - フィードバックの獲得：豊富なフィードバックを得

- 複数の手立てを得ることで、事業アイデア、製品、サービスを迅速に改善することができる。
- 雑事・雑念を振り払う：そのような方法を見つけたら準備したりすることで、重要事項により集中できる。
- また、青年起業家に特有で世代が上の起業家には無い利点につき議論し、見出した。こうした利点の活用で、より順風とすることができる。
- 活力：若者は一般的により活力があり肉体的にも健康なため、より自分を追い込み、より事業に時間を投下できる。
- 時間：若いうちに始めることで、間違いが許される時間をより長く持つことができ、それらから学び再挑戦することができる。
- 集中度：青年起業家は多くの場合、家族や子供を持っていないため、他に時間を取られることが少なく、事業により集中することができる。
- 楽観主義：青年起業家は、機会により注目し、楽観的である。これは一歩を踏み出す上で鍵となる性格である。
- 大目に見てくれたり、助けの手を差し伸べてくれたりし易い：概して社会は、間違いをしてしまった若者に寛大で、活動的な青年には優しい。
- 適応性：青年起業家の方が一般的にはより柔軟で、環境や業務形態の変化に適応することができる。常に変化する世の中においてこれは有利な点である。
- より創造的・革新的である：若者は大抵の場合そうであるため、新しい考えや解決策を市場にもたらし、又は新しい市場を創出することすらできる。
- リスクをとる：若く、経験が浅いことから青年起業家は一般的に新しいものや異なるものを試すことを比較的厭わない。そこで、リスクをとることにより受容的であるため成功の確率を高めることに繋がる。
- より大きな市場又は世界市場への近さ：若者は概してより技術に明るく、最新技術を駆使してより大きな市場又は世界市場へ打って出ることができる。
- 技術への精通度：青年起業家の方がまた、最新技術を活用して新製品や新市場を展開する上で有利な立場にある。

#### グループ・ディスカッションIV：青年の起業における成功要因

##### ねらい

青年起業家の様々な成功要因を議論し見出す。青年の起業を促進するにあたりどのような取組でも計画でも、かかる要素を考慮に入れるべきとなる。

##### 活動

- グループ別ディスカッション：PYは6～7人のグルー

- プで以下について議論した。
  - i. 成功する青年起業家に必須の心構えと能力
  - ii. こうした心構えと能力を手にする又は育む様々な手立て
- b. 全体共有及びディスカッション：各グループは他のグループに対して議論の結果を共有し、セッションの目的についての共通認識を持つに至った。

##### 成果

- 議論の結果、成功する青年起業家になくはない能力だとPYが合意に至った要件は次のとおりである。
- 管理能力：自己管理、チーム管理、財務管理、時間管理、タスク管理、など
  - マーケティング及びブランディングのスキル
  - コミュニケーション・スキル：交渉、対人力、説得など
  - リーダーシップ・スキル
  - 批判的思考
  - プロジェクト・マネジメント及び実行のスキル
  - 判断力
  - 人脈を広げるスキル
- 議論の結果、成功する青年起業家になくはない心構えだとPYが合意に至った要件は次のとおりである。
- 実情に即している
  - 柔軟な考え方ができる
  - 根気がある
  - 主体的に学ぶ姿勢
  - 難題に喜んで取り組む
  - 創造的で革新的である
  - 成長意欲
  - バランスの良い思考（どのような問題でも正負両面について考える）
  - 自己動機づけができる
  - 柔軟性と適応性を持ち合わせている
  - 集中し、ブレない
  - 誠実
  - 自分で考えることができる
- 次に、上述の心構えと能力を手にする又は育む様々な手立てについて話し合った。
- 集中し、ブレないための目標や計画の設定
  - 知識を広げ、より柔軟な考えができるよう更に意識的である
  - 困難を受け入れる
  - 個人的資源を活用し管理する上で優先事項を効果的につける
  - 助言をくれたり研修をしてくれたりするプログラムに参加し、授業を受ける
  - 意思決定の際に関係してくるリスク管理や現状理解の方法を学ぶべく実際の例を調べ、考察する。

#### カンボジアでの課題別視察

施設：国立経営大学

##### 活動

- a. 国立経営大学のシニア・アドバイザーであるMr. Stephen Patersonによる、国立経営大学アントレプレナーシップ・プログラム（BMC コンペティション及びメコン・チャレンジ）の概要説明
- b. 技術についてのプレゼンテーション
- c. Smart Axiataの戦略・事業開発部長であるYou Sokunpanha氏による「カンボジアでの起業」という講演
- d. Edemyというオンライン・プラットフォームについて共同創業者のMr. Chea KagnarithとMs. Srun Sovanによるプレゼンテーション
- e. Codingateの最高経営責任者Mr. Sok SopheakmonkolによるSokhaKrom（健康アプリ）についてのプレゼンテーション
- f. 講演者との対話・質疑応答

##### 視察から学んだこと

- a. 企業が他の会社やスタートアップ企業を助けることでいかに利するか
- b. 技術による起業家が直面する様々な問題
- c. 技術系スタートアップが初期においていかに財務面と人事面の折り合いをつけたのか
- d. 社会問題に立ち向かうため事業がどのように技術を使っているか
- e. 起業家が持つべき心構えと能力

#### グループ・ディスカッションV：「東南アジア青年の船」事業後、青年の起業を促進する

##### ねらい

- a. 青年の起業を促進する試みや取組についての先行事例を概観する
- b. これまでの全てのセッションで得られたものを基に、自国で青年の起業を促進する事後活動となり得るアイデアや企画を考え出す。

##### 活動

- a. グループ別ディスカッション：PYは6～7人のグループごとに、自国で青年の起業を促進する試みや取組の先行事例について共有した。
- b. グループ別ディスカッション：PYは国ごとに分かれ、自国で青年の起業を促進する事後活動となり得るアイデアや計画を考えるべく話し合った。
- c. 全体共有及びディスカッション：各自の考えや計画を磨くため、各グループは他のグループに対して議論の結果を共有した。

##### 成果

以下が、各国ごとに考え出されたアイデアや計画である。

- a. ブルネイ
- 現状の課題：学生に対する起業家教育の不足
  - アイデア・計画：早い段階（中学校高学年）で起業家教育を組み込むことを提唱する
- b. カンボジア
- 現状の課題：起業関連についての情報不足
  - アイデア・計画：多機能な起業関係の組織を作る。
    - 市場、供給者、投資家についての情報収集
    - 関心を寄せる若者に対する起業についての研修セッションの提供
- c. インドネシア
- 現状の課題：起業関係の活動は主に大都市に集中している。
  - アイデア・計画：以下を通して事業機会を広げるメディアの創設
    - ビジネス・ショッピング・プログラム
    - 投資家と、それに合う事業を繋げる
    - 政府・非政府による支援
- d. 日本
- 現状の課題：既存の教育制度は、起業家が持つべきリーダーシップなどソフトスキルではなく、点数をとることに重きが置かれている。
  - アイデア・計画：学生のリーダーシップ・スキルを築き磨き上げることにより注力した教育制度を呼び掛ける。
- e. ラオス
- 現状の課題：起業支援の法律が不足している。
  - アイデア・計画：青年の起業が促進されるような具体的な法案を提唱する。
- f. マレーシア
- 現状の課題：公式な起業家教育の不存在
  - アイデア・計画：学校のカリキュラム、特に大学レベルにおいて起業に関する授業を組み込むことを提唱する。
- g. ミャンマー
- 現状の課題：起業家的な活動は一般的ではなく、また政府による支援もない。
  - アイデア・計画：以下の方法で政府による起業家的活動の呼び掛けを行う。
    - 青年における起業の促進
    - 法案の作成
    - ワークショップや研修
    - 土台作り
- h. フィリピン
- 現状の課題：無料で使えるコワーキングスペースの不足
  - アイデア・計画：起業家たちが仕事をし、考えやトレンドを共有し、一緒に問題を解決する基盤を提供するコワーキングスペース
- i. シンガポール
- 現状の課題：政府は起業の促進や支援のため多くの取組やプログラムを行っているが、青年起業家支援に特化した法律は多くない。
  - アイデア・計画：シンガポールにおける青年の起業を支援する法律の制定を呼び掛ける。
- j. タイ
- 現状の課題：タイで事業を登記する際の手続きが煩雑である。
  - アイデア・計画：以下を満たす、より迅速で簡易な事業登記の提唱
    - 必要書類を減らす
    - より明瞭な手続き
    - オンライン登録
    - より広範な情報開示
- k. ベトナム
- 現状の課題：スタートアップを始めるための情報の欠如（市場状況、政策、投資機会、ネットワーキング・イベントなど）
  - アイデア・計画：以下について行うスタートアップのためのオンライン・プラットフォーム
    - 若い起業家が会社を興すために必要な情報を収集する。
    - 最新の業界ニュース、トレンド、機会やイベントなどを掲載する。
    - 起業家同士を交流させ繋げる。

#### D. 決意・期待される今後の活動

##### 他の青年起業家を支援する

このDGのほとんどのPYは、既に青年起業家であるか、自らの会社を興し青年起業家になることに関心のあつた者かのどちらかであった。DGで意識が高まったことにより、国ごとの事後活動が青年の起業というテーマに関係しなかった場合でも、個人的に他の起業家を支援し助けの手を差し伸べたいと多くの者が表明した。

##### アドボカシー・ワーク

自ら起業家になることには関心がないが、立法者に繋がりがあつたという何人かのPYは、青年起業家に利する政策を促進するよう政府内で働きかけることに興味があると表明した。

##### 「東南アジア青年の船」事業関係者の起業家のためのオンライン・プラットフォーム

起業家に興味があつたり目指していたりする既参加青年を支援するオンライン・プラットフォームについて話し合われた。このプラットフォームは、以下を目的とするものである。

- 既参加青年に対し、青年起業家となるために必要な知識や支援を与える。
- メンバー同士を繋げることで、全体の学びや機会を

最大化する。

- メンバーには、より成功し経験豊富な起業家による有益な情報や助言が与えられる。

#### E. 評価・反省（自己評価セッション）

ディスカッション活動が始まるにあたり、これに向けた個人的目標と期待とを書く場がPYに設けられた。そして自己評価セッションでは、自らが書いたものとフィードバックを読んでいった。

- PYの約3分の2が、ディスカッション活動における個人目標を達成した。
- PYの約半数が、ディスカッション活動を終えた今であれば、また違う目標や期待を書いていただろうと感じた。
- PYの大半は、自らのディスカッション活動への参加度合に満足していた。不満の残った少数者については、忙しいスケジュールと健康状態という2点が主な阻害要因となった。

#### F. ファシリテーター所感

##### DG8のPY達

このDGのPYに既に起業しているか、又は起業家になりたいと思っている者がいかに多いか、私はとても驚いた。私が調べたところによると、PYの22.5%が既に起業しており、77%が起業の計画を持っていた。

そこで、私は当初これが問題を生じるのではないかと心配していた。というのも、いかに青年の起業を促進する環境を創出するかがこのDGの主眼である中、私はPY側が更に良い起業家となることに関連した話題にもっと関心があるのではないかと思ったのだ。

しかし蓋を開ければ杞憂に終わり、PYたちはこのDGの主題にとっても積極的に関わっていた。このDGに深く参加してくれて、議論は常に活発で広範囲に及んだ。その程度が大きかったため計画書の予定に合わせるのが難しく、限られた時間の中でDGの目的からはずれないよう取り扱う話題を微調整しなければならなかった。

更に、このDGのPYたちは資質が高く、とても感心した。ディスカッションを運営していく上で何人かに役割を振った際に、初めてこれに気付くこととなった。何人かはディスカッションにおける議長となり、ディスカッション・セッションの流れを管理し、グループ内の人間関係に注意を払い、また全体の議論におけるファシリテートまですることができた。こうした議長たちは、立派に自らの役割を果たしてくれた。

それだけでなく、ディスカッション・セッションで書記など他の役割を与えられたPYの貢献も計り知れなかった。加えて、他の者の働きも実に称賛に値するものであった。他のDGにも起業家であつたり起業に関心のあつたりする者が多くいることが分かった際に、DG8の

PYの何人かが自発的に集まって、他のPYたちも参加してネットワークを作り互いに学び合うことができるセッションの自主活動を企画した。インフルエンザの発生により活動日程が変更となり、自主活動が実現に至らなかったのは残念だった。概して、ファシリテーターとしての仕事を私がし易くなるほどPYのディスカッション活動への参加度合は素晴らしいものだった。

##### アントレプレナーシップ・エクササイズ

ディスカッション活動中に私がDG8のPYに課したアントレプレナーシップ・エクササイズについても言及したい。PYは8つのグループに分かれ、各グループは事業体となって自分たちが考案した模擬の製品やサービスを他のPYに「売る」こととなった。この際、各グループは一定の「SSEAYPドル」を「費やす」ために与えられた。各グループはまた「投資金」を引き出さねばならず、他のファシリテーターが「投資」用の「SSEAYPドル」を持つ「投資家」に扮した。

このエクササイズの主眼は、起業家が乗り越えなければならぬことをPYに大まかに把握し追体験させることだった。ディスカッション活動の最後に、このエクササイズの結果報告を行った際、期待以上に有益となったことが分かった。私のエクササイズの準備と実行に改善の余地があつたかもしれないが、エクササイズによる学習結果の程は喜ばしい驚きだった。意図された学習目標とは別に、PYの何人かから報告された学びは予想外のものであつた。これを受けて、この青年の起業というテーマを扱う将来のファシリテーターに対して、このエクササイズを計画に盛り込むことを強く勧めたい。

##### 青年の起業に寄せる関心

他DGのPYとの交流や会話の中で、多くのPYが青年の起業を選んだが、第一志望通りにはならなかったということを知った。加えて、他のDGテーマを志望したが、それでも青年の起業に対して非常に関心を持っているという者も多くいた。更に、身の回りで「東南アジア青年の船」事業外の青年たちと起業家として話した際、徐々に今日の青年の間で起業が大きな関心事となつていくことが分かった。

他にも、起業家の内輪でも、多くの青年が社会的起業により関心を寄せていることに気付いた。社会問題に立ち向かい、社会に正の変化をもたらす最良の手段の一つとして起業を捉えている者は多い。

以上から、私は「東南アジア青年の船」事業のディスカッション活動のテーマの一つとして青年の起業が残り続けることを希望している。

##### 終わりに

「東南アジア青年の船」事業のファシリテーターとなるのは私にとって実に光栄で名誉なことであつた。この経験は、個人的にはとても勉強になり、充実し、触発を受けるものとなった。日本政府内閣府が私を第44回「東

南アジア青年の船」事業のファシリテーターとして採用いただいたことに、消えることのない感謝の意を表したい。また、御支援くださり、ディスカッション活動を成功裏に終わらせることにご尽力いただいた全ての皆さん、特に管理部員と、もちろん同僚のファシリテーター



DG8「青年の起業」グループ (11月22日)

たちに対して深く御礼申し上げる。「東南アジア青年の船」事業のディスカッション活動が永く続き、日本とASEANの青年を育成し、この地域の幸せに資することを祈念している。



DG8「青年の起業」グループ (11月22日)

### 3 帰国報告会（各国事後活動提案）

#### (1) 概要

12月12日、にっぽん丸船内ドルフィンホールにて帰国報告会が開催され、各国事後活動についての活動案を発表し、共有した。PYらは第44回東南アジア青年の船事業を通して学んだことを最大限にいかし、社会に貢献していくための第一歩としてこれらの活動案を考案した。

- 16:00-17:15 国ごとの発表
- 17:15-17:25 駒形健一管理官からの報告

#### (2) 報告内容

##### A. 日本

“SYNERGISER”は検索エンジンを作ることでPY達がよりつながり、連絡しあい、お互いに協力し、互いの長所を最大限にいかすことを目的としている。検索エンジンにはPYの経歴やスキルを含むプロフィールが記載され、PY達はこの検索エンジンを使うことで、日本とASEAN各国において同様のプロジェクトを企画している人とつながりを持つことができる。2019年には全ての「東南アジア青年の船」事業参加者まで展開することを予定しており、また日本PYは2018年8月までに事後活動として2つのプロジェクトを行うこととする。

プロジェクト名：SYNERGISER

##### 背景

- 解決に協力を必要とする複雑な社会問題
- PYの経歴やスキルがまだ知られていない
- プログラム後はネットワークが弱まりがちであること

目的：新しく、更に質の高い社会貢献活動を行うためのツールを作る。

##### 対象

- 短期：第44回「東南アジア青年の船」事業参加者
- 長期：全ての「東南アジア青年の船」事業参加者

##### 概要

- 第44回「東南アジア青年の船」事業を対象とした検索エンジンのデータベース”SYNERGISER”を作成する。
- 検索エンジンを通して検索内容に合った参加者の略歴を提供する。
- 日本PYは、それぞれのプロジェクトの協力を促し、支援する。

##### 期待される成果

2018年8月まで：少なくとも2つの社会貢献活動がSYNERGISERの調整のもと行われる。

長期：検索エンジンの継続と拡大

##### タイムライン

- 2017年12月：プロジェクトの開始、パートナー探し
- 2017年12月：PYの情報の収集
- 2017年2月：現状の評価をもとに、どのように効果的な協力を促進していくかについての調査を行う。
- 2018年4月：ツールとしての“SYNERGISER”の完成
- 2018年8月まで：2つの共同事業の調整を成功させる
- 2018年9月：共同事業の評価
- 2019年～：「東南アジア青年の船」全参加者への拡大

##### B. カンボジア

Project DEWは、“Donation for Education and Water (教育と水への寄付)”の略で、教育の重要性を推奨すること、読書クラブを通して継続的に刺激を与えること、清潔な水を使用することで健康的な生活を課すことなどによって、質の高い教育を増進させていくことを目的としている。リサイクル用品を家具として使用しているCoconut Schoolにおいて2018年2月初旬にプロジェクトの実施を計画しており、浄水器の供給、教材の配布、生徒の保護者達とのワークショップなどを行う予定である。

プロジェクト名：Project Dew - Donation for Education and Water

背景：Coconut Schoolという名前の学校があり、そこでは創設者がたった2名の教師とともに1年生から6年生を対象に無償で教育を提供している。

- 貧困、教材の不足、生徒の家が学校から遠いことなどを理由とした高い中退率
- 清潔な水を使うことができない：近くに清潔な水源がないため、近辺の人々は山からの直接の水を汚れたまま日々消費している。

目的：次のことを通して質の高い教育を推進していく。

- 地域において、教育の重要性を推奨すること
- 読書クラブを通して刺激を与えること
- 清潔な水を使用することで健康的な生活を送ること

##### 対象

- Coconut Schoolの30名の生徒
- 生徒の保護者達

##### 概要

- 井戸を掘り、5つの浄水器を供給する。
  - 教材と図書館用の本を寄与する。
  - 保護者を対象としたワークショップ
  - 読書クラブ
- 期待される成果
- 十分な教材が生徒に行き届く。
  - 教育の価値について、保護者がより理解を深める。
  - 生徒達が読む習慣を身につける。
  - ボランティア達はより社会活動に参加するよう刺激を受ける。
  - 生徒達は清潔な水を使用することができる。

##### タイムライン

- 2017年12月：開催地のアセスメントと詳細な計画作成
- 2018年1月：協賛とロジスティック調整
- 2018年2月：プロジェクトの実施、モニタリングと評価

##### C. タイ

“WORLD: Within Our Reaches are the Living Dreams”は、情報や生活のスキル、ロールモデル、自信や自己責任が欠けがちで、辺ぴな地域の高校に通う14～15歳の学生達の、自己認識や社会意識を高めることを

目的としている。

プロジェクト名：WORLD camp - Within Our Reaches are the Living Dreams

背景：タイの若者達は、以下のことが不足している。

- 自己理解
- 自信
- 社会意識
- 効果的なカウンセリング
- ロールモデル
- 英語力

##### 目的

- 生徒達に対して高等教育に到達するための動機付けをする。
- 様々な分野の職業についての情報を提供し、自己学習を促進する。
- タイ語と英語両方でのコミュニケーションスキルを向上させる。
- ASEANについて更に学ぶよう奨励する。

##### 対象

- 14～15歳の学生
- 参加者：50～100名

概要：ディスカッションのグループ・テーマに沿った持ち場ごとにアクティビティを行う。

- ワークショップを通じたカウンセリング
- 英語スキルとソフトスキル
- チームワークとコミュニケーションスキル

##### 期待される成果

- 将来の進路へ向けた英語力とソフトスキル
- ロールモデル
- 将来の選択における自信
- 情報を賢く活用する

##### タイムライン

- 2017年12月～2018年2月：準備
- 2018年2月～4月：開催地の確認
- 2018年5月～6月：2泊3日のプロジェクト実施

##### D. ラオス

“SSEAYP of Change”は二段階に分かれる。SSEAYPフェアにおいては「東南アジア青年の船」事業への参加に興味を持つ若者へ事業についての情報や、また事業中にPYがどのようなことを行ったかについての情報を提供する。2段階目として、公衆衛生、4R (Refill, Reduce, Reuse, Recycle)、ASEAN各国に関する基本情報などを含む教育の重要性を強調するために“I Do Regret”プロジェクトを継続していく。

プロジェクト名：SSEAYP OF CHANGE

##### 背景

- 熟練した人材の不足
- 教育の重要性に対する認識の低さ

- 率先的な思考態度の欠乏

#### 目的

- ワークショップ：プロジェクトを計画することで、若者達のリーダーシップスキルを高める。
- 活動プログラム：若い年齢の学生に対し教えたり交流したりすることを通して教育する。

#### 対象

- ワークショップ：高校生、大学生、首都ビエンチャンに滞在する積極的な若者
- 活動プログラム：農村地域の小学生

#### 概要

##### ワークショップ

- 「東南アジア青年の船」事業の紹介
- 社会問題を認識する
- プロジェクト企画のオリエンテーション
- ラオスPYのプロジェクト設計図の発表

##### 活動プログラム

- 教育：英語、衛生学、4R（Refill, Reduce, Reuse, Recycle）
- “I Do Regret” ビデオプレゼンテーション
- チームビルディング・アクティビティ
- チャリティーイベント、寄付

#### 期待される成果

- 新しいプロジェクト案の始動
- ボランティアネットワークの拡大
- 教育へのアクセス

#### タイムライン

2018年1月：リサーチ／調査、プロジェクトの内容準備

2018年2月：資金集め、ワークショップイベント

2018年3月：活動プログラム及び経過観察

#### E. インドネシア

“Hoax Buster”の目的は、賢いデジタルリテラシーについての認識を高めることである。13～21歳の若いインターネット利用者へのアプローチとして、蛇と梯子という名のゲームを活用する。若者達はインターネットを建設的に使用することができるようになり、捏造（デマ情報）の投稿が減ることが期待される。

**プロジェクト名**：THE HOAX BUSTER PROJECT

#### 背景

- 2016年にはインドネシアのインターネット浸透率が46%であること
- 大量の捏造（デマ情報）やフェイクニュースがインターネット利用者の中にあふれていること
- オンライン上の捏造された内容（デマ情報）に対する理解や責任が不足していること
- 蛇と梯子ゲームは、建設的なインターネットに代替する学習メディアであること

#### 目的

- インドネシアの若者達に建設的なインターネット行動を奨励すること
- 捏造（デマ情報）の内容やその影響についての認知を高めること
- 捏造デマ情報に反対する活動に若者を引き込むこと

**概要**：蛇と梯子ゲーム

#### ゲームの特徴

- デジタルリテラシーと捏造（デマ情報）に関する情報がそれぞれの蛇と梯子の箱に入っている（面白い事実など）
- 小型のボードと大型のボード
- ボード上の画像イメージ

**対象**：13～21歳の若者

- 短期：50名の若者
- 長期：全国27州の540名の若者

#### タイムライン

- 短期：2017年12月17日
- 長期：2018年1月～12月

#### 期待される成果

- 27州から540名の若者が建設的なインターネット利用の認知を高めるためにボードゲームに参加すること。
- 2018年度以降のインドネシアにおける若者の反捏造（デマ情報）運動が同時的に起こること。

#### F. マレーシア

“Rangers of Good Will”は、若者の間における環境問題への認知を促し、より関わり深く社会活動に参加するよう働きかけることを目的としている。環境に対する認識を若者に広めていくために、このプロジェクトはそれを提唱するものとして、彼らに興味を持たせ積極的に参加するよう働きかけていく。

**プロジェクト名**：RANGERS OF GOODWILL

**背景**：ビーチや川、丘やマングローブのように、マレーシアにはたくさんの自然に特化した興味深い場所がある。しかしながら皆がその役割や自然の重要性をどのくらい深く理解しているだろうか。それらの情報があつたとして、私達はどのように人々に対して、自然を保護するよう働きかけられるだろうか。

#### 目的

- 環境問題の認知
- 自然保護保全活動への若者の参加
- 活動の成果をもとにした書類や映像の制作

#### 対象

- Rangers of Goodwill 1.0：2017年「東南アジア青年の船」事業マレーシアPY
- Rangers of Goodwill 2.0 and 3.0：地元の大学生及び職業訓練校生70名
- Rangers of Goodwill 4.0：地元の大学生及び職業訓練校生30名

#### タイムライン

2018年1月：準備

2018年2月：Rangers of Goodwill 1.0（丘にて）

2018年4月：Rangers of Goodwill 2.0(マングローブにて)

2018年6月：Rangers of Goodwill 3.0（川にて）

Aug 2018: Rangers of Goodwill 4.0（ボルネオにて）

2018年9月：報告書作成

#### 活動

- キャンプ
- 河川の清掃
- マングローブの清掃と植樹
- ゴミ拾い
- 植物のラベリング
- イベントの運営

#### 期待される成果

- 参加者に環境に対する認知がうまれる
- 各環境の場所に関する映像の刊行
- ラベリングされた植物のカタログ
- 5つ以上の地元の施設からの参加

#### G. ブルネイ

ブルネイPYは教育関連の問題に着目し、数学と英語に苦戦している学生に対し、計算と読み書きの補習授業を提供する。ブルネイ国王によって描かれた国家ビジョンであるブルネイ・ビジョン2035の目標の到達に向けて、ブルネイPYはこのプロジェクトを通してその役割を担っていく。ブルネイPYは、若い学生達の教育経験に付加価値を与え、今の若者が2035年には才覚のある熟練した世代になるように仕掛けていくつもりである。

**プロジェクト名**：Project ILMU - Inspire Learn Motivate Unite, Wisdom and Knowledge

**背景**：国王即位50周年世代としてブルネイ・ビジョン2035をサポートする。

- 質の高い教育
- 才能と高い技術力のある労働力
- 持続的な経済成長

#### 目的

- 読み書きと数学の成績が低い学生の支援を提供すること
- 地域においてより積極的になるよう若者を刺激し鼓舞すること
- 教育経験に付加価値を与えること

#### 対象

- 成績の低い中学生
- 12～14歳
- 地方の学校

#### 概要

- 英語の読み書きの無料クラス
- 数学の無料クラス

- 月に4回
- 学生とブルネイ既参加青年との間での共有・モチベーションセッション
- 学習を楽しくインタラクティブにするためのテーマをもった活動

#### 期待される成果

- 学生達の基本的な読み書きが向上し、数学の理解が深まること
- 学生達の英語の理解が深まること
- 地域の発展に貢献しようとする力のある世代

#### タイムライン

2018年1月～2月（初期段階）：企画、研究、調査、準備

2018年3月（1学期の休み）：実施、学生の能力評価、Project ILMUの月次評価

2018年11月：結果比較と第45回「東南アジア青年の船」事業への進捗報告

#### H. ミャンマー

3つのプロジェクトを事後活動として行う。一つ目のプロジェクトは、それぞれのPYが所属する異なる地域でソーシャルメディア・リテラシーキャンペーンを行い、ネットいじめやフェイクニュースの選別、ソーシャルメディア倫理学について、ソーシャルメディア利用者に提言し教育していく。二つ目と三つ目のプロジェクトは、“健康意識プログラム”と“ゴミから金へ”プロジェクトである。

**プロジェクト名**：Target 44

**背景**：ソーシャルメディア上のフェイクニュースが衝突を生みかねない。

- ミャンマーの人口：5,500万人
- 2015年のフェイスブック利用者数：470万人
- 2017年のフェイスブック利用者数：974万人

#### 対象

- 若者（13～18歳）：教育システムにデジタルリテラシーが含まれていない。
- 成人と高齢者（19～65歳）：フェイクニュースを見極める知識と、プライバシーとセキュリティに関する知識の欠如。

#### 目的

- ソーシャルメディア倫理についての認識を高める。
- 成人と高齢者を対象に、どのようにフェイクニュースを見極めるかについて教育する。
- 若者へ安全なソーシャルメディア環境を提供し、ネットいじめについての知識を共有する。

#### 概要

- オンラインキャンペーン
- ミニ講座

#### 期待される効果

- オンラインキャンペーン：1年のうちに異なる地域か

- らの100万人のフェイスブック利用者に働きかける。
- ミニ講座：1年のうちに異なる地域からの100万人のフェイスブック利用者に働きかける。

#### タイムライン

2018年1月：プロジェクトの企画と鍵となるパートナーとの連絡

2018年2月：オンラインキャンペーンの実施

2018年5月：ミニ講座の準備

2018年6月：ミニ講座の実施

### I. フィリピン

Project Paraisoは、「東南アジア青年の船」事業での学びを伝えることで沿岸の地域社会を良くしていく。フィリピンPYは、2018年に沿岸地域で行う3日間のキャンプにおいて、「東南アジア青年の船」事業のディスカッション活動からの学びを活用することを狙いとしている。トピックとしては、どのように環境を保護していけば良いのか、持続可能なライフスタイル（リサイクル、適切なゴミの分別）と災害からの回復力、健康的なライフスタイルの促進、日本とASEAN各国についての理解を深めることなどに着目していく。プロジェクトは1年に1か所の沿岸地域で実施し、向こう3年間行っていく。**プロジェクト名**：PROJECT PARAIISO（パラダイス）**全体的な目的**：1年に1度、「東南アジア青年の船」事業から学んだことを共有することに重点を置いた3日間のキャンプを行う。2018年から2020年にかけて、それぞれ異なる3つの沿岸地域で実施する。

#### 具体的な目的

- 気候変動、持続可能なライフスタイル、災害からの回復力、医療と歯のミッションについての知識を伝授する。
- 日本とASEAN各国についての知識と理解を高める。
- ワークショップを通して健康的なライフスタイルを推奨する。

#### 概要

1日目（アースデイ）

- 環境教育セッション（4Rs、気候変動と持続可能なライフスタイル）
- 沿岸の掃除とマングローブの植樹

2日目（ファンデイ）

- ズンバ
- 日本・ASEAN弁当ランチ
- LGBTQIとの楽しいゲーム
- 高齢者のためのアート・ワークショップ

3日目（ヘルスデイ）

- 医療と歯のミッション
- 正しい手の洗い方
- 口腔衛生セッション

**対象**：選ばれた沿岸地域の居住者

- 15～30歳の若者30名
- 60歳以上の高齢者50名
- LGBTQIコミュニティから30名

#### 期待される成果

- 1年に1度のキャンプ
- 目標とする対象者の人数に達すること。
- 対象者の70%が学んだことを環境保護や健康的なライフスタイルの推奨に活用すること。
- 70%のPYが日本とASEANについて学んだことをそれぞれの学校で共有すること。

#### タイムライン

2017年12月～2018年4月：企画

2018年5月～6月：実施

2018年9月：プログラムの評価

\*プログラムの各段階でモニタリングを行う。

### J. シンガポール

シンガポールPYは、健康問題、主に糖尿病に対する関心を高めるために、“Mind Your Body”キャンペーンを企画する。NGOと共に既存の活動に取り組み、参加者と受益者に「東南アジア青年の船」事業を紹介する。

**プロジェクト名**：MIND YOUR BODY

#### 背景

- 2050年までに2人に1人のシンガポール人が2型糖尿病になる。
- 肥満の発生を減らし、早い段階でのスクリーニングを強化し、病気への対策を向上させることに着目した保健省の複数年計画War on Diabetes（糖尿病撲滅キャンペーン）と提携。

**対象**：収入の少ない家庭の子供達

#### 概要

- カリキュラム：運動、栄養、睡眠、テレビゲーム機・携帯電話などの画面を見ている時間に重点を置いたインタラクティブな6つのセミナー
- 場所：地区のコミュニティーセンター
- パートナー：スポーツと健康に関連した政府機関（国）、家族と社会事業センター、地元の青年ボランティア（人）、スポンサー企業（民間）

#### 期待される成果

- 知識を得る
- 前向きな姿勢
- 健康的な生活習慣の選択

#### タイムライン

2018年1月：プロジェクトの企画、パートナーへの売り込み

2018年1月～2月：セッション資料の準備

2018年2月：マーケティングと広報

2018年3月：Mind Your Bodyの試験運営開始

2018年3月～9月：プログラムの効果と将来の改訂版プロ

グラムの実現可能性についての再検討

2018年9月～：将来の「東南アジア青年の船」事業参加者とともに継続

### K. ベトナム

ハノイのキムドン小学校で5年生200名を対象に、ASEAN-Citizen Festivalを開催する。このお祭りは、日本とASEAN地域の基本知識と、プレゼンテーション、創造力、メディアリ・テラシーなどの統合スキルのトレーニングを提供することを目的としている。また、100冊の本とIT設備を学校の図書館に寄付することも計画している。

**プロジェクト名**：EMPOWERING ASEAN CITIZENS

#### 背景

- 幼少期におけるASEANについての認知度の低さ
- 発展格差（ベトナムと他国を比較して）
- 統合スキルの弱さ

#### 目的

- 日本とASEANについて刺激を与え認識を高めること
- 統合スキルを啓発すること
- IT設備へのアクセスを提供すること

**対象**：9～10歳の200名の小学生（ハノイ・キムドン小学校）

**概要**：1日ワークショップと学校への設備の寄付

- 本及びIT設備の寄付
- ワークショップ（ASEANクイズ、メディア・リテラシー、パブリック・スピーキング、創造力）
- 文化パフォーマンスと共有

#### タイムライン

企画と場所の確認：済み

2017年12月15～18日：事業計画の準備：ワークショップの資料準備

2017年12月19日：イベント実施

2017年12月20～21日：プロジェクト評価、振り返りと対策

#### 期待される成果

有効性：80%の生徒（160名）が日本とASEANについての知識と不可欠なスキルを身につけていること。  
アクセス可能性：800名の生徒が新しい設備を積極的に利用していること。  
社会意識：メディアを通して20,000名の人々に届くこと。  
拡張可能性：全国規模で更に二つの学校でプロジェクトモデルを実行する（2018年）。